

東京国立文化財研究所年報

1997年度

東京国立文化財研究所

年報の発刊にあたって

東京国立文化財研究所の年度ごとの研究活動のあらましは、これまで『東京国立文化財研究所要覧』によって報告されてきた。1952（昭和27）年4月に、国立博物館の所属施設であった美術研究所が文化財保護委員会の附属等機関として独立し、芸能部と保存科学部を設置して東京国立文化財研究所となり、研究分野が拡大するとともに、文化財保存という現実の行政に深く関わるようになった。

それを受けて、最初の『要覧』は1955（昭和30）年に1955年度版が刊行されている。『要覧』には①研究所の沿革、②機構、③研究活動、④施設、⑤刊行図書、⑥職員、⑦当研究所関係法規並びに規定の7項目が立てられた。研究活動については研究者各人の研究課題を簡単にあげ、その業績を目録として示すほか、複数の研究者が協力し合って行う共同研究・総合研究・機関研究については、その研究方法と成果がかなり詳しく解説されている。この後、当研究所がさらに部門を増やしたことから、『要覧』の編集方針は、研究活動の報告を部門ごとに纏められるようになったという変更があるものの、内容的に見れば当初の編集方針は今日まで継承されているといえる。

しかし、この間、行政に対する改革の大きな動きがあり、当研究所も1988（昭和63）年濱田所長の時に、研究所の組織と事務事業の見直しを行った。研究活動については文化財保存の懇談会において外部の専門家による評価を受けることになり、例年、年度末に行われてきた。「文化財保存の懇談会」とは、1970（昭和45）年度から当研究所と文化庁との間で、文化財の保存に関わる研究の情報交換と研究活動の円滑化を図るために「文化財保存科学懇談会」が開催されるようになった。そして、1973（昭和48）年に修復技術部が設置されたことを機に会の名称が文化財保存の懇談会にあらためられたものである。懇談会で研究評価を受けるようになったのは、それまで懇談会で文化財の保存に関する研究成果の概要報告を行うことがあったからであるが、これによって、懇談会の性格は少なからず変わり、研究評価が中心的な議題となった。ともあれ、研究評価を受けるのであるから当然これに必要な説明資料を用意することになるが、『要覧』はこの懇談会の説明資料に拠りながら、年報としての意味を持たせて編集されていたのである。

ところで、時代は組織や団体に情報の公開を求め、説明する責任を問うている。当研究所の国際文化財保存修復協力センターがニューズレターをつくり、国際関係の研究や事業等の動きについて紹介するようにしたのも、このような時代の動きにいささかでも応じるためであった。

それよりも自らの機関の活動について多くの人々に知っていただくことは機関の経営戦略に関わることであると思う。要は社会的な存在意義を自ら明らかにするということである。当研究所は『美術研究』・『芸能の科学』・『保存科学』という三種の機関研究誌を持っているが、当研究所の活動の概要を伝える『要覧』は、今述べた意味においてより重要視されてよい。

しかし、翻って『要覧』を当研究所の活動の全容を伝える『年報』として見てみると、若干不足するところがある。当研究所の研究活動は文化財保護行政と深く関係していることから、文化財の保存修復に直接関係する技術指導や調査協力が少なくなく、また文化財の保存の国際的連携を進めるため、研究活動は世界に向けて展開しており、この現況を社会に伝えることも必要だからである。研究所の研究活動を明らかにすることは研究所の研究活動を強化することにつながり、将来への展望を開くことにもなるはずである。これが『要覧』を改めて『年報』として刊行する理由である。内容についてはまだ意を満たすまでにいたっていないが、大方の叱正を得て更に改善と充実を図りたい。

1998（平成10）年12月

東京国立文化財研究所
渡 邊 明 義

東京国立文化財研究所 年報 1997 年度

目 次

年報の発刊にあたって

1. 機 構

1. 組 織 図	1
2. 組織の概要と職員	2
(1) 庶 務 課	2
(2) 美 術 部	2
第一研究室	2
第二研究室	2
(3) 芸 能 部	3
演劇研究室	3
音楽舞踊研究室	3
民俗芸能研究室	3
(4) 保存科学部	3
化学研究室	3
物理研究室	3
生物研究室	3
(5) 修復技術部	4
第一修復技術研究室	4
第二修復技術研究室	4
第三修復技術研究室	4
(6) 情報資料部	4
文献資料研究室	4
写真資料研究室	4
(7) 国際文化財保存修復協力センター	5
企 画 室	5
環境解析研究指導室	5
保存計画研究指導室	5

2. 研究活動

1. 各部の研究活動	6
美術部	6
芸能部	7
保存科学部	8
修復技術部	9
情報資料部	10
国際文化財保存修復協力センター	11

2. 研究一覽	12
3. 中長期研究計画・特別研究	14
4. 受託研究	46
5. 文化財保存修復に関する国際交流促進事業	49
6. 文部省科学研究費補助金による研究	53
7. その他の共同研究	68

3. 個人の研究業績

	72
--	----

4. 事業

1. 研究集会など	85
(1) 国際研究集会	85
(2) アジア文化財保存修復セミナー	88
(3) 各種の研究協議会	89
1) 文化財保存修復研究協議会	89
2) 国際（アジア）文化財保存修復研究会	90
(4) 各種の研究会・講演会など	91
2. 調査指導など	94
(1) 所外経費による調査指導	94
(2) その他の調査指導	97
1) 文化財の材質に関する調査	97
2) 美術館・博物館等館内の環境調査	98
3) 文化財の虫害等被害に対する調査	100
4) 文化財の修復に関する調査指導	100
(4) 講習会等への協力	101
3. 研 修	102
(1) 「紙の保存修復」国際研修	102
(2) 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修	104
(3) 海外学術調査員及び研究者のための保存修復講座	106
(4) 博物館学実習	107
4. 文化財修復協力	108
(1) 在外日本古美術品保存修復協力事業	108
5. 講座など	110
(1) 公開学術講座	110

(2) 夏期学術講座	112
(3) 能楽技法講座	113
6. 大学院教育	114
7. 出版	115
(1) 定期刊行物	115
1) 美術研究	115
2) 芸能の科学	115
3) 保存科学	116
4) 日本美術年鑑	116
(2) シンポジウム等の報告書	117
1) 国際研究集会プロシーディングス	117
2) アジア文化財保存修復研究会報告書	119
(3) その他	120
1) 国際文化財保存修復協力センターニューズレター	120
(4) 研究成果等の出版物	121
1) 東京国立文化財研究所所蔵 X線フィルム目録I ―考古資料編―	121
2) 上野忍岡遺跡群東京国立文化財研究所新宮予定地点発掘調査報告書	121
8. 公開・出品	122
(1) 公開	122
1) 黒田記念室	122
2) 資料閲覧室	122
(2) 黒田清輝巡回展	123
(3) 所蔵作品等の貸与	123
(4) 展覧会への協力	124
9. 年度内主要事業一覧	125

5. 研究交流

1. 職員の海外渡航	126
2. 招へい研究員等	129
(1) 海外	129
(2) 国内	132
3. 海外研究者等の来訪	137
(1) 来訪研究員	137
(2) 表敬訪問	137

6. 主な所蔵資料

1. 図書資料	138
---------	-----

(1) 美術関係図書	138
(2) 芸能関係図書	138
(3) 保存科学・修復技術関係図書	138
2. その他	139
(1) 美術関係資料	139
(2) 芸能関係資料	139
(3) 保存科学・修復技術関係資料	139

7. 研究所関係資料

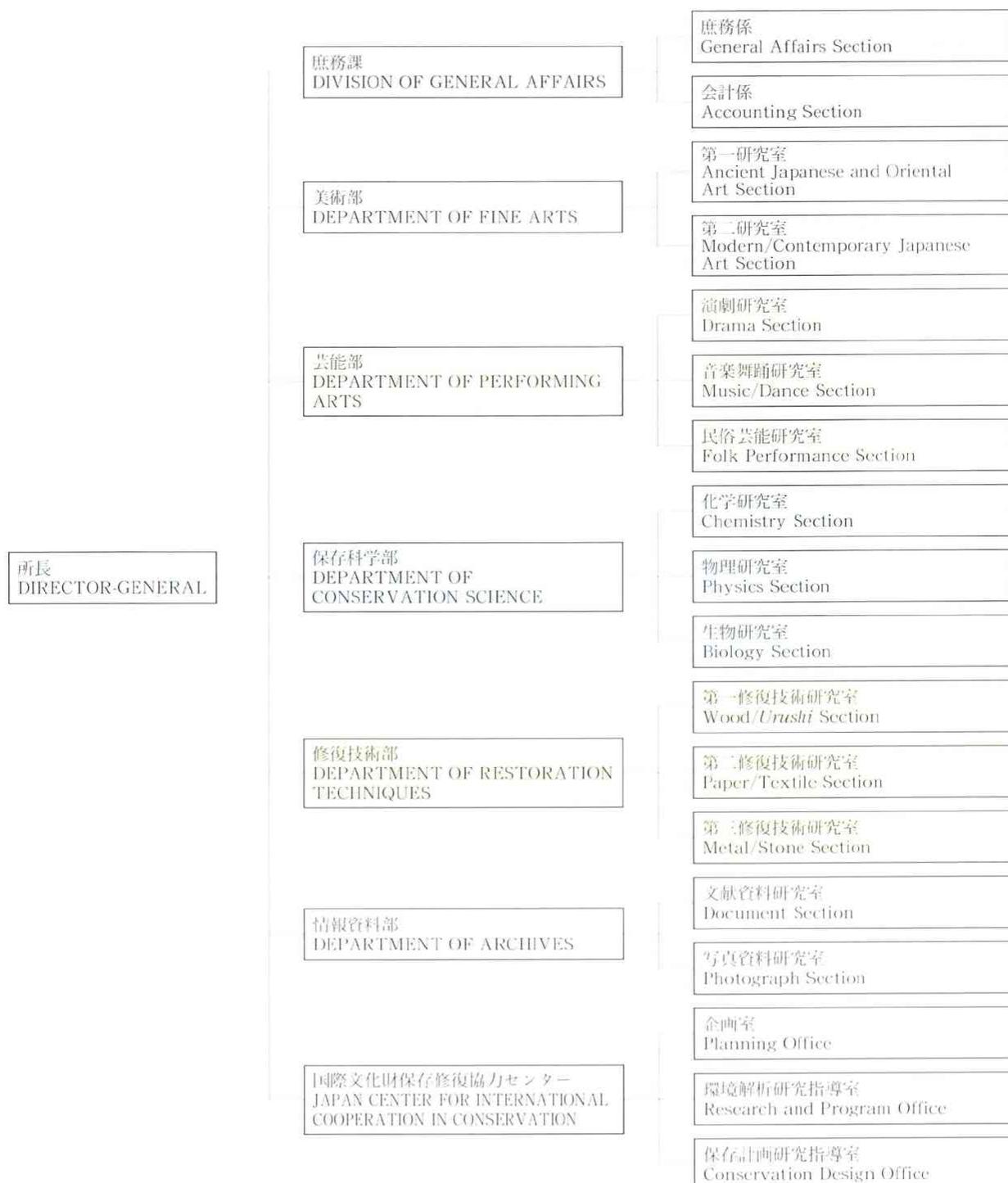
1. 設立の経緯	140
2. 年代別重要事項	140
3. 歴代所長	143
4. 名誉研究員	144
5. 予算	145
6. 関係法規	147

1. 機 構

1. 組 織 図

東京国立文化財研究所

TOKYO NATIONAL RESEARCH INSTITUTE OF CULTURAL PROPERTIES



2. 組織の概要と職員

所 長 渡邊 明義（美術史）

(1) 庶務課

課 長	與那原 進
課長補佐	長谷川 洋一
庶務係長	小 関 仁 志
庶務主任	飯 田 猛 継 ^{*1}
事務補佐員	松 本 洋 子
事務補佐員	小 林 芽 生
事務補佐員	武 田 知 子 ^{*2}
事務補佐員	中 道 文 子 ^{*3}
会計係長	横 山 直 樹
会計係員	真 鍋 浩 二 ^{*4}
事務補佐員	時 田 真 理
事務補佐員	後 藤 由 希 子
事務補佐員	村 上 浩 子
事務補佐員	塚 本 麗
労務補佐員	菊 池 廣 吉

*1 1997（平成9）年10月1日着任。

*2 1994（平成6）年10月1日から1997（平成9）年12月19日まで在職。

*3 1998（平成10）年1月1日から1998（平成10）年3月31日まで在職。

*4 1997（平成9）年10月1日着任。

(2) 美術部

日本・東洋の古美術ならび日本の近代・現代美術とこれらに関連する西洋美術について基礎的な調査研究をすすめ、その成果の公表を行っている。

第一研究室 江戸時代までの日本美術および東アジア地域の美術に関する調査研究ならびに資料収集、公表を行っている。

第二研究室 明治以降の日本近代美術とこれに関連する西洋美術および日本近世の洋風美術の調査研究、ならびに現代美術の動向に関する資料の収集と調査をすすめ、その成果の公表を行っている。

美術部長	鶴 田 武 良（中国絵画史）
主任研究官	島 尾 新（日本中世絵画史）
主任研究官	山 梨 絵美子（日本近代絵画史）
主任研究官	岡 田 健（東洋彫刻史）
第一研究室長	中 野 照 男（東洋絵画史）
第二研究室長	田 中 淳（日本近代絵画史）
調 査 員	河 田 明 久（日本近代美術史）

(3) 芸能部

無形文化財・無形民俗文化財としての日本の伝統芸能を対象に、とくに技法・演出に関する実際的な調査研究をすすめ、その成果の公表を行っている。

演劇研究室 歌舞伎・浄瑠璃など古典演劇の演技演出について、歴史的な考察と現在の伝承への検討を行い、あわせて中国演劇についても調査研究を行っている。

音楽舞踊研究室 古典音楽・舞踊・能・狂言の技法、演出について、伝承と文献の両面から調査研究をすすめている。

民俗芸能研究室 全国に分布する民俗芸能と民俗行事を実地に調査し、それらの保存継承に資するために必要な研究を行っている。

芸能部長	蒲生郷昭(日本音楽史)
演劇研究室長	鎌倉恵子(日本近世演劇)
音楽舞踊研究室長	羽田昶(日本中世演劇)
研究員	高桑いづみ(日本音楽史)
民俗芸能研究室長	中村茂子(民俗芸能)
調査員	細井尚子(中国演劇)
調査員	石井倫子(中世芸能)
調査員	串田紀代美(民俗芸能)

(4) 保存科学部

文化財の材質・構造やそれを取り巻く環境を様々な科学的方法で調べて、保存の現場や美術史、考古学など歴史研究に役立つ研究とその成果の公表を行っている。

化学研究室 青銅や鉄など金属製文化財を中心に、各種のX線分析装置や鉛同位体比分析装置などを用いて、材料・錆の化学組成や原料産地などを明らかにする研究を行っている。

物理研究室 温湿度・空気汚染などを測定して文化財公開施設における保存環境を評価し、文化財の劣化を防止するための研究と、X線・赤外線などを用いた非接触調査手法の開発を行っている。

生物研究室 生物が原因となった文化財の劣化の機構を調べ、防除する研究を行っている。現在はとくに、環境に被害を与えることの少ない防除法の開発に力を入れている。

保存科学部長	三浦定俊(物理計測)
主任研究官	佐野千絵(光化学)
化学研究室長	平尾良光(無機化学)
研究員	早川泰弘(分析化学)
物理研究室長	石崎武志(地球科学)
生物研究室長事務取扱	三浦定俊(物理計測)
研究員	木川りか(生物化学)
調査員	山野勝次(応用昆虫学)
客員研究員	千葉光一(分析化学)

(5) 修復技術部

文化財の修復に関する調査研究、科学的修復方法の開発研究とその応用をすすめ、その公表を行っているが、社会的環境の変化によって保護の必要が生じた近代の文化遺産の保存・修復研究も行っている。さらに文化財保護の国際協力として、文化財修復の国際研修や在外日本古美術品の修復協力などを実施し、国際的な責務を果たしている。

第一修復技術研究室 工芸品・建造物など、木材や漆を主な材質とする文化財の修復に関し、科学的・技術的な研究をすすめ、その成果の公表を行っている。

第二修復技術研究室 紙と布を素材とする文化財の修復技術を研究している。

第三修復技術研究室 建造物・考古資料・美術工芸品など、金属・石材、その他無機材質を主材料とする文化財の修復に関し、科学的・技術的研究をすすめるとともに、最近では近代の文化遺産の保存・修復研究についても積極的に行い、その成果の公表を行っている。

修復技術部長	増田 勝彦 (装漬技術)
主任研究官	川野邊 渉 (高分子化学)
主任研究官	尾立 和則 (装漬技術)* ¹
第一修復技術研究室長	中里 壽克 (漆芸技法)
第二修復技術研究室長	松本 修自 (建築史)* ²
第二修復技術研究室長事務取扱	増田 勝彦 (装漬技術)* ³
技術補佐員	坂本 雅美
第三修復技術研究室長	青木 繁夫 (考古学)
技術補佐員	犬竹 和
客員研究員	松田 史朗 (腐食工学)

*1 1997 (平成9) 年9月30日退職。

*2 1997 (平成9) 年9月30日まで。

*3 1997 (平成9) 年10月1日から1998 (平成10) 年3月31日まで兼任。

(6) 情報資料部

文化財に関する研究資料の作成・収集・整理・保管・閲覧等の業務を行い、さらに当研究所各部所掌の研究資料に関する情報の統合化をはかっている。

文献資料研究室 文化財に関する図書・雑誌、調査研究活動によって収集された研究資料各種の整理・保管・閲覧を行っている。また日本・東洋古美術関係の文献目録の作成とともに文献データベースの開発を行っている。

写真資料研究室 研究用写真資料の作成・収集・整理・保管・閲覧を行うとともに、各研究者の調査活動に協力して研究資料を撮影し、資料の充実につとめている。また美術史研究への画像処理技術の応用および画像情報のデータベースに関する研究を行っている。

情報資料部長	松島 健 (日本彫刻史)* ¹
主任研究官	井手 誠之輔 (東洋絵画史)
主任研究官	長岡 龍作 (日本彫刻史)

文献資料研究室長	米 倉 迪 夫 (日本中世絵画史)
研 究 員	勝 木 言 一 郎 (東洋絵画史)
事務補佐員	中 村 節 子
写真資料研究室長	鈴 木 廣 之 (日本近世絵画史)
専 門 職 員	野久保 昌 良 (美術写真)
調 査 員	玉 蟲 敏 子 (日本絵画史)
客員研究員	伊與田 光 宏 (情報工学)

*1 1998 (平成10) 年2月27日逝去。

(7) 国際文化財保存修復センター

世界の文化財の保存・修復に関する国際的な研究交流、保存事業への協力、専門家の養成、情報の収集と活用等を実施し、文化財保護における国際的な責務を果たしている。

企 画 室 国際協力事業の企画・運営、諸外国や関係機関との連絡・調整等の事務を行っている。

環境解析研究指導室 世界の文化財の保存・修復に関する調査研究を進め、また国際協力事業の技術的内容についての調査・指導を行っている。

保存計画研究指導室 経済・社会・文化など、文化財を取り巻くさまざまな環境や、人材養成のあり方などについて、幅広い視点からの調査研究を行っている。

センター長	宮 本 長 二 郎 (建築史)
企画室長	中 島 健 次
企画係長	松 下 冬 樹
(併 任)	吉 野 貴 子
調 査 員	大 江 佐 知 子
調 査 員	松 原 美 智 子
環境解析研究指導室長	西 浦 忠 輝 (材料改良学)
(兼 任)	松 本 修 自 ^{*1}
研 究 員	朽 津 信 明 (地質学)
事務補佐員	二 神 葉 子
保存計画研究指導室長 ^{*2}	松 本 修 自 (建築史) ^{*3}
客員研究員	松 本 健 (考古学)

*1 1997 (平成9) 年9月30日まで兼任。

*2 保存計画研究指導室は1997 (平成9) 年10月1日に設置。

*3 1997 (平成9) 年10月1日着任。

2. 研究活動

1. 各部の研究活動

美術部

美術部は、日本および東アジアの美術に関する調査研究と資料の収集をすすめ、その成果の公表を行っている。美術部は2室より構成され、第一研究室は江戸時代までの日本美術および東アジアの美術の研究調査を行い、第二研究室は明治以降の日本美術の調査研究を中心に、これに関する西洋美術の基礎的な調査、さらに現代美術の動向に関する資料の収集と調査を行っている。

美術部の研究調査は各時代にわたり、絵画、彫刻、工芸の各分野の作品について、作品そのものと文献資料の両面から実証的な研究をすすめている。本年度は、美術作品の実証的研究としては、「明治後期から昭和初期の美術団体、内外博覧会に出品された作品およびその作家の研究」（中長期研究計画）、「美術に関する基礎資料の研究—日本絵画史年記資料集成・鎌倉後期彫刻の基準作品資料・室町時代水墨画資料」（中長期研究計画）、「中国仏教美術基準作品調査研究」（中長期研究計画・特別研究）の3テーマを研究の中心に据えて、関連領域の作品を含め、精力的に調査、研究を行った。調査にあたっては、光学機器等を利用した科学的鑑識法を積極的に活用している。また、近年におけるコンピューター技術の進展、普及にともない、新たなデジタル画像処理技術をとりいれ、これまで行ってきた光学的作品分析の精度を高める努力をしている。さらに、近年、研究領域の多様化と拡大にともない、新たな美術史研究の可能性が強く求められているなか、美術部では、情報資料部と共同で研究会や協議会等を開催しながら、当研究所がこれまでに蓄積してきた研究資料の活用を基盤とした研究者間のネットワークづくりをすすめ、美術史学の新しい課題と方法を提供し、日本における新たな美術史研究の方向性を示唆できるようにつとめている。

実証的な研究と並行して、美術作品および美術に関わる諸現象を社会的なコンテキストの中で問い直すことによって、美術に関わるさまざまな問題を解き明かす研究を行っている。「東アジア美術における造形と社会」（中長期研究計画）では、古代における空間意識と作品の機能、請来画像の意味とその機能、美術作品の流通と価値観の形成、技術や素材からみた美術など、多様な視点を設定して、研究を進めている。「日本における美術史学の成立と展開」（中長期研究計画・文部省科学研究費補助金による研究）では、明治20年代以降、国家の制度や機構と密接な関係を維持しながら、日本の文化的ナショナルアイデンティティの構築に寄与してきた美術史学の歴史をふりかえることによって、美術史学の今日的課題と今後の可能性や展望を明確にしつつある。本年度は、第21回文化財の保存に関する国際研究会「今、日本の美術史学をふりかえる」（1997(平成9)年12月3～5日）を情報資料部と共同で開催し、美学、近代史、国文学など他領域の研究者を含めた3つのセッションで、この問題を多角的に論じ合った。

また美術部では、調査研究の一環として、美術研究のための基礎資料の収集とその集成を行っている。「日本近代美術の発展に関する明治後期から昭和初期の基礎資料集成」（特別研究）は、おもに大正期を中心に各美術団体の展覧会出品目録を収集調査し、これをもとに同時代の美術界の動向を総合的に分析、研究することを目的にしている。本年度は、他機関所蔵の目録等を複写収集し、所蔵資料の補完につとめながら、研究成果として『大正期美術展覧会出品目録』（仮称）の刊行をめざし、一部データ入力と整備をはじめた。

美術部は、海外に関わる調査研究として、日本芸術文化振興会より研究助成を受けた文化財保存修復学会の委嘱により、「海外所在日本美術品調査」を行っている。主として、米国の美術館等が保管する日本美術品を悉皆的に調査研究し、報告するもので、「在外日本古美術品保存修復」事業の基礎資料としても活用されている。

美術部は、これら調査研究を通じて、さまざまな作品のデータや研究情報を収集し、今後の研究に資すべき高度な研究資料として整理している。これら研究、調査、資料の整理、公開、公刊などは、情報資料部との緊密な協力のもとにすすめられている。

調査研究の結果は、機関誌『美術研究』（1932(昭和7)年創刊）やその他の学会誌に発表し、研究報告書も随時刊行している。また現代美術の動向に関する資料の収集と研究の成果は、毎年、『日本美術年鑑』（1936(昭和11)年創

刊)として刊行している。さらに、研究成果の一部を広く一般の理解に資するために、情報資料部と共同で、毎年1回、公開学術講座を開催している。

なお、美術部は黒田清輝の遺産に基づいて創立された美術研究所を前身とする。現在も黒田清輝の作品やその他関連資料を保管し、毎週1回(木曜午後)、黒田記念室(本館2階)において公開し、さらに1977(昭和52)年以降、毎年1回、他美術館等との共催で、巡回展として「近代日本洋画の巨匠 黒田清輝展」を開催している。またインターネット上の当研究所のホームページでは、「黒田清輝記念室」を設け、その芸術の理解を深められるよう、黒田に関する研究情報の公開をすすめている。

芸 能 部

芸能部は、無形文化財・無形民俗文化財としての日本の伝統芸能を対象に、実際的な調査研究をすすめている。研究目標としては、諸芸能の史的展開、理念、構造、技法、演出などに関する基礎研究を行うと同時に、無形文化財・無形民俗文化財の指定、選択等の行政に対応すべく、諸芸能の現状を把握し、保存と継承のあるべき姿を追求するよう努めている。研究の成果は、刊行物(『芸能の科学』『音盤目録』『日本舞踊譜』)、夏期学術講座、公開学術講座などによって公表してきた。

また芸能部では各種芸能の技法を、録音・録画・スチール写真などの形で記録することを、重要な業務としてきた。現地での実況記録ばかりでなく、実技者を当研究所に招き、部員の企画のもとに特別に演技や演奏を依頼して、芸能部の舞台や録音室で行った記録も少なくない。演じた瞬間に消え去るのが宿命である芸能(無形文化財)では、これらの記録はきわめて貴重で、研究資料として部員が活用しているほか、所外の研究者の利用にも供している。さらに、求めに応じて書籍、視聴覚メディアなど、各種刊行物に掲載され、あるいは収録された記録もあり、これらは、研究者ばかりでなく一般市民の役にも立っている。とくに東大寺修二会の調査をはじめとする寺事(寺院行事、寺院芸能)の研究は当芸能部が先鞭をつけた分野であり、その成果の一部であるレコード「東大寺修二会観音悔過(お水取り)」は、1971(昭和46)年度芸術祭優秀賞を受賞している。技法の記録は、今後も引き続いて行いたいと考えている。

芸能部は、演劇研究室・音楽舞踊研究室・民俗芸能研究室の三室によって構成されているが、日本の伝統芸能は、多くの種目が演劇・音楽・舞踊の要素を併せ持っているので、錯綜した諸芸能の相互交流の様相を明らかにするため、広い視野から課題を設定するようにしている。

1997(平成9)年度は、7本の中長期研究計画を策定したが、①「翁の技法集成」と②「近代歌舞伎の伝承に関する研究」の2本は共同研究とした。能と歌舞伎はともに日本の伝統芸能の中核を占める種目であり、総合的、多面的に取り組む必要があるからである。とくに「翁」は能・狂言の役者が伝承する演目のなかで最も古い芸態を残し、民俗芸能、近世芸能をはじめ日本芸能全体に多大の影響を及ぼしている。また近代歌舞伎の伝承についても、脚本や狭義の演技のみを対象とするのではなく、興行制度、音楽、小道具など広い視野から考察する必要性を感じている。①については、1997年度の夏期学術講座のテーマを「翁(式三番)の種々相」とし、部員全員がそれぞれの専攻分野から発表を行い、「翁」と歌舞伎舞踊の関係については部外者(丸茂美恵子日本大学講師)の発表も交えた。②については、中村又五郎氏の芸談聞取り、権藤芳一氏を講師とする研究会「上方歌舞伎の伝承」、浅原恒男氏を講師とする研究会「歌舞伎音楽の現状」、神山彰氏を講師とする研究会「近代テクノロジーと歌舞伎の変質」、鑑賞芸能の伝播した一つの形である黒森歌舞伎の調査を行った。

その他の中長期研究計画、③「元禄期の浄瑠璃・歌舞伎の研究」(鎌倉)は元禄期の歌舞伎・浄瑠璃と先行芸能の関わり、④「日本音楽の伝承に関する研究」(蒲生)は語り物の一種としての説経、⑤「近現代における能楽技法の伝承に関する研究」(羽田)は狂言謡の変遷、⑥「伝統的唱歌の研究」(高桑)は能管の唱歌、室町末期の音楽事情、世阿弥自筆本の表記、⑦「芸能に用いられる武器の研究」(中村)は花祭りの舞と神事、翁舞と方堅めについての研究であり、それぞれ事実上の個人研究であるが、③は演劇研究室、④⑤⑥は音楽舞踊研究室、⑦は民俗芸能研究室としての研究に収斂する。

また「地方に残る雅楽・能楽の古楽器研究」(高桑)は、文部省科学研究費助成金による他機関の研究者との共同研究で、地方の寺社に残された未調査の鼓胴と横笛を対象に、雅楽から能楽に至る楽器の変遷過程を明らかにしようとする。

保存科学部

保存科学部は文化財の材質・構造・技法及び劣化機構に関する研究を行うとともに、文化財のおかれている保存環境の研究も行っている。またそれらの研究を基に、文化財保存の現場に生かせる技術開発を行っている。すなわち文化財の産地推定など自然科学的手法による歴史的研究と文化財保存のための科学研究を軸としている。化学研究室は青銅や鉄などの金属製文化財を中心に、各種の分析装置を用いて材料・錆の組成や原料産地などを明らかにする研究を行い、物理研究室は温湿度・空気汚染などを測定して、文化財公開施設における保存環境を評価し、文化財の劣化を防止する研究と、X線・赤外線などを用いた非破壊検査手法の開発を行っている。また生物研究室は生物が原因となった文化財の劣化機構を調べ、防除のための研究を行っている。

研究テーマの設定に当たっては、①行政施策面からの必要性、②学問分野における先端性と発展性、③博物館など保存現場からの要望などを考慮し、化学、物理、生物の研究室ごとに中長期の研究テーマを設定して研究を進めている。

○中長期研究計画・特別研究「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」

行政施策と保存現場からの強い要望に基づいた研究として、物理研究室を中心とした「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」がある。この研究は国指定文化財の公開（文化財保護法第53条）に関わる研究として文化庁美術工芸課と密接な連絡を取りながら進めているもので、これまでに室内汚染物質の問題、美術館用免震装置の問題、ハロンに代わる消火剤の問題などを取り上げてきた。当初は一般研究費を利用して研究を行っていたが、1995（平成7）年度から特別研究として予算措置された。関連した研究が文部省科学研究費補助金などを利用して実施されている。

○中長期研究計画・特別研究「無公害な文化財生物劣化防除法の研究」

オゾン層破壊防止のために行政上の緊急性を持って実施されている中長期研究が、生物研究室を中心にした「無公害な文化財生物劣化防除法の研究」である。1997（平成9）年のモントリオール議定書締約国会議で、2005（平成17）年に先進国では臭化メチルの使用を全廃することになり、来年1月から使用量の25%削減が始まる。臭化メチルは文化財の殺虫燻蒸に広く利用されている薬剤であるため、文化財の保存に関する研究部を持った唯一の国立研究機関として、臭化メチルに代わる薬剤や代替法を文化財材質や人間の健康への影響も考慮し、関係機関と連絡を取りながら研究が行われている。この研究も当初は一般研究費を用いて行っていたが、1997（平成9）年度から特別研究として措置された。

○中長期研究計画「古代東アジアにおける青銅製品の変遷に関する研究」

国際的な学問の広がりや先端性を持って進められている中長期研究が、化学研究室を中心にした「古代東アジアにおける青銅製品の変遷に関する研究」である。この研究では日本国内の青銅資料に関する研究（文部省科学研究費補助金-基盤研究C 一般）だけでなく、過去に行ったアメリカ、スミソニアン研究機構との共同研究をさらに発展させて、中国の社会科学院と共同で中国古代青銅器に関する研究（文部省科学研究費補助金-国際学術研究）を進めている。

○その他

この他、中長期研究計画として上がっていない重要な研究として「文化財保護に関する日独学術交流」に基づいた、漆工品の保存に関する研究をあげることができる。この研究は文部省科学研究費補助金（国際学術研究）により「漆・ニス等伝統的天然樹脂塗膜の劣化と保存に関する研究」（1993～95年度）、「文化財の微量試料分析法の開発」（1996～98年度）と、主に輸出漆器の保存に関する研究を、修復技術部及び外部の研究者と物理研究室を中心に行ってきた。研究を通じて、これまで知られていなかったドイツ国内の輸出漆器を多く発見し、その保存についてドイツ側研究者の意識が高まって来たことから、今後の海外所在日本美術品調査に寄与することが期待されている。

修復技術部

修復技術部は、従来、伝統的修理材料および技法の解明と新たな修復材料・技術の開発を大きな柱として研究を行ってきた。しかし、近年、文化財を取り巻く社会的環境の急激な変化に伴って、1) 文化財の積極的な活用に耐え得る保存・修復技術の開発、2) 新たな保護対象である近代の文化遺産などの保存・修復の概念と技術の開発、3) 環境悪化による文化財への影響の評価と対策などが強く求められるようになった。従来の保存・修復技術に加え、さらに過酷な条件下での文化財の維持を可能にする技術、近代の文化遺産ではこれまで対象としてこなかったゴムやコンクリートなどの材質や橋梁・トンネルなどの巨大な規模に対応できる技術、環境悪化の影響では従来見られなかったタイプの劣化状況に対応できる技術が、それぞれ必要となってきた。これに加えて、世界文化遺産登録などに見られるような文化財分野での国際協力が進行するにつれ、世界各国から文化財の保存・修復への援助や研修の要請も増大の一途をたどっている。その多くは現地の特殊事情を勘案した保存・修復技術の開発・研究が必要であり、現地指導も含めて当部の業務の大きな部分を占めている。以上のような問題意識から修復技術部では以下に述べるような研究テーマを設定して研究を実施している。

中長期研究計画

○「文化財における環境汚染の影響と保存修復法の開発研究」

重要文化財島根県仁風閣や国宝東大寺金銅八角灯籠などの文化財に対して、酸性雨や大気汚染ガス等による深刻な被害が起きている。その影響を調査し、対策を立てるために、鎌倉市高德院（国宝鎌倉大仏）、東大寺、重要文化財島根県日御碕神社に観測ステーションを設置して、気象および環境汚染物質の測定を行っている。鎌倉大仏では、環境汚染物質の輸送経路が明らかになり、大仏表面の錆の発生状態との相関関係を見出すことができた。また赤外線域を含む画像解析により、大仏表面にみられる経年変化の解析システムを開発中である。東大寺については国宝金銅八角灯籠の保存を視野に入れた環境測定などを行っている。1996（平成8）年度より、韓国国立文化財研究所と共同研究を行っており、環境汚染物質の測定方法の共通化や修復材料の耐久性試験などを実施している。

○「焼付漆の研究」

焼付漆の技法は、古くから建築金具や金属工芸品の防錆あるいは下地作りとして行われてきた。現在、伝承されている焼付漆の技法はその実態が良くわかっていないことが多い。この技法について科学的なメスを入れ、実態を明らかにして文化財保存に観点から技法を確立することを目的として研究を行っている。現在、焼付漆を行っている工房の技法を調査し、それに基づいて試験試料を作成し、漆種類と焼付温度の違い、漆の焼付温度と塗膜硬度および硬化速度との関係、付着性、耐久性試験等の研究を実施している。

○「近世輸出工芸品の実証的研究」

欧米の美術館において日本工芸品に対する関心が高まるのにもない、その保存および修復に関する問い合わせが多くなっている。特に漆などの近世輸出工芸品は、泥下地で製作されるなど従来の文化財とかなり違った方法で製作されたものが多く、その修復は難しいものである。また一般的に、わが国の漆工芸品の修復は、漆を使用して行っているが、欧米ではワックスなどを使用している。ワックスなどを使用して修復した漆製品をふたたび漆を用いて修復することはかなり困難なことである。このような問題を解決するために実際の修復および欧米の修復家との技術交流を通じて実証的な研究を実施している。

このほかに国際交流研究ないし事業として「敦煌文化財の保存修復に関する日中共同研究」、「紙の保存修復国際研修」、「在外日本古美術品保存修復協力事業」などを担当し、国際文化財保存修復協力センターに協力している。その他、文化財の保存修復を行う上で基本的な情報整備を行うために当部が関わった修復や重要文化財の修復記録のデータベースの構築を図るとともにX線写真等のデータベース化もっており、その一部は『東京国立文化財研究所所蔵X線フィルム目録』として公刊されている。

情報資料部

情報資料部は、前身となる美術部資料室が行ってきた美術に関する研究資料の作成・収集・整理・保管・閲覧等の業務を拡充発展させるとともに、当研究所における5部およびセンターの活動に関わる研究資料の情報の統合化を図ることを研究活動の目的としている。当部はこれらの研究資料を広く内外研究者の利用に供し、文化財に関する研究資料センターとしての役割を果たしてきている。

近年の学術情報の増大化と多様化にともない、これらの現況に対応できる資料の効率的活用を図ることが新たな課題となっている。当部では、こうした課題に取り組むため、コンピュータを導入し、研究データの生産・蓄積・活用を一貫したシステムのもとで行う体制を整えてきた。また、逐次、所蔵研究資料のデータ化を進め、その活用の質的向上を図るとともに、出版物とインターネットのホームページ等を通して研究資料の公開につとめている。また客員研究員や外部から招へいした研究者を交えた研究会や協議会を開催し、文化財に関する研究情報の共有化についても提言を行っている。

当部では、長期研究計画として「美術情報処理システムの研究—データの共有化を中心として—」（1989～98年）、中期研究計画として「美術情報における語彙の研究（検索辞書システムの研究）」（1994～98年）と「デジタル画像データの蓄積と活用に関する基礎的研究」（1994～98年）の、3つの柱を中心にして研究を行っている。

長期研究計画は、当部の研究活動の中核に位置づけられる研究で、将来の文化財研究情報の共有化をめぐる環境の変化を視野にいれ、逐次、システムの整備と強化を図ることを目的としている。また2000（平成12）年度の新営後に予定されるシステムの再構築に対し、その計画・立案を準備する役割も担っている。

2つの中期研究計画は、長期研究計画にしたがって、情報資料部を構成する文献資料研究室と写真資料研究室がそれぞれ中心となって行っている。

文献資料研究室は、文化財に関する図書・雑誌、調査研究活動によって収集された各種研究資料の整理・保管・閲覧を行うとともに、日本・東洋古美術関係の文献目録の作成と文献データベースの開発を行っている。各年ごとの文献目録は『日本美術年鑑』（美術部）に掲載し、これを一定期間ごとに総合・増補した、『日本・東洋古美術文献目録』を刊行している。中期研究計画「美術情報における語彙の研究」は、現在進めている1966（昭和41）年～1985（昭和60）年分の編集作業と関係し、文献から抽出された検索語彙間の関連付けを行い、有効かつ円滑な文献検索の実現を目指している。その成果は当部の文化財情報全般の検索システムに統合される。

写真資料研究室は、美術工芸品を中心とした研究用写真資料の作成・収集・整理・保管・閲覧を行うとともに、各研究者の調査研究活動の一環としてさまざまな写真撮影を行い、資料の充実につとめている。また美術研究所の創立以来、60年あまりにわたって蓄積されてきた写真原板のデジタル化をすすめ、中期研究計画「デジタル画像データの蓄積と活用に関する基礎的研究」にしたがって、文化財研究への画像処理技術の応用と画像情報のデータベースに関する研究を行っている。

国際文化財保存修復協力センター

文化財は人類共通の遺産であり、国家、民族を越えて、その保存・修復に当たらなければならない、そのためには国際協力が不可欠である。この意味で、多くの文化財を有し、文化財保護のための体制が整い、研究、技術の進んでいる我が国が果たす役割はますます増大し、世界各国からの協力要請も年々増加している。

国際文化財保存修復協力センターは、世界の文化財の保存・修復に関する国際的な研究交流、保存修復事業への協力、専門家の養成、情報の収集と活用等を実施し、文化財保護における国際的な責務を果たすことを目的として、1995（平成7）年4月に、従来の国際文化財保存修復協力室を拡充し発足した。今後は研究所内のみならず、国内の関係機関との連携協力を推進し、世界各国の文化財の保存・修復に関する国際協力の我が国における中心的な存在として、その組織の一層の充実が求められている。

当センターにおいては、在外日本古美術品保存修復協力事業、「紙の保存修復」国際研修、アジア文化財保存セミナー、国際文化財保存修復研究会、文化財保存のための国際研究集会、日中共同研究—敦煌莫高窟の保存修復などさまざまな国際交流事業およびこれらの事業に伴う海外からの研究者の招へい、職員の海外への派遣を円滑にすすめるための企画、連絡調整、調査業務などを行っている。また、ニュースレターを発行し、国際交流事業を中心とした事業に関する広報活動を行っている。

当センターの調査研究としては、次の3つのテーマを中長期研究計画として進めている。

「世界、特にアジア諸国における文化財保存に関する情報の収集」

「屋外石（レンガ）造文化財の劣化と保存修復に関する調査研究〔国内〕」

「屋外石（レンガ）造文化財の劣化と保存修復に関する調査研究〔海外〕」

これらの中長期研究計画は、実際には次に掲げる研究題目（予算）により遂行されている。また、経常研究費により、世界の文化財の保存修復に関する情報の収集、整理、公開に力を入れている。

- ・特別研究「古建築の保存を目的としたレンガの劣化現象と保存対策に関する調査研究」
- ・文化財保存修復に関する国際交流促進事業等「文化財の保存修復技術に関する国際共同研究—文化財の保存修復に用いられる新材料—」
- ・科学研究費補助金「タイ国レンガ造遺跡の劣化現象と保存対策に関する調査」
- ・科学研究費補助金「文化財の保存を目的としたレンガの劣化現象と保存対策に関する調査研究」
- ・科学研究費補助金「建造物保存修復の理念及び方法に関する研究」

本年度は、レンガ造を中心とした屋外文化財の劣化現象と保存対策に関する調査研究が特に進展し、海外ではタイ国のアユタヤ遺跡、スコータイ遺跡における日・タイ共同による現地調査、研究および実際の保存修復パイロット事業を行い、多くの成果をあげた。これらの中長期研究計画の他に、日本古代建築に関する研究や彩色顔料の分析調査等でも成果をあげている。以上の調査研究は保存科学部、修復技術部との緊密な連携のもとに進めている。

2. 研究一覽

中長期研究計画一覽

当研究所における組織としての研究活動は中長期研究計画に基づいて進められている。これは組織としての研究活動の方向性を示すもので、毎年春に研究に関わる部・センターによって策定されている。本年度における当研究所の中長期研究計画は下記一覽の通りである。

明治後期から昭和前期の美術団体、内外博覧会に出品された作品およびその作家の研究	14
美術に関する基礎資料の研究—日本絵画史年記資料集成・鎌倉後期彫刻の基準作品資料・室町時代水墨画資料	15
日本における美術史学の成立と展開	16
中国仏教美術基準作品調査研究	17
東アジア美術史における造形と社会	19
近代歌舞伎の伝承に関する研究	20
元禄期の浄瑠璃・歌舞伎の研究	21
「翁」の技法集成	22
日本音楽の伝承に関する研究	23
近現代における能楽技法の伝承に関する研究	24
伝統的唱歌の研究	25
芸能に用いられる武器の研究	26
文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究	27
無公害な文化財生物劣化防除法の研究	28
古代東アジアにおける青銅製品の変遷に関する研究	29
焼付漆の研究	30
近世輸出工芸品の実証的研究	31
文化財における環境汚染の影響と保存修復法の開発	32
美術情報処理システムの研究—データの共有化を中心として—	33
美術情報における語彙の研究（検索辞書システムの研究）	35
デジタル画像データの蓄積と活用に関する基礎的研究	36
世界、特にアジア諸国における文化財保存に関する情報の収集	37
屋外石（レンガ）造文化財の劣化と保存修復に関する調査研究 [海外]	38
屋外石（レンガ）造文化財の劣化と保存修復に関する調査研究 [国内]	40
敦煌文化財の保存修復に関する日中共同研究	41

特別研究一覽

特別研究とは中長期研究計画と緊密な関係を持ち、特に国による予算が講じられた研究である。

中国仏教美術基準作品調査研究	17
近代歌舞伎の伝承に関する研究	20
文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究	27
無公害な文化財生物劣化防除法の研究	28
日本近代美術の発展に関する明治後期から昭和初期の基礎資料集成	43
文化財における環境汚染の影響と修復技術の研究協力	44
文化財の保存を目的としたレンガの劣化現象と保存対策に関する調査研究	45

受託研究一覧

金唐革紙分析調査	46
塑像如信上人坐像の修復処置研究	47
装潢材料の生化学的研究	48

文化財保存修復に関する国際交流促進事業一覧

スミソニアン研究機構との国際研究交流	49
敦煌文化財保存修復に関する研究協力	50
文化財の保存修復技術に関する国際共同研究	51
文化財の保護に関する日独学術交流	52

文部省科学研究費補助金による研究一覧

研究種目	審査区分	研究課題名	
基盤 A	一般	文化財収蔵庫の庫内空気環境調査法の公定化のための基礎的研究	53
基盤 A	一般	日本における美術史学の成立と展開	54
基盤 A	展開	古建築の保存を目的とした石材強化保存用合成樹脂の物性評価	56
基盤 C	一般	環境の湿度変化が国宝中尊寺金色堂に与えた影響に関する研究	57
基盤 C	一般	古代日本の動物遺体の DNA 解析	58
基盤 C	一般	弥生時代青銅器の産地推定	59
基盤 C	一般	地方に残る雅楽・能楽の古楽器研究	60
基盤 C	一般	多孔質材料の凍結・融解による劣化機構の解明とその防止対策	61
国際学術研究		タイ国レンガ造遺跡の劣化現象と保存対策に関する調査	62
国際学術研究		古代東アジアにおける青銅器の変遷に関する考古学的・自然科学的研究	63
国際学術研究		中国砂漠地帯における文化財の保存対策に関する研究	64
国際学術研究		文化財の微量試料分析法の開発	65
国際学術研究		建造物保存修復の理念及び方法に関する研究	66
特別研究員奨励費		絹などのたんぱく質資料の劣化状態の Py-GC-MS による評価手法の確立	67

その他の共同研究一覧

海外所在日本美術品調査	68
シリア・アインダーラ神殿遺跡保存修復プロジェクト	70

凡 例

課題名・目的・成果・研究組織の順に配列した。

研究代表者には○印をつけた。

また必要に応じて備考を付けた。

3. 中長期研究計画・特別研究

明治後期から昭和前期の美術団体、内外博覧会に 出品された作品およびその作家の研究

目 的

日本近代美術史は学会・美術館等を中心に拡大し、かつ多様化してきており、実証的調査研究に基づく作家、作品の史的立場づけの再検討が求められている。本研究は個々の作家・作品について調査研究を行うとともに、美術団体・展覧会活動・美術雑誌等の基礎資料の収集、データベース構築を目的とし、前記の状況に寄与しようとするものである。

成 果

明治後期からは美術団体が急激に増加し、小団体や短命であった団体のなかにも日本近代美術史上、重要な動きを示したものが多数認められる。そのため、本年度は当研究所の所蔵する美術団体目録の総リストを作成し、欠けているものを東京都現代美術館、兵庫県立近代美術館等で複写して資料収集した。本研究の成果は既刊の『明治期美術展覧会出品目録』等へ続く刊行物として公刊することをめざしており、その編集に先立つ作業として、すでに論文や公刊図書のかたちで報告されている美術団体に関する調査・研究についての情報の収集もあわせて行った。また大正期の動向を史的に位置づけるため、昭和期の資料収集にも着手し、その一環として、1940年代から現代に至る美術展覧会および美術文献資料を量・質ともに拡充するべく、現代美術資料センター（笹木繁男氏主宰）からの寄贈受け入れを開始し、相当数の資料を当研究所に搬入した。

個々の作家・作品研究としては、情報資料部と共同で、藤島武二・青木繁・久米桂一郎・萬鉄五郎等の自筆文献、日記等をデータベース化する作業に着手し、研究支援およびインターネット上での情報公開等の方法について、関連する美術館と研究を重ねる予定である。また黒田清輝に関しては、鹿児島市立美術館・岩崎美術館の所蔵する黒田筆の絵画について赤外線撮影など光学的な方法をも用いて調査したほか、例年の黒田清輝巡回展に際し、近年の調査・研究の成果を反映した図録を新たに作成した。

研究組織

- 田 中 淳（美術部）
- 山 梨 絵美子（美術部）

備 考

一部特別研究

美術に関する基礎資料の研究

—日本絵画史年記資料集成・鎌倉後期彫刻の基準作品資料・室町時代水墨画資料—

目 的

- (1) 日本絵画史年記資料集成 10 世紀～14 世紀の継続
- (2) 鎌倉後期彫刻の基準作品資料の調査研究
- (3) 室町水墨画に関する基礎資料の調査研究

成 果

(1) 日本絵画史年記資料集成 15 世紀

本研究は『日本絵画史年記資料集成 10 世紀～14 世紀』（1984 年刊）を継承し、15 世紀版の作成・刊行を目的に始められた。本研究所情報資料部架蔵の展覧会図録から計 544 件の該当項目を収集し、これをもとにして 1996（平成 8）年度に「15 世紀絵画史年表」をまとめた。またこれと並行して本年度までに、1420 年代までの年記資料の解読作業をほぼ終えることができた。しかし、主に時間的な制約から、資料刊行までの残された作業を今後に委ね、本年度をもって研究を終了することにした。なお、収集資料は整理統合して、今後必要とされる研究の再開・継続に対応できるようにした。

(2) 鎌倉後期彫刻の基準作品資料の収集

1996 年度に調査した長野県諏訪市・仏法紹隆寺蔵不動明王像を題材に運慶一門に関わる資料を収集した。その研究成果は第 31 回美術部・情報資料部公開学術講座で発表した。

(3) 室町時代水墨画資料

本研究は、室町時代の水墨画に関する基礎資料の整備を目的として、1) 作品の調査・撮影、2) 画家別の関係資料と研究史の整理、を中心に外部の研究者の協力を得ながら行っている。また収集した資料はデータベース化を進めている。

本年度は、1998（平成 10）年秋に予定されている関東水墨画展（栃木県立博物館・神奈川県立歴史博物館）を視野に入れて、関東地方の水墨画に重点を置き、笠間稲荷美術館（笠間市）および華蔵寺（結城市）で所蔵作品の調査を行うとともに、「古河公方と水墨画」「郷目貞繁について」の題で研究会を行った。また前年度に調査した狩野家模本（東京国立博物館蔵）中の雪舟画約 600 点について写真・基礎データの整理を行った。

研究組織

- 島 尾 新（美術部） (3)
- 松 島 健（情報資料部）(2)
- 井 手 誠之輔（情報資料部）(3)
- 鈴 木 廣 之（情報資料部）(1)

日本における美術史学の成立と展開

目 的

西洋近代の学を範として1887（明治20）年前後に始まった日本の美術史学は、近代国家として西洋に認知されようとする国情を背景として、国家的制度や機構と密接な関係を維持し、日本の文化的ナショナルアイデンティティの構築に寄与してきた。今日、一般的に用いられる美術史の言葉や思考が、こうした美術史学の歴史のなかで形成されてきたことは、美術史研究者がひろく認識すべき問題となっている。

本研究は、このような問題意識にたち、明治以来の美術史学の歴史を振り返ることを通じて、美術史学の今日的な課題と可能性を問い直すことを目的とする。

成 果

本研究は美術に関する言説の歴史を振り返ることもつながるため、基礎となる資料の収集とその整理が必要となる。本年度は北海道大学所蔵「京都日の出新聞」マイクロフィルムから、美術および文化財関連記事を抜粋する作業を昨年に引き続いて行い、また19世紀後半に欧米で刊行された日本美術関係図書等の収集につとめた。

「美術」という外来の概念が日本に確立される以前に制作された物品が「美術」として位置づけられる過程を跡づけるため、明治期博覧会・展覧会に出品されたいわゆる「古美術品」の出品目録に注目し、資料のデジタル化を行った。とくに京都、和歌山、奈良等で開催された地域別の博覧会資料について調査を行った。

本研究に関わる研究会、研究集会としては、1997（平成9）年12月3～5日、第21回文化財の保存に関する国際研究集会「今、日本の美術史学をふりかえる」（於東京国立近代美術館講堂）を開催し、研究発表と討議を行った（詳細については文部省科学研究費補助金による研究「日本における美術史学の成立と展開」および国際研究集会の項を参照）。その開催に向け、美術部・情報資料部研究会として「和辻哲郎『古寺巡礼』と日本美術史」（鈴木廣之、97.4.30）、「東京国立博物館所蔵の明治以降公文書について」（東京国立博物館・安達直哉、97.11.5）等を行ったほか、国際研究集会終了後に同じく両部の研究会の場で各セッションの総括を行い（98.1.14, 21, 28）、さらに考察をすすめた。

研究組織

- 鶴田 武 良（美術部）
- 中野 照 男（美術部）
- 島 尾 新（美術部）
- 岡 田 健（美術部）
- 田 中 淳（美術部）
- 山 梨 絵美子（美術部）
- 松 島 健（情報資料部）
- 米 倉 迪 夫（情報資料部）
- 鈴 木 廣 之（情報資料部）
- 井 手 誠之輔（情報資料部）
- 長 岡 龍 作（情報資料部）
- 勝 木 言一郎（情報資料部）

中国仏教美術基準作品調査研究

目 的

日本の仏教美術を研究するには、その源流である中国の仏教美術を理解することが重要である。日本文化に大きな影響を与えた日本伝来品に加えて、近年は、中国においてさまざまな仏教遺跡の整備、調査、研究がすすめられたのにもよって、新たな資料が積極的に公開されている。本研究は、これら伝来品および新資料を対象として、基礎的な資料を収集し、中国仏教美術の体系を見直すとともに、その特質を、図像・様式・技法の面から明らかにすることを目的とする。

成 果

(1) 研究協力者会議の開催

中国仏教美術、朝鮮半島の仏教美術、日本における中国仏教美術の受容の諸相について研究実績をもつ研究者を招いて研究協力者会議を開催し、研究の発表を行うとともに、問題の所在や今後の研究方向について討議した。本年度の研究発表者は次の4名。

勝木言一郎（東京国立文化財研究所）「敦煌壁画にみる迦陵頻伽の図像について」

中国では初唐期以降に作例が見られる迦陵頻伽の典拠を明らかにし、西域や中国の諸遺跡における同図像の展開の跡を位置づけるとともに、迦楼羅、緊那羅、共命鳥との図像的な差異を明らかにした。

山名伸生（京都精華大学）「沂南画像石をめぐる二、三の問題」

後漢末期の沂南画像石を、図像の構成原理、様式の源流、仏教図像との関わりという観点から分析し、図像構成や配置に当時の死生観が反映されていること、三種の様式が山東の地方様式、洛陽の伝統的中央様式、洛陽の新しい中央様式を映すこと、如来形人物等の図像や墓室の形態に初期仏教の受容の跡が見られることを明らかにした。

菊竹淳一（九州大学）「高麗時代の裸形男子倚像」

朝鮮人民共和国ケソン市の高麗博物館に保管、展示される金銅製の裸形男子倚像が、高麗の太祖王建の肖像である可能性が強いことを指摘し、弥勒信仰を反映した造像であることなど、この像のもつ種々の問題点について考察した。

佐藤智水（岡山大学）「造像銘における北魏の仏教信徒団体（合邑・邑義）について」

北魏時代の仏像の造像銘の記述形式、造像内容、造像者の身分、造像の地域的傾向などを分析し、北魏の国家宗教としての仏教の動向と、造像のための地域的信徒団体（邑義）との関係について明らかにした。

(2) 現地調査

東寺観智院の五大虚空蔵菩薩像の調査を継続するとともに、山口県立美術館で開催された『高麗・李朝の仏教美術展』を機に、高麗・李朝の仏教絵画の調査を行った。また京都国立博物館・奈良国立博物館に寄託されている大徳寺蔵の五百羅漢像の調査を実施した。

(3) 基礎資料の収集

情報資料部が保管する拓本の整理、研究を継続し、併せて写真資料の整理を行った。

(4) データベースの作成

欧米に所在する中国仏教彫刻のデータベースを作成し、その活用法を検討した。

(5) 研究成果の公表

調査研究や研究協力者会議の成果を『美術研究』等に発表した。

岡田健「東寺毘沙門天像—羅城門安置説と造立年代に関する一考察—」(『美術研究』370号)、松浦正昭「毘沙門天法の請来と羅城門安置」(同370号)。

研究組織

- 中野 照 男 (美術部)
- 島 尾 新 (美術部)
- 岡 田 健 (美術部)
- 松 島 健 (情報資料部)
- 米 倉 迪 夫 (情報資料部)
- 井 手 誠之輔 (情報資料部)
- 長 岡 龍 作 (情報資料部)
- 勝 木 言一郎 (情報資料部)



中国・四川省の仏教美術作品の調査 観無量寿経變相龕 唐時代末期 大足県北山石窟

東アジア美術史における造形と社会

目 的

造形がそれ自体で自律的に発展するという旧来の美術史観は、すでに見直されつつあり、美術を社会的コンテクストのなかで再評価する作業が始まっている。本研究は個々の美術作品と美術に関わる諸現象を、社会と文化、さらに具体的な人間の営為のなかに置き直し、そのなかで生み出された関係に着目することによって、美術のもつさまざまな問題を捉えなおそうとするものである。

成 果

(1) 古代的空間意識と彫像の機能

東寺講堂五菩薩坐像・八幡三神坐像、広隆寺講堂阿弥陀如来坐像を対象に、平安時代初期の彫像の安置のあり方とその機能を問題とした。東寺講堂像については護国儀礼の場としての講堂の機能との関わり、八幡三神像については石清水八幡勧請との関連、広隆寺像については地藏・虚空蔵菩薩と併置される意味をそれぞれ考察した。

(2) 唐本・宋本画像の意味と機能

日本に請来された宋元仏画のなかから、①古来より中国仏画と混同されてきた高麗仏画について、華嚴思想との関係からその領分を明らかにするとともに、②高麗仏画や日本の中世仏画とされてきた作例のなかに、逆に中国仏画が混入している可能性を指摘し、このような作品をめぐる国籍の混同は、いずれも東アジア地域の個々の美術作品を中国・朝鮮・日本という3つの地域分類の枠組みに対応させて分類・思考する近代の美術史学の方法に起因することを明らかにした。さらにこうした概念上の「境界」に位置する作品のアイデンティティを、オリジナルな社会的・文化的文脈のなかで明らかにする作業が、相互に関連したダイナミックな東アジア絵画史の構築のための有効な視座と方法を準備することについて口頭発表した（第16回国際交流美術史研究会国際シンポジウムおよび第21回文化財の保存に関する国際研究集会）。

(3) 室町時代における美術の流通と価値観の形成

『室町殿行幸御節記』をもとに、室町殿会所に飾られた唐物のデータベースを作成し、各室の飾りのもつ象徴的機能の分析を開始した。また唐物の贈与と売買に関する史料の収集を継続し、贈与―売買連鎖のより具体的な分析の準備をすすめた。

(4) 技術と素材についての史的研究

『宮造法式の研究』（竹島卓一、中央公論美術出版）、『元代画塑記』（中国美術論著叢刊、人民美術出版社）等から、技法・素材に関する用語を採録した。

研究組織

- 島 尾 新（美術部）
- 中 野 照 男（美術部）
- 鈴 木 廣 之（情報資料部）
- 井 手 誠之輔（情報資料部）
- 長 岡 龍 作（情報資料部）

近代歌舞伎の伝承に関する研究

目 的

正統な演技の伝承等が危ぶまれている歌舞伎について、これまでの研究で欠落していた演技・演出の実際面、歌舞伎の音楽家や道具制作者にも目を向け、広い視野に立って現在の歌舞伎についての考察を行うものである。

成 果

今年度は1997年5月に重要無形文化財保持者各個指定（いわゆる人間国宝）に認定された中村又五郎氏を取材した。近代歌舞伎の演技・演出の大成者の一人である初代中村吉右衛門のもとで修業していた氏から、特に『一谷嫩軍記』の〈陣門・組打ち・熊谷陣屋〉を中心に取材した。各役の団十郎型と芝翫型の扮装・演出の相違、演技する際の心得、後見、ワキの役割等について、氏が吉右衛門から継承し、次代に伝えるべきものについての話を聞き取った。さらに氏が特に近年力を入れている、後継者育成に関してもその問題点が指摘され、今後の研究の課題の一端が示された。『一谷嫩軍記』についての話は『芸能の科学』26号に掲載した。

また昭和35年から48年までに歌舞伎座・国立劇場で上演された歌舞伎の舞台写真の一部をフォトCD化する試みを行った。これによりビデオが普及していなかったこの時代の貴重な記録を研究者に提供する方法の一つとなり得ることが確認できた。今後は撮影されている俳優の肖像権について関係者と検討が必要である。

研究組織

- 蒲 生 郷 昭（芸能部）
- 鎌 倉 恵 子（芸能部）
- 羽 田 昶（芸能部）
- 高 桑 いづみ（芸能部）
- 中 村 茂 子（芸能部）

備 考

一部特別研究

元禄期の浄瑠璃・歌舞伎の研究

目 的

浄瑠璃と歌舞伎の作者である近松門左衛門を中心に、当時の作者・演者・観客の関係について総合的に考察する。

成 果

今年度は元禄時代の歌舞伎・浄瑠璃が先行の芸能から受け継ぎ、独自に発展させたものの例として、歌舞伎の「式三番」をとりあげ、以下のような考察を行った。

近世以前から儀式に用いられていた「式三番」は歌舞伎でも儀式に用いられていた。しかし次第に「役者評判記」にも取り上げられ、単なる儀式ではなく鑑賞するものとなり、個々の役者が、自分を観客にアピールする機会の一つでもあり、新人役者の紹介をかねて演じることもあった。劇書の挿し絵からその振りは能楽に近かったように見受けられ、リズムカルな三番叟に観客の人気は集まった。

「式三番」は劇中芸能にも用いられている。単に面のみが利用される場合もあるが、「式三番」の詞章や振りをういたものも散見される。この中には打ち掛け姿で舞うものや、滑稽味のある場面もあって、このような近世的な変化が、新たないわゆる三番叟の舞踊を生み出す要因の一つにもなったであろう。

近松門左衛門の作品にも「式三番」のパロディーが用いられている。これは観客が「式三番」を知って、そのパロディーを楽しんだことを示している。近松作品以外にも、「式三番」を利用した作品は多くあったと推定できるが、現存の資料が少なく明確な答えは打ち出せない。ただし当時の人々にとって「式三番」はかなりなじみのあるものということではできよう。

この研究は「式三番覚書き—いわゆる元禄歌舞伎の時代—」と題して『芸能の科学』26号に発表した。

研究組織

○鎌倉 恵子(芸能部)



歌舞伎役者が演じる「式三番」『難波立聞昔話』より（『歌舞伎評判記集成』第1巻 岩波書店 所収）

「翁」の技法集成

目 的

「翁」は鎌倉時代から演じられ、現在、能楽師が伝承し上演する演目の中では最も古い芸態を残し、近世芸能・民俗芸能に及ぼした影響も大きい。しかし、従来、秘事として扱われ、譜は公開されず、流儀差も大きいので、技法の全容を捉えた研究は行われていない。本研究では、全役籍・全流派の譜を収集し、比較総合して、「翁」の全体像を把握することを目的とする。

成 果

本年度は、芸能部舞台において、狂言方大藏流の山本明直氏と同和泉流の野村万蔵氏との、それぞれ三番叟・千歳の実技（所作）を撮影収録し、型付けを収集し、技法に関する聞き取り調査を行った。

また技法の比較のため、京舞井上流の井上三千子氏による「倭文」その他の実技を、同じく芸能部舞台で撮影収録した。

前年度に加えて、三番叟と千歳については、大藏流の茂山家と山本家、和泉流の野村又三郎家と野村万蔵家と、同流ながら複数の異なる芸系の奏演を収録することができた。またすでに収録済みのシテ方五流の翁および観世・宝生の千歳の奏演を含めて、「翁（式三番）」の立ち方の技法をすべて収録したので、次に囃子方各役の技法収録に着手する。

研究組織

- 羽 田 稔（芸能部）
- 高 桑 いつみ（芸能部）
- 浦 生 郷 昭（芸能部）
- 石 井 倫 子（芸能部）



野村万蔵氏の三番叟



井上三千子氏の京舞。三番叟の型を取り入れた「倭文」。

日本音楽の伝承に関する研究

目 的

日本音楽は、日本の伝統芸能の例にもれず、伝承につれて変化する。変化の内容はさまざまであり、とくに近年では、あまり好ましくない変化も見られる。

この研究では、これまで音楽がどのように伝承されてきたかを追究し、併せて今後の伝承のあり方を考えたい。

成 果

1997（平成9）年度は最終年度として、三味線伴奏の語り物の一種である説経と、楽器の笛を取り上げた。

(1) 説経について

説経は、仏教音楽から出たもので、浄瑠璃より古い歴史を持つ。一時、浄瑠璃に圧倒されて衰退したものの、寛政のころ復活されて、現在でも一部で伝承されている。この研究では説経そのものではなく、長唄が摂取した説経について調査、追究した。その結果、長唄の説経は道行と関係が深いこと、うらぶれた境涯の表現に使うことが多いこと、調子は二上りが基本であること、歴史的にも長唄関係者と説経との接点が存在したことなどが明らかになった。

説経を取り入れた長唄の代表曲は「夜鶴綱手車」である。限られた範囲でしか伝承されていない小品だが、古い正本には「門説経」「説経落とし」「説経止め」などといった節章の記入がある。作曲された1765（明和2）年は、いわゆる後期説経の再興より20数年前になる。説経を取り入れた長唄としてもっともよく知られているのは、「勸進帳」の「げにげに～」の部分だが、その事実を記した江戸時代の記録は、ついに見出せなかった。

幕末から明治前半にかけての長唄作曲界を代表する11世杵屋六左衛門と2世杵屋勝三郎、それに3世杵屋正次郎は、期せずして説経を用いた曲をそれぞれに作っている。「望月」「安達が原」「横笛」である。

(2) 笛について

まず「日本書紀」「風土記」に見られる「笛」は、横吹きとは断定できないこと、日本で広く好まれる管楽器は、単式でダクトなしの構造のものに集中していること、この2点を確認した。そして、実技者の協力を得て、日本の重要な横笛各種に見られる、構造と技法の共通点と相違点を示し、同一の笛であっても曲種によって息の吹き入れ方を変えるなど、微妙な技法が駆使されていることを指摘した。

研究組織

○蒲 生 郷 昭（芸能部）

近現代における能楽技法の伝承に関する研究

目 的

能楽は中世芸能ではあるが、江戸期を経て近代以降もなお諸方面にわたって変化し続けている舞台芸術である。その変化の諸相のうち、とくに技法の伝承と演出のあり方に関わる事象を重点的な研究課題とする。

成 果

本年度はとくに狂言謡について考察した。狂言謡は、能の謡との共通点と相違点を微妙に持ち合わせている。能は謡で劇を表現する。詞章のすべてが謡である。謡といえども、台詞であり語りであるという性格、傾向が濃厚である。対するに狂言は、比較対的的には会話劇であり、せりふで劇を表現する。詞章はせりふを主とし、せりふとは別に謡が用いられる。したがって謡の部分は、能の謡に比べれば単純素朴に音楽的である。そして、狂言謡は様式的に多様であり、能の謡にない技法を有する。言い換えれば能謡の技法のほとんどを共有し、それとは別に狂言謡固有の音階・旋律・リズム様式を持っている。

狂言謡固有の小段の例として〔囃し物〕と〔イロ詞〕が挙げられる。

〔囃し物〕を含む狂言は「末広かり」「張蛸」「目近」「麻生」「三本柱」「昆布柿」「煎物」「松脂」「栗隈神明」「財宝」「塗附」(以上アシライあり)、「船渡賀」「釣針」「伊文字」「鈍太郎」「蝸牛」「鞍馬参」「右流左止」「鬼の継子」(以上アシライなし)である。アシライが入るのは祝言性の色濃い曲であり、その大部分には〔シャギリ〕が伴うこと、「伊文字」「鈍太郎」「蝸牛」なども古台本によればアシライが入り〔シャギリ〕を伴うことが注目される。リズム様式については、狂言ノリの謡の中、三字二拍の場合の拍子当たりが近古式の平ノリと同じであることがすでに指摘されているが、それと同様の現象が大部分の〔囃し物〕にも生ずる。すなわち〔囃し物〕は広義には平ノリに属する。一方、〔イロ詞〕を含む狂言は「宝の槌」「筑紫奥」「松囃子」「伊文字」「唐人子宝」「今参」「木六駄」「隠狸」「茶壺」「金津」「節分」「首引」「牛盗人」「磁石」である。このうち「松囃子」「唐人子宝」「節分」だけは、それぞれ〔ノリ地〕〔楽〕〔次第〕があるからアシライが入るが、〔イロ詞〕にアシライが入ることはない。〔イロ詞〕は、個々の狂言によって拍節的に謡う場合と非拍節的に謡う場合とがあるので、拍子合と捉えるか拍子不合と捉えるかは一概には決められない。拍節的に謡う場合には、これも近古式の平ノリと近似している。

〔囃し物〕はツヨ吟のフシで謡われ、〔イロ詞〕はフシとコトバの中間的な謡い方がされる。しかし、実際の奏演では、アシライと〔シャギリ〕の有無のことを別にすれば、〔イロ詞〕ふうの〔囃し物〕、〔囃し物〕ふうの〔イロ詞〕も生じている。なお、個々の曲例に即して以上のことを考えてみたい。

研究組織

○羽 田 昶 (芸能部)

伝統的唱歌の研究

目 的

芸能の伝承を支えてきた唱歌と伝書の両面から能・狂言の技法の変遷を探り、先行芸能との関連性も考察する。

成 果

(1) 能管の唱歌の変遷

能で用いる笛「能管」の音楽は、「オヒャーラー」「ホウホウヒ」といったように言語音を借用した唱歌で表され、伝承されてきた。唱歌は流儀によって、また時代によって微妙に異なるので、室町末期から現在に至る各流の唱歌を比較検討し、技法の変遷とあわせて考察した。成果は公開学術講座で公表した。

(2) 室町末期の音楽事情

室町末期は能の全盛期であったが、庶民の間では流行歌が謳歌され、歌舞伎もその初期の段階を迎えようとしていた。またキリシタン文化が移入し、戦国大名の中にはキリシタン音楽に関心を寄せた者も少なからずいた。同時代のことと音楽同士の交流も当然行われたはずである。そのような中でどのような音が実際に巷に響いていたのか、能の立場から調査を行った。成果は、キリシタン音楽の研究者と共同で、昭和音楽大学の生涯学習講座で発表した。

(3) 世阿弥自筆本の研究

能の大成者世阿弥は自作をはじめとして何作かのテキストを書き残している。その自筆のテキストを検討し、そこで用いられた表記の意図について考察した。その結果、「ハヤフシ」には従来の解釈とは異なる意図があったことを解明した。成果は第2回世阿弥忌セミナーおよび『芸能の科学』26号で公表した。

研究組織

○高 桑 　　いつみ（芸能部）

芸能に用いられる武器の研究

目 的

伝統芸能における採り物の意義と展開について、武器を中心に祭具・呪具から小道具への変遷について考察する。

成 果

(1) 花祭りの舞・構成と意義

奥三河の各地に伝承されている花祭りは多くの舞と神事によって構成されており、各演目と神事にはさまざまな場面で刀剣が用いられている。例えば、年齢別の青少年によって舞われる「三つ舞（14～17歳）」「四つ舞（20歳前後）」は、それぞれが「扇の舞・八剣の舞・本剣の舞」で構成されている。このような舞が持つ意味、各演目相互の関係、および神事との連動について、愛知県北設楽郡東栄町小林の花祭りを中心に、現行次第と記録に残された次第を参照しつつ考察し、『芸能の科学』26号で公表した。

(2) 民俗芸能にみる翁舞と方堅め

各地に伝承されている猿楽・田楽・神楽系芸能に、翁舞とともに組み込まれている〈地堅め・方堅め〉を意味する演目の中には、かつて翁猿楽が伝承していたと考えられる〈方堅め〉の呪術的な技法とその精神が、意図的にこめられている。その例として、山形県黒川能の「大地踏」、兵庫県土鴨川住吉神社神事舞の「リョウサン」、静岡県西浦の田楽の「地がため」「つるぎ」、長野県遠山地方霜月祭りの「火の王」「水の王」、その他。これら〈地堅め・方堅め〉を意味する演目は、長刀・太刀をさまざまにあつかった呪術であり、翁舞の〈方堅め〉の部分を実地的に変容させた演目であることを考察し、公表すべく準備を完了している。

研究組織

○中 村 茂 子（芸能部）



小林花祭り（愛知県北設楽郡東栄町）「四つ舞」（八剣の手）

文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究

目 的

各地に博物館・資料館などの文化財施設が建設される中、文化財にとって安全な保存・展示の科学的基準の明示が望まれている。本研究は、温度・湿度・照明・空気汚染をはじめとする広い項目にわたって、関係の研究者の協力を得ながら、その測定方法や評価方法を検討し、文化財の保存と公開活用に資することを目的とする。

成 果

この研究の特色は、博物館・美術館などの現場の抱える問題を基礎的な面から解決することを目的としながら、成果を簡潔な形で現場に活かし、また現場の声を次の第2次の研究に反映させるなど、研究と現場との有機的な結びつきを重視している点である。このため、各地域で資料の保存を担当している学芸員をメンバーとして研究会を催しており、本年度は第6回「文化財施設の計画に関する指導の現状」、第7回「展示ケースの Utility と Usability」のテーマでおこなった。

第6回のテーマは、文化財公開施設の計画時に行われている文化庁文化財保護部美術工芸課による指導内容の普及を目指すもので、指針の内容の根拠について詳細に説明を受けるとともに、各地域の保存担当学芸員と意見交換を行った。その中で、文化財の展示に適した展示ケースの特性として何が求められているのかを具体的に検討することとなり、第7回の研究会のテーマに取り上げた。

展示ケースに求められる機能としては、これまでは展示上のデザインが優先される傾向があるが、これに対して文化庁では防犯・防災面で資料を確実に保全できること、また当所では保存上の効能を持たせることを推奨してきた。これに加えて、学芸員が展示作業を行う上で安全かつ使いやすいことも重要であり、特に可動ケースについては移動にあたって安全が確保され、地震などへの対策が十分に考慮されていることが必要であることが確認された。

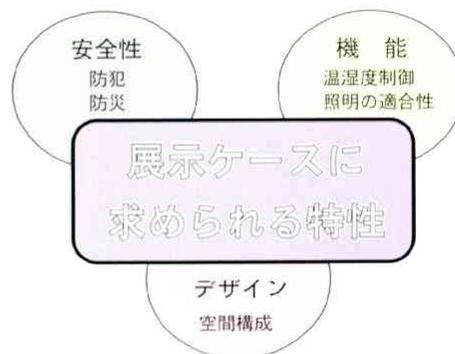
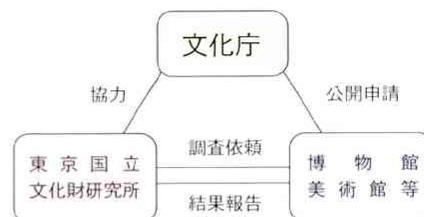
研究組織

- 三 浦 定 俊（保存科学部）
- 平 尾 良 光（保存科学部）
- 早 川 泰 弘（保存科学部）
- 石 崎 武 志（保存科学部）
- 佐 野 千 絵（保存科学部）
- 木 川 り か（保存科学部）
- 石 川 陸 郎（東京国立博物館）
- 大 塚 英 明（文化庁）

備 考

一部特別研究

国指定文化財の移動に 関する調査の協力関係



無公害な文化財生物劣化防除法の研究

目 的

オゾン層の保護のため、かねてより文化財燻蒸ガスとして広範に用いられてきた臭化メチルの全廃時期が1997年9月のモントリオール議定書締約国会議で2005年に前倒しとなることが決まり、これに変わる方法が以前にも増して緊急に求められている。本研究では、化学物質を主とする従来の方法に変わり、文化財材質にも影響が少なく環境や人体への影響も考慮した文化財生物劣化防除法の検討・開発を目指し、具体的な対処法の策定を目指すものである。

成 果

(1) 展示収蔵施設における生物被害およびその防除法の調査

初年度は研究会や個別調査などを通じて、展示収蔵施設等における実際の生物被害の状況を調査した。また欧米やアジア地域などで実践されている防除方法の調査を行った結果、世界的に虫害の総合防除管理（IPM（Integrated Pest Management））などを通じて生物被害を総合的な資料保存の一環として組み込み、化学物質だけに頼らない防除体制をつくる方向に進みつつあることが明らかとなった。

(2) 新たな虫害防除法に関する基礎研究

人体に安全かつ無公害な害虫防除法である脱酸素法について、プラスチックバッグを用いる方法に加え、従来の燻蒸装置を改変した不活性ガス処理装置（図1）を導入し、温度条件などを変えて殺虫効果を調べた。その結果、20℃、25℃、30℃では殺虫効果が大きく異なることが確認され、処理温度の適正な維持が極めて重要であることがわかった。

さらに欧米等で一部の材質に実践されつつある低温処理法（-20℃以下）、高温処理法（55℃程度）についても殺虫効果および殺菌効果を調べた。その結果、殺虫効果はきわめて良好であるが、カビ胞子についてはほとんど殺菌効果がないことが確認された。

また新たな防虫剤、防霉剤などが文化財材質に与える影響を系統的に調べるために、今年度より顔料・金属について標準試験サンプルを作製し、試験を開始した（図2）。現在、変色等の変化の評価を行っている。

研究組織

- 三 浦 定 俊（保存科学部）
- 木 川 り か（保存科学部）
- 山 野 勝 次（保存科学部）
- 佐 野 千 絵（保存科学部）
- 増 田 勝 彦（修復技術部）

備 考

一部特別研究



図1 不活性ガスによる殺虫処理装置



図2 顔料・金属に対する各種防虫剤、防霉剤等の影響試験

古代東アジアにおける青銅製品の変遷に関する研究

目 的

中国・朝鮮半島・日本など、東アジア地域における青銅製作技術の発達、青銅製品の生産・交流・消費の歴史を化学組成や鉛同位体比等の自然科学的な方法を利用して、理解しようとする。従来の考古学的な理解に加えて、自然科学的な方法を応用し、より幅広く、古代の青銅に関する歴史的な変遷を解明しようとする。

成 果

本研究計画は5年間を継続期間として予定する。資料としては各時代の違い、日本・朝鮮半島・中国という地域の違いがある。このため本研究では、

(1) 中国における銅資料

中国における銅文明の最も早い時期の二里头文化・殷墟文化からの青銅資料の測定を進めた。また同時期における揚子江流域の三星堆文化の青銅資料を測定した。これら資料の採取・測定には文部省科学研究費補助金（国際学術研究）を利用している。

(2) 朝鮮半島の銅資料

朝鮮半島における資料として中世の貨幣約50種に関して、鉛同位体比の測定を今年度、完了した。

(3) 日本における銅資料

日本に関して金属文化は弥生時代から始まることが知られている。そこで本研究においては最初の2年間は日本の弥生時代資料に焦点を絞り、銅剣・銅矛などの祭器、銅鏃・銅釦などの装飾品に関して、重点的にきめの細かい資料集めと測定を行った。今年度を含めた、次の2年間は古墳時代資料に焦点を集め、古墳時代の出土馬具や銅容器など、多様化し始めた青銅製品に対して測定を進めようとしている。

今年度は日本の弥生時代資料として、東京国立博物館所蔵の銅剣・銅矛など約30点、各県教育委員会所蔵の銅資料約20点等を初めとし、古墳時代資料を含めて約100点の鉛同位体比を測定した。今後は化学組成を測定できる資料を集めたい。

研究組織

- 平 尾 良 光（保存科学部）
- 早 川 泰 弘（保存科学部）
- 森 田 稔（文化庁）
- 井 上 洋 一（東京国立博物館）
- 難 波 洋 三（京都国立博物館）
- 柳 田 康 雄（福岡県教育庁）



二里头遺跡発掘現場

焼付漆の研究

目 的

指定建造物修理報告書に記載されている、建築物物に対する焼付漆技法の仕様には、数種の記述が見られる。焼付漆技法は、まだ具体的な技法調査が行われておらず、またその効果や物性についても未知である。焼き付け温度などの技法、および表面硬度や耐候性などの物性測定などにより、伝統技法調査の一環として、成果を修復現場に還元することを目的としている。

成 果

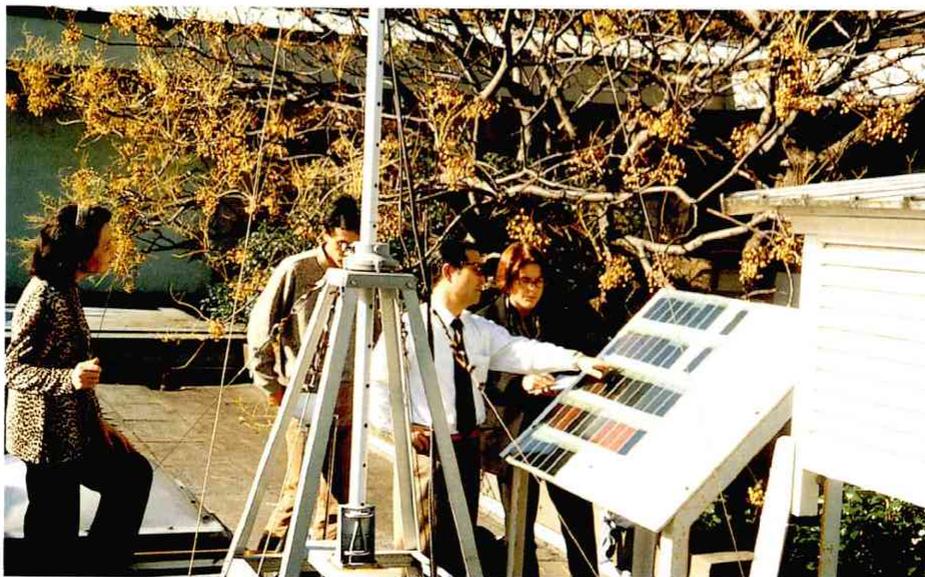
1996（平成8）年度は焼き付け漆技法を有する3工房で、塗布方法・焼き付け方法などの条件について調査を行い、調査結果に基づき作成した手板で、漆膜の硬度・光沢・色について解析した。1997（平成9）年度は漆の焼き付け温度と硬化速度、それともなう化学構造を検討した。また焼き付けた漆膜の金属に対する付着性について、漆の種類・焼き付け温度の違いによる検討を行った。

硬化速度は焼き付け温度が高いほど短縮される。120℃では240分を要する最高硬度が、270℃では10分で達する。文献による焼き付け温度は120℃から、工房での調査では240～300℃であった。また生漆と素ぐるめ漆を鉄板に塗布し、20℃での常温硬化と焼き付け温度120～300℃で作成した手板での漆膜の付着性は生漆270℃で焼き付けた漆膜が最も高かった。

なお焼き付け漆の耐候性についての研究は1998（平成10）年度に行う。

研究組織

- 中 里 壽 克（修復技術部）
- 加 藤 寛（東京国立博物館）
- 木 下 稔 夫（東京都立産業技術研究所）



鎌倉における焼き付け漆屋外曝露試験

近世輸出工芸品の実証的研究

目 的

海外所在の日本工芸品に対する関心の高まりの中で、海外美術館などから、所蔵工芸品に関する問い合わせが開始しているが、従来国内でも、近世輸出工芸品に関する調査は十分には進んでいない。

輸出された百数十年を経過して、損傷が顕著となってきたことから、在外日本古美術品保存修復協力事業の対象として、近世工芸品が日本に来る機会を捉えて調査を行うものである。

成 果

1997（平成9）年度は、ドイツの2ヶ所の美術館から3件の輸出漆工品を受け取り、修復事業を行っている。

ケルン東洋美術館の2件の作品は、「慶長18年」の墨書銘のある蒔絵螺鈿鞍と18世紀の蒔絵器局である。蒔絵螺鈿鞍は、前輪と後輪の外面に瓢箪の実を平蒔絵であらわし、隙間を牡丹唐草で埋める。牡丹唐草はいわゆる李朝螺鈿に見られる文様で、高台寺蒔絵から初音調度への移行期に李朝唐草が流行していたことを証明する基準作として貴重である。また蒔絵器局は桜や山水など日本の景観を描いた典型的な輸出漆器である。この器局には表面全体にワックスで覆おうヨーロッパ方式の保存修理が見られる。ワックスやシェラックなどで保存修理を受けた漆器は、表面にのこる塗料や修復箇所を一旦取り除いてから漆の修理を行う。アルコールやアセトンなどの溶剤試験で塗料の種類や下地材などを明確にする。日本国内での事例には見られない本格的な輸出漆器の修理として注目される。

ドレスデン市のピルニッツ城博物館の蒔絵花瓶一对は、高さ約65cmの大型の漆塗り花瓶である。花瓶は、口縁部・側面・脚部を分けて作り、繋ぎあわせて木地としている。花瓶の側面には、山水楼閣文様が高蒔絵であらわされている。このような蒔絵花瓶は1680年代にすでに輸出されはじめている。蒔絵も元禄年間のいわゆる常憲院時代の作風を強く示している。漆器の輸出が意外と早い時代にピークを迎えていたことを知らせる作品として貴重である。

研究組織

- 中 里 壽 克（修復技術部）
- 増 田 勝 彦（修復技術部）
- 尾 立 和 則（修復技術部）
- 佐 野 千 絵（保存科学部）
- 朽 津 信 明（国際文化財保存修復協力センター）
- 加 藤 寛（東京国立博物館）



桜蒔絵器局 ケルン東洋美術館蔵

文化財における環境汚染の影響と保存修復法の開発

目 的

環境汚染の原因となる酸性雨等で、屋外に展示している文化財が腐食したり、建造物の石灰岩が溶けるなどの被害が急速に増加している。この被害の実態調査を行うとともに、劣化と環境汚染の相関関係を把握し、文化財の特殊性にあった科学的調査および総合的修復技法の開発に関する国際共同研究を行うものである。

成 果

環境汚染物質が文化財に与える影響の調査フィールドとして鎌倉市高德院（国宝鎌倉大仏）・奈良市東大寺（国宝金銅八角灯籠）・鳥根県日御碕（重要文化財日御碕神社）に観測ステーションを設置して大気汚染ガスや酸性雨の汚染の程度とその季節的変動及び気象との相関関係を調査している。鎌倉大仏では、川崎や横浜方面から吹く北よりの風に乗って雨が降ることがわかり、大仏の模型を製作し風洞実験を試みたところ地形的関係から、この北よりの風は大仏の背中に当たり、下方に滞留することがわかった。汚染物質を運んでくる風の動きと大仏の錆分布に相関関係があることが判明した。また日御碕神社では、谷を吹き抜ける西風が、海を渡ってくる汚染物質や海塩粒子を直接神社に吹きあてることが観測によって証明され、それが神社の劣化部位と明らかに相関関係を有している。これらの結果を踏まえて西風の強い冬期間だけでも神社に風が当たらないように風避けを設置することを提案した。

環境汚染物質によって汚れた石造建造物などのクリーニングは大きな問題であり、レーザーを使用したクリーニング実験を行ってきた。その結果、環境汚染物質によって汚染された物質の状況に有効であることが判明した。

研究組織

- 増 田 勝 彦（修復技術部）
- 青 木 繁 夫（修復技術部）
- 川野邊 渉（修復技術部）
- 松 田 史 朗（修復技術部）
- 三 浦 定 俊（保存科学部）
- 石 崎 武 志（保存科学部）
- 朽 津 信 明（国際文化財保存修復協力センター）

備 考

一部特別研究



防錆処理の屋外曝露試験

美術情報処理システムの研究

—データの共有化を中心として—

目 的

人文科学における学術データベースの構築例の増大と、パーソナル・コンピュータの普及にともなう研究者個人によるデータ生産の日常化とが近年顕著である。一方、多様な目的・種類のデータ生産に有効利用できるデータベースの利用環境が十分に整備されているとは言いがたく、データの生産・利用に関する具体的システム像を多角的かつ総合的に検討することが強く求められている。本研究は、こうした視野に立ち、美術史の基礎資料のデータベース化と、広範な研究者による相互利用システムの確立を通じ、資料の共有化と研究支援環境の整備を具体化することを目的とする。

成 果

(1) 共有データの生産・蓄積

① 文献・図書データ

定期刊行物所載文献、所蔵図書データの入力を継続した。

② 美術史研究資料

『日本美術年鑑』のデータ化を継続し、10年間分9冊（1974(昭和49)年～1983(昭和58)年）を入力した。黒田清輝および白馬会関係資料として、浅井忠『木魚遺響』、久米桂一郎の日記および自筆文献、藤島武二自筆文献・青木繁自筆文献・萬鐵五郎自筆文献を全文入力した。

③ 画像データ

4×5インチ・カラーポジフィルム（2,550件）、X線フィルム（665件）をデジタル化し、CD-ROMを作成した。写真資料関連文字データの入力を継続した。

④ 近代美術基礎資料の所在調査ならびに収集

本年度は、佐賀県立美術館・佐野記念館・佐賀赤十字社で1867（慶応3）年のパリ万国博覧会関係資料、佐野常民資料について、兵庫県立近代美術館・京都文化博物館・大阪府立中之島図書館では博覧会関係資料、美術団体出品目録、美術雑誌について調査・収集を行った。

⑤ 貴重美術雑誌のマイクロフィルム化作業

情報資料部では資料保存の必要から、経年劣化の著しい明治・大正・昭和初期の貴重雑誌について、原本閲覧に代わるマイクロフィルムの利用をすすめている。本年度は、『大毎美術』『日本漆器新聞』のマイクロフィルム化を行った。マイクロフィルム化にあたっては、東京国立近代美術館・東京都現代美術館・京都国立近代美術館・兵庫県立近代美術館・大阪府立中之島図書館の協力を得て東京国立文化財研究所未所蔵分を補った。

⑥ 博覧会・展覧会データベースの作成

【万国博覧会出品目録】

「慶応3年パリ万国博覧会」「明治6年ウィーン万国博覧会」「明治9年フィラデルフィア万国博覧会」「明治11年パリ万国博覧会」「明治22年パリ万国博覧会」「明治26年シカゴ・コロンブス万国博覧会」「明治33年パリ万国博覧会」「明治37年セントルイス万国博覧会」「明治43年日英博覧会」の9つの万国博覧会に出品された新作美術工芸品についてデータベース化を行った。

【美術展覧会出品目録】

「日本美術協会展覧会」の出品目録のうち、明治21、22、24～30、35、38年開催分について出品された新製品のデータベース化を行った。

(2) パイロットシステムの構築

① 定期刊行物所載文献データベースおよび所蔵図書データベース検索システムの運用・評価を行った。

② ローカルエリアネットワークシステムの整備・運用・評価

マッキントッシュによる所内システムを拡充したほか、ネットワーク環境におけるデータベースの運用について実験を行った。

③ 画像データベース構築のための基礎実験

プロフォト CD マスターに入力した画像について、画質・容量等の諸条件を検討した。

④ 検索辞書システムの研究

検索のための見出し語約 3,800 件を抽出し、データベースを構築。検索語彙の枠組み作成の準備を行った。

⑤ インターネット環境におけるホームページの運用・評価

ホームページ全般についてデザインの一部変更を含む修正と拡充を行った。

各研究部のページは、自主的に随時更新が容易にできるシステムに変更した。

黒田記念館のページ全体を黒田研究のためのサイトと位置づけ、全体を展示室と資料室にわけ、所蔵黒田作品の公開を行うとともに、黒田関係資料（日記・自筆文献・年譜）の公開を進めた。

(URL=<http://www.tobunken.go.jp/kuroda/index.html>)

(3) 「共有化」環境の検討

① 「共有化」環境をめぐる諸問題についての研究会の開催

関連研究分野の研究者 3 名を招へいし協議を行った。

② 文化庁を中心とする文化財情報ネットワークシステムへの対応

ネットワーク環境の有効な活用と機器運用に関する保守環境を整備した。ホームページを通じ所蔵資料の公開を進めた。(URL=<http://www.tobunken.go.jp>)

③ データベースの有効利用

学術情報センター・国文学研究資料館などのデータベースについて、インターネット環境での利用を通じ、将来の所蔵データベース公開に向けた諸条件を検討した。

研究組織

- 松 島 健 (情報資料部)
- 米 倉 迪 夫 (情報資料部)
- 鈴 木 廣 之 (情報資料部)
- 井 手 誠之輔 (情報資料部)
- 長 岡 龍 作 (情報資料部)
- 勝 木 言一郎 (情報資料部)
- 中 村 節 子 (情報資料部)
- 玉 蟲 敏 子 (情報資料部)
- 田 中 淳 (美術部)
- 山 梨 絵美子 (美術部)

美術情報における語彙の研究（検索辞書システムの研究）

目 的

本研究所に蓄積される研究資料は多様な分野に及んでいる。これらの資料群は順次データベース化が進められている。これらのさまざまなデータベースに対しては、豊富な語彙群からなる検索辞書をもった一つの検索システムからアクセスできることが望ましい。

本研究ではこのような観点から、まず検索語彙に焦点をあて、美術史研究文献や文化財関係文献などを対象として語彙の収集と分析を行い、語彙の広がり、語彙相互の関連などの検討をふまえて検索辞書のモデルを作成することを目的とする。

成 果

(1) 語彙データベースの作成

採録済み文献から 1993～95 年までの 3 年間のデータから美術史および文化財関連の語彙約 3,800 を収集し、データベース化した。

これらをもとに文献量の多いジャンル、とくに絵画や彫刻の分野については作家名や尊像名などの固有名詞を見出し語として分類する方法を試みた。たとえば「阿弥陀浄土図」「阿弥陀来迎図」「観経变相」「法隆寺金堂阿弥陀三尊像」等の語に対しては「阿弥陀」という見出し語で一括した。

また絵画・彫刻以外のジャンルについてはデータ量からみて、おおむね既存のジャンルコードをそのまま用いることができるかと判断された。

(2) 語彙データベースにおける「見出し語」の検討

美術史および文化財関連の語彙約 3,800 をもとに、概念の位相、同義語間の相関などの関係を検討した。

これらの見出し語によってかなりの雑誌記事データを分類することができる。なお、今後の課題として「源氏物語絵巻」「法然上人絵伝」「地獄草紙」など、「物語」として一括されながらも、それぞれがさまざまな位相をもつ語彙群に対しては、データ利用者の観点に立ってさらに見直すことが求められる。

研究組織

- 米 倉 迪 夫（情報資料部）
- 松 島 健（情報資料部）
- 鈴 木 廣 之（情報資料部）
- 井 手 誠之輔（情報資料部）
- 長 岡 龍 作（情報資料部）
- 勝 木 言一郎（情報資料部）
- 島 尾 新（美術部）

デジタル画像データの蓄積と活用に関する基礎的研究

目 的

美術史研究においては、いうまでもなく作品に関する視覚情報が重要になる。一方、近年のコンピュータ開発は、デジタル画像データの利用を可能にしている。デジタル画像は、従来の写真による記録方法に比べ精度の点ではっきりと劣るものの、高性能コンピュータ処理による活用をはかれば、他の方法では得ることのできない能力が発揮される。本研究は、将来の実用化をにらみながら、デジタル画像データベースを中心にすえた画像データの蓄積と活用について見通しをつけようとするものである。

成 果

昨年に引き続き、写真資料研究室の保管する4×5インチ判カラーポジフィルムからプロフォトCDマスターを作成した。本年度は2,550枚を収録した。カラーフィルムは褪色等の経年変化が著しく、画像劣化のないデジタル画像に置き換えて保存することが望ましい。またプロフォトCDマスターはコダック社の製品規格だが、現在もっとも標準的な仕様といえ、画像データベースだけでなく、カラー印刷の原稿など将来の活用を考慮した場合、柔軟に対応できる。

このほか、前年に引き続き、科学研究費データベース刊行費による「有形文化財データベース」(研究代表者：東京国立博物館資料部・高見沢明雄)に参加し、X線フィルムをコンパクト・ディスクに記録した。本年度は、4ヶ切判の軟X線およびγ線665枚を収録した。仕様は、256階調グレースケールのCD-ROMとし、原稿1枚につき、430dpi(容量約20メガバイト)をはじめ、215dpi、108dpi、54dpiの4種の解像度の基本画像を記録し、さらに4種それぞれの圧縮画像を作成して収めた。圧縮はJPEG方式を採用した。

将来はこれらの画像をデータベースとして蓄積することが望まれるが、記憶容量、画像転送の速度、ソフトウェアなど実現化への問題は多い。また、デジタル画像は容易に複製を作れるので著作権等の問題が生じやすく、課題が少なくない。

研究組織

- 鈴木 廣 之 (情報資料部)
- 松 島 健 (情報資料部)
- 米 倉 迪 夫 (情報資料部)
- 井 手 誠之輔 (情報資料部)
- 長 岡 龍 作 (情報資料部)
- 勝 木 言一郎 (情報資料部)
- 伊與田 光 宏 (情報資料部)
- 田 中 淳 (美術部)

世界、特にアジア諸国における文化財保存に関する情報の収集

目 的

世界の貴重な文化財の恒久的保存のため、世界の国々に対しその保存に協力する際には、各国の文化財の状況について調査し理解すべきであることは言うまでもないが、同時に、各国における文化財保護体制を把握し理解することが重要である。

本研究は、世界、とくにアジア諸国の文化財の保存状態および文化財保護に関わる組織・機構・活動状況について、情報を収集し、さらにその問題点を検討することにより、より有効かつ円滑な文化財保存協力の実施へ貢献することを目的とする。

成 果

1990（平成2）年から毎年東京国立文化財研究所などが主催して行っているアジア文化財保存セミナーにおいて、各国からの参加者（文化財保存の実務に携わる専門家）がそれぞれの年度のテーマに基づき、自国の文化財の保存状況に関する報告を行っている。これらの報告やセミナーの場で交わされた議論は、各回のアジアセミナー予稿集（英文）および報告書（和文、一部英文）に収録されており、1997（平成9）年の第7回セミナーについては、国際文化財保存修復協力センターのホームページで予稿集および結論を公開している。

またセミナーでは、アジア諸国からの参加者に対し、各国の文化財保存に関する状況についてアンケート調査を実施した。調査項目は文化財保存に関わる機関、人材養成の方法、国際共同研究・共同事業の経験、文化財保存関連の法律、文化財保存に関わる問題点、日本に対する期待などである。アンケートの結果と考察は『保存科学』33号および37号に掲載されている。

さらに文化財保存修復に関する国際協力事業に携わっている日本国内の専門家を対象に、「国際文化財保存修復研究会」を開催し、日本の機関が行った国際協力事業の成果やさまざまな問題点の事例を収集している。研究会では、参加者に対するアンケート調査を実施し、国際協力事業の事例集、文化財保存修復に携わる専門家のデータベース作成を開始した。データの収集、データベースの構築は次年度以降も継続して行われる。

研究組織

- 宮 本 長二郎（国際文化財保存修復協力センター）
- 西 浦 忠 輝（国際文化財保存修復協力センター）
- 松 本 修 自（修復技術部・国際文化財保存修復協力センター）
- 朽 津 信 明（国際文化財保存修復協力センター）
- 松 本 健（国際文化財保存修復協力センター）
- 中 島 健 次（国際文化財保存修復協力センター）
- 二 神 葉 子（国際文化財保存修復協力センター）

屋外石（レンガ）造文化財の劣化と保存修復に関する調査研究 [海外]

目 的

屋外石（レンガ）造文化財は建造物、遺跡等世界の主要な文化財であるが、その多くが現在崩壊の危機に瀕しており、保存対策の策定が急務である。本研究は、海外の屋外石（レンガ）造文化財の劣化原因、過程を地質学・岩石学・鉱物学的に検討するとともに、気象環境と劣化原因との因果関係を考察し、さらには実際の保存修復処置についての実験ならびに応用研究を行って、保存修復対策についての基礎的データを集積し、石ならびにレンガ造文化財の保存技術を向上させることによって、世界の文化財保存協力に資することを目的とする。

成 果

タイ国のスコータイ遺跡・アユタヤ遺跡・バノムルン遺跡において、環境条件と劣化現象についての測定、解析を継続的に行ってきた。その結果、雨水および地下水の移動と乾燥速度が重要なファクターであることが確認されつつある。

パキスタン国のモヘンジョダロ遺跡・ガンダーラ遺跡群の調査を行った。モヘンジョダロ遺跡では地下水が、ガンダーラ遺跡では雨水が劣化の主原因であるが、確たる保存対策はなく、当面の維持策が課題である。ガンダーラのラニガト遺跡において、建造物遺構への雨水の浸透を防止するため、粘土によるキャッピング技術について、現場実験を行っている。粘土と撥水性シリコン樹脂および強化用アクリル樹脂を併用することにより、良好な結果が得られている。

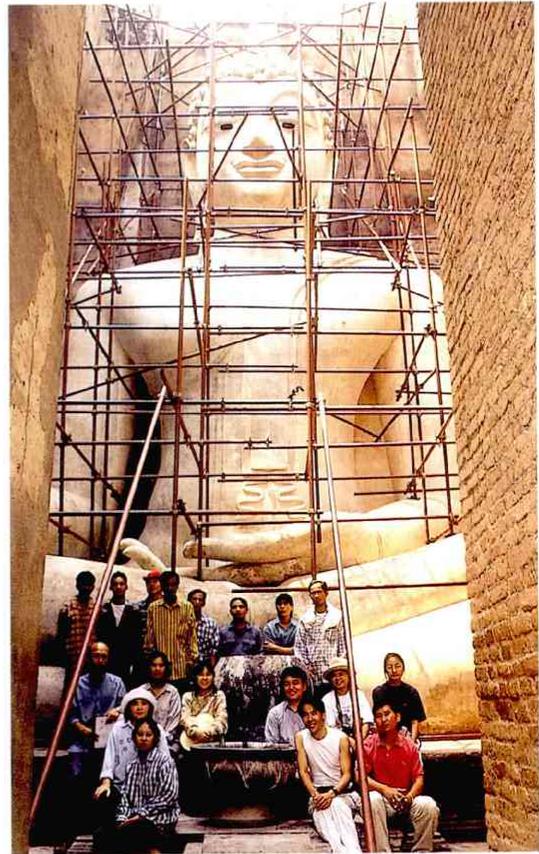
タイ国スコータイ遺跡のスリチュム寺院の大仏は、天井部分が破壊された堂の中であって、浸透する大量の雨水が蒸発しにくい環境にある。その結果、夥しい生物（苔類・藻類等）の繁茂による著しい変色と表面層の脆弱化をきたしていた。この大仏のクリーニング後の保護処置について現場実験を含む総合的な調査研究を行った。その結果撥水性シリコン樹脂の含浸処置が極めて効果的であることが明らかとなった。そこで、実際に大仏のクリーニングと樹脂含浸処置を行い、良好な結果を得た。

研究組織

- 西 浦 忠 輝（国際文化財保存修復協力センター）
- 宮 本 長二郎（国際文化財保存修復協力センター）
- 松 本 修 自（修復技術部・国際文化財保存修復協力センター）
- 朽 津 信 明（国際文化財保存修復協力センター）
- 松 本 健（国際文化財保存修復協力センター）
- 石 崎 武 志（保存科学部）
- 渡 辺 邦 夫（埼玉大学）
- 増 井 正 哉（奈良女子大学）

備 考

一部特別研究



スコタイ遺跡スリチュム寺院大仏の保存修復（左：処置前、右：処置後）

屋外石（レンガ）造文化財の劣化と保存修復に関する調査研究〔国内〕

目 的

屋外の石（レンガ）造文化財の保存は世界的にも最も重要な課題の一つである。

本研究は、屋外石（レンガ）造文化財の劣化原因、過程を地質学・岩石学・鉱物学的に検討するとともに、気象環境と劣化原因との因果関係を考察し、さらには実際の保存修復処置についての実験ならびに応用研究を行って、保存修復対策についての基礎的データを集積し、石ならびにレンガ造文化財の保存技術を向上させることによって、世界の文化財保存協力に資することを目的とする。

成 果

洞窟・磨崖仏等の調査研究を行っているが、フゴッベ洞窟においてとくに詳細な調査を行った。岩体内の体積含水率・蒸発量・気温・壁温等の連続計測を行い、洞窟の状況と保存上の問題点の解析、考察を行った。その結果、亀裂に沿った部分で高い含水率での推移が見られ、また壁沿いの床面部分では冬場のみ高い含水率を示し、夏場はそれほど顕著でないという傾向が見られた。亀裂に沿ってある程度定期的に水が供給されており、床面付近の含水率のデータから地下水の供給は考えにくい。したがって、冬場には壁面に結露が起きることにより水が供給されるものと考えられる。含水率の高い部分には、緑色のシアノバクテリア等微生物や黒色のマンガン沈殿物、あるいは白色の塩類などが見られることがあり、これらの存在が、線刻壁画に悪影響を与えている可能性が考えられる。保存対策としては、亀裂に水が供給されることをなるべく防ぎ、また保存施設を改善して結露を起りにくくさせることなどが考えられる。前者の観点から、洞窟のある山の上側を調査し、水のしみ込み口、進入経路などについて調査を行っている。

大分県下の石造物の総合的調査を継続して行っている。とくに湿潤地にある石塔等の劣化状況調査を行い、側溝を造り水位を下げる等の対策について検討した。

神奈川県、重要文化財・元箱根石仏群の保存修復に伴う、劣化状況・要因・保存修復材料の選定等についての調査、研究、指導を継続して行ってきた。周辺整備を含めた総合的な保存事業であり、今後もモニタリングを行う。

研究組織

- 西 浦 忠 輝（国際文化財保存修復協力センター）
- 朽 津 信 明（国際文化財保存修復協力センター）
- 宮 本 長 二郎（国際文化財保存修復協力センター）
- 松 本 健（国際文化財保存修復協力センター）
- 石 崎 武 志（保存科学部）
- 肥 塚 隆 保（奈良国立文化財研究所）
- 渡 辺 邦 夫（埼玉大学）
- 大 石 不二夫（神奈川大学）
- 尾 崎 哲 二（青木建設）
- 三 田 直 樹（地質調査所）



フゴッベ洞窟の線刻壁画表面に沈着したマンガン析出物

敦煌文化財の保存修復に関する日中共同研究

目 的

1986（昭和61）年、東京国立文化財研究所と敦煌研究院は、莫高窟壁画、彩塑の保存・修復に関する共同研究を開始した。本研究は保存・修復技術を確立し、将来にわたって理想的な保存・修復が行われることを最終目標とし、1990（平成2）年12月には正式に合意書を交わした。1991（平成3）年4月から合意書に則って、環境・病害・修復材料の3つの研究班を組織し、日中共同で調査研究を行っている。また、1996（平成8）年からの第2期3ヶ年共同研究は、修復材料をテーマとして修復技術部が中心となって進めている。本年は第2期第2年目に当たる。

成 果

1986（昭和61）～1990（平成2）年度

文化庁長官裁定「敦煌文化財保護に関する協力事業実施要項」にもとづき、第1回「敦煌莫高窟壁画保存協力者会議」が10月21日に開かれ、第1回訪中団が1986（昭和61）年11月9日から20日まで北京、蘭州及び敦煌を訪問した。以降1990（平成2）年度までの5ヶ年で、協力者会議が第6回まで、訪中団が第2回以降7回派遣された。

1992（平成2）年12月26日付けで、当研究所と敦煌研究院の間で、合意書「敦煌莫高窟第194窟、53窟の保護に関する日中共同研究」が作成された。

1991（平成3）～1995（平成7）年度

1990（平成2）年12月に作成された合意書に基づき、1991（平成3）年から5ヶ年を第1期とし、第194窟と第53窟をフィールドとして研究をすすめることとなった。

日本側研究者は、年2回敦煌を訪問し、調査、測定、試料採取を行う。主に、温度、湿度、日照などの環境測定機器の設定、設置、データ読み出し等、また、病害原因研究のための試料採取などを行った。

1991（平成3）年度5月と10月の訪中を含めて、1995（平成7）年度までに、計10回の訪中を行い、敦煌研究院保護研究所の若手研究者は、年間2名が3ヶ月間当研究所で研修を行った。

協力者会議は、1994（平成6）年の第9回まで3回開催した。

1993（平成5）年10月には、国際シンポジウム“Conservation of Ancient Sites on the Silk Road”が敦煌で行われ、共同研究の成果2件を発表した。

1996（平成8）年2月に、国際シンポジウム「敦煌莫高窟の保存と関連の研究」を奈良で開催し、4件の発表を行った。

1996（平成8）年度～

1996（平成8）年11月11日作成の合意書をもとに、第2期は、1996（平成8）年から1998（平成10）年までの3ヶ年として、第53窟をフィールドとすることとした。訪中団は年間1回とし、敦煌側の研究者は、年間2名が2ヶ月間当研究所に滞在して研究実験を行っている。本年度は、莫高窟内補修用合成樹脂の濃度、溶液の表面張力と浸透性、泥土の合成樹脂含浸による強化度、などを測定したほか、国内数カ所の発掘現場及び装飾古墳等を視察して、報告書を作成した。

また、滞在中に日中英3ヶ国語の専門用語集の中文の校正、説明追加などの協力による編集を継続している。

研究組織

○宮 本 長二郎（国際文化財保存修復協力センター）

国際文化財保存修復協力センター

修復技術部

保存科学部

美術部

情報資料部



53窟における泥下地の剥落止めテスト



53窟における測量写真の撮影

日本近代美術の発展に関する明治後期から昭和初期の基礎資料集成

目 的

現在の日本近代美術史観の形成過程を、その形成因子である創作活動と美術ジャーナリズムの双方から実証的検証を行い、併せて美術団体・展覧会の活動、美術雑誌の資料整備を行うものである。

成 果

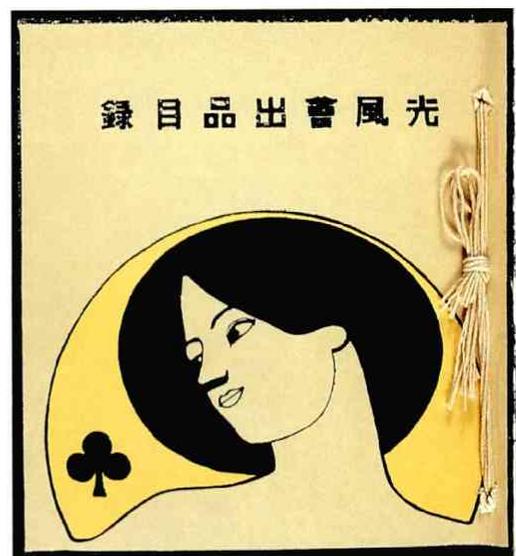
既刊『明治期美術展出品目録』（1994(平成6)年3月刊行)『内国勲業博覧会美術品出品目録』（1996(平成8)年2月刊行)『明治期万国博覧会美術品出品目録』（1997(平成9)年3月)(中央公論美術出版)に続く資料集の刊行をめざして、本年度は明治後半期から昭和初期にかけて結成された美術団体について、当研究所が所蔵する出品目録・図録のリストを作成し、欠けているものを東京都現代美術館、兵庫県立近代美術館等の協力を得て資料収集した。また明治後期から昭和初期の美術の動きを史的に位置づけるため、1940年代から現代に至る美術展覧会および美術文献資料を量・質ともに拡充すべく現代美術資料センター(笹木繁男氏主宰)からの寄贈受け入れを開始した。

研究組織

- 田 中 淳 (美術部)
- 山 梨 絵美子 (美術部)



第2回独立美術協会展出品目録



第1回光風會展出品目録

文化財における環境汚染の影響と修復技術の研究協力

目 的

現在アジアは、経済活動の活発化にともない酸性雨などの環境汚染物質による文化財の被害地域としてクローズアップされてきており、アジアの文化遺産の保護にとって無視できない問題である。この問題は日本だけでなく国境を越えた問題であり、アジア全体の問題である。これらの国々と協力して文化遺産を保護するをすすめる必要から、1995（平成7）年度から韓国国立文化財研究所と共同研究を開始した。

成 果

日韓で文化財に対する環境汚染物質の影響を比較するためには、その元になる測定分析方式を共通化する必要がある。協議を行った結果、測定場所、分析項目、分析手法などの共通化がはかられ、1996（平成8）年からソウル景福宮内にある韓国国立文化財研究所と徳壽宮内に観測ステーション及び暴露試験台を設置して観測を開始している。文化財に対しては日本では主として金属製品の保存を中心に研究を実施しているが、耐久性試験については共通仕様の試験試料を製作して行っている。現在韓国においては、酸性雨による大理石の劣化が最も問題になっている。これらの問題についても共同で研究を進めている。韓国財窟敬天寺十層石塔（1348年）、韓国財窟門覺寺石塔（1471年）に付着している黒色の発生原因の調査を行い、酸性雨による溶けた大理石が石膏として沈着し、それに排気ガスなどの汚れが付着して黒くなっていることが判明した。この汚れをレーザーによって除去するために基礎的実験を実施している。

研究組織

- 増 田 勝 彦（修復技術部）
- 青 木 繁 夫（修復技術部）
- 川 野 邊 渉（修復技術部）
- 松 田 史 朗（修復技術部）
- 三 浦 定 俊（保存科学部）
- 朽 津 信 明（国際文化財保存修復協力センター）



韓国国宝第3号 円覚寺石塔 大理石石塔

酸性雨により石が溶け、白くなっている。黒色部分は自動車などから排出されたカーボン状の物質が付着している。



酸性雨から石塔を保護するため、仮設の覆屋の中に置かれている。

文化財の保存を目的としたレンガの劣化現象と 保存対策に関する調査研究

目 的

近年急速に劣化が進んでいる国内外に所在するレンガ造文化財の保存に関する調査、研究を行うことにより、有効な保存対策を開発し国内外の文化財の保存技術の向上に資することを目的とする。

成 果

国内の多くのレンガ造文化財の調査を行った。とくに栃木県、重要文化財・旧下野煉瓦窯については詳細な調査を行っている。同窯では煉瓦壁の壁面崩落が著しい。そこで、崩落の現状把握と環境、要因についての調査・解析・考察を行った。その結果、崩落は主として煉瓦壁表面での塩類の析出に伴って起きており、1階と2階では2階の方が、北側と南側では南側のほうが激しいことが判った。これは水分の蒸発速度と関係すると思われる。ここでの析出物は硫酸塩がほとんどであり、また煉瓦壁内部の土からは周辺土壌の10倍以上の濃度で硫酸イオンが検出された。このことから、この建物を構成する物質の影響で劣化が促進されている可能性が示唆された。今後は劣化している煉瓦としていない煉瓦の物性の違いや、置かれている環境の違いを観察しながら、その保存対策についての研究をすすめる予定である。

海外においては、タイ国のアユタヤ遺跡を中心に同様な調査を行い、日本の事例との比較を行っている。タイ国においても日本と同様な形で塩類析出による煉瓦の劣化が観察されるが、雨季と乾季の区別がはっきりしているタイ国においては、塩類風化の起き方が季節に依存していて、雨季から乾季に移り変わる時期に集中的に起こることが観察される。また日本より高温多湿なタイ国においては、苔類、藻類の繁殖等による生物劣化が多く見られる。

研究組織

- 西 浦 忠 輝 (国際文化財保存修復協力センター)
- 朽 津 信 明 (国際文化財保存修復協力センター)
- 宮 本 長二郎 (国際文化財保存修復協力センター)
- 松 本 修 自 (修復技術部・国際文化財保存修復協力センター)
- 松 本 健 (国際文化財保存修復協力センター)
- 石 崎 武 志 (保存科学部)
- 肥 塚 隆 保 (奈良国立文化財研究所)
- 渡 辺 邦 夫 (埼玉大学)
- 尾 崎 哲 二 (青木建設)



旧下野煉瓦窯における塩の析出によるレンガの表面崩落

4. 受託研究

金唐革紙分析調査

目 的

金唐革紙は近代の洋風建築に用いられた装飾的な壁紙である。近代の洋風建築の代表的な遺例である旧岩崎邸の修理が行われるようになったことにより、金唐革紙の復原のため、使用されている塗膜顔料・金属箔紙質等について分析調査を行い、より効果的な復原技法の確立を目的とする。

成 果

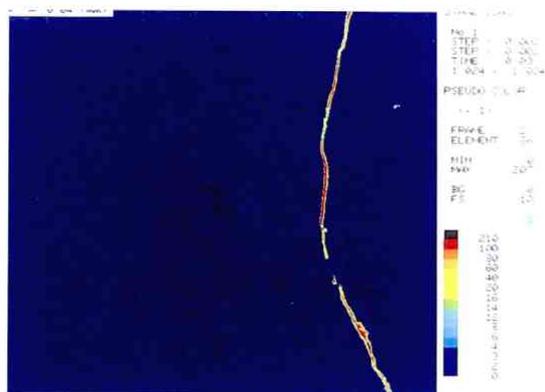
重要文化財旧岩崎邸の壁紙に数種類の金唐革紙および類似のものが使用されていることが明らかにできた。修復に当たってこの壁紙のうちいくつかのものの復元整備が計画されている。岩崎邸で使用された壁紙の内、1種類の壁紙は錫箔を用いた本来の金唐革紙であり、他のものは錫箔を用いないやや簡便な手法によるものであること、紙質は和紙と洋紙の繊維から成る漉き返しのものであること、また3種類のものについては「紙の博物館」に同一のデザインの壁紙成型用ロールが存在していたことがわかった。

研究組織

○川野邊 渉（修復技術部）

備 考

当受託研究は（株）清水建設より依頼された。



サンプル断面のSn（スズ）濃度
錫箔の層が認められる。



岩崎邸東南室の壁紙拓本（紙の博物館蔵）とその試料

塑像如信上人坐像（法龍寺）の修復処置研究

目 的

江戸時代に多く造られた塑像には、かなりひどい保存状態を示すものが多い。茨城県久慈郡大子町金沢の法龍寺蔵のこの塑像は、頭部まで57cm、像幅80cmで、粘土で造形し、その上に和紙を1mmほどに貼り重ねて更に薄い紗を頭部と手部を除いて貼り、さらに像全体を黒塗りとしている。像内部は、胴部から頭部にかけて中空となっており、粘土が露出し、心木は無い。像底から腰部までは薄い和紙が貼られている。頭頂部には丸い凹みがある。粘土表面には荒いワラの跡や、指でえぐった痕跡が観察される。腰部には径10cm程の穴があり、そこには外面から和紙に包んだ粘土塊を押し込んでいる。保存状態は例に漏れず悪く、坐像の裾回りに割損が見られる。この研究では製作技法の調査と保存修復処置などの研究を行う。

成 果

修復処置は、粘土表面をバラロイド B-72 キシレン溶液を塗布して強化し、粘土の欠失部には、エマルジョンタイプのエポキシ樹脂（ダイナミックレジン）にマイクロバルーンを混和、整形して補修した。剥離した和紙と粘土との接着には酢酸ビニルエマルジョン、和紙同士の接着には澱粉糊を使用した。

研究組織

○中 里 壽 克（修復技術部）

備 考

当受託研究は真宗大谷派東京教務所より依頼された。



如信上人坐像 法龍寺蔵 修復後

装飾材料の生化学的研究

目 的

わが国の絵画は楮紙を澱粉糊で裏打ちしている。絹絵はその表裏に彩色が施されていることが多く、また古い時代の絹地は大変劣化が進んでおり、修理の際の旧裏打ちを除去する作業は絵を傷める危険性が大きい。このため裏打ち材料としての糊の除去法を生化学の視点から再検討し、より効果的、かつ安全な技法の開発に資する。

成 果

裏打ち紙の打ち替えにおいて澱粉を選択的に分解する α -アミラーゼを用いることよって、打ち替えの工程における水の使用量を低減することを試みた。使用した酵素が高純度で基質特異性が高いために、使用条件をコントロールすることにより極めて低濃度で効果を上げることができた。 α -アミラーゼを用いることにより水の使用量を減らすことができる可能性を見いだすことができた。

研究組織

○木 川 り か (保存科学部)

川野邊 渉 (修復技術部)

備 考

当受託研究は (株) 岡墨光堂より依頼された。



ブルーでんぶんプレートによる絵絹の残留酵素活性の見積もり

5. 文化財保存修復に関する国際交流促進事業

スミソニアン研究機構との国際研究交流

目 的

アメリカのスミソニアン研究機構は、フリーア美術館、アーサー・M・サックラー美術館のように東洋の美術品を集めた美術館や文化財の科学的研究を行っている保存分析研究所など様々な博物館・美術館・研究所を持つ、世界最大の文化財研究機関である。その研究者と文化庁の博物館・研究所の研究者が、文化財保存に関する共同研究を行うことを目的とする。

成 果

本研究の始まりには次のような経緯がある。1988（昭和63）年5月に文化庁の大崎仁長官とスミソニアン研究機構のアダムス長官（いずれも当時）が、文化財の保存技術について日米が提携することで合意し、奈良国立文化財研究所・東京国立博物館・国立歴史民俗博物館等の協力を得て、東京国立文化財研究所を中心に共同研究を開始した。

1997（平成9）年度はスミソニアン研究機構のアメリカ歴史博物館のモリー・ウィルマン氏を招聘し、染織品の保存について関係の研究者と研究会を持った。このほかの主要な成果は次に述べる理由により、奈良国立文化財研究所からの科学研究費補助金報告書の中で報告される予定である。

本研究は当初より主要な研究費は科学研究費補助金によってきた。1996（平成8）～1998（平成10）年度にも引き続き「陶磁器文化の交流に関する科学的研究」という課題で国際学術研究（共同研究）の交付内定を受けたが、研究代表者であった西川杏太郎所長（当時）が1996（平成8）年3月に退官したので、代表者を奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部長沢田正昭氏に交替し研究を遂行している。

研究組織

- 三 浦 定 俊（保存科学部）
- 町 田 章（奈良国立文化財研究所）
- 沢 田 正 昭（奈良国立文化財研究所）
- 西 村 康（奈良国立文化財研究所）
- 巽 淳一郎（奈良国立文化財研究所）
- 村 上 隆（奈良国立文化財研究所）
- 斎 藤 孝 正（文化庁）
- 二 宮 修 治（東京学芸大学）
- L. V. ツェルスト（スミソニアン研究機構）
- R. L. ビショップ（スミソニアン研究機構）
- P. B. ヴェンディバー（スミソニアン研究機構）
- L. A. コート（スミソニアン研究機構）
- P. R. ジェット（スミソニアン研究機構）

敦煌文化財保存修復に関する研究協力

目 的

1986（昭和61）年、東京国立文化財研究所と敦煌研究院は、莫高窟壁画、彩塑像の保存・修復に関する共同研究を開始した。本研究は保存・修復技術を確立し、将来にわたって理想的な保存・修復が行われることを最終目標とし、1990（平成2）年12月には正式に合意書を交わした。1991（平成3）年4月から合意書に則って、環境・病害・修復材料の3つの研究班を組織し、日中共同で調査研究を行っている。また、1996（平成8）年からの第2期3ヶ年共同研究は、修復材料をテーマとして修復技術部が中心となっており、本年は第2期第2年目に当たる。

成 果

敦煌莫高窟の岩体壁画彩塑像の劣化状態を詳細に記録するため、第53窟の全壁面を対象として、測量専用カメラによる精密写真測量を行い図面を作成中である。

足場を設置することなく、高所を調査、撮影するための装置を開発して現地に設置した。

一部の彩色については、測色と精度に機器分析を加えた、当初色調のコンピュータによる再現の実験を行った。

莫高窟で20年以上行われている修復方法の調査を行い、ビデオ記録を作成し、敦煌研究院と一部へつ配置した。

泥下地の強化および壁画、彩塑像の彩色の修復材料として合成樹脂の現地実験の中で、合成樹脂による泥壁の接着改良、強度補強等の試験をした。合成樹脂は非常に低濃度で処置するので、樹脂の種類による強度差は顕著に見られなかった。むしろ作業性に関与すると思われる。第53窟北壁下部の岩盤露出部でも実験した。それらを併せて検討した結果、土壌の性質が合成樹脂以上に、修復後の効果に関係があることが明らかになった。

また今後の研究交流のために、壁画の保存修復に関連用語集の作成を、日中英3ヶ国語で編集している。

研究組織

○宮 本 長 三 郎（国際文化財保存修復協力センター）

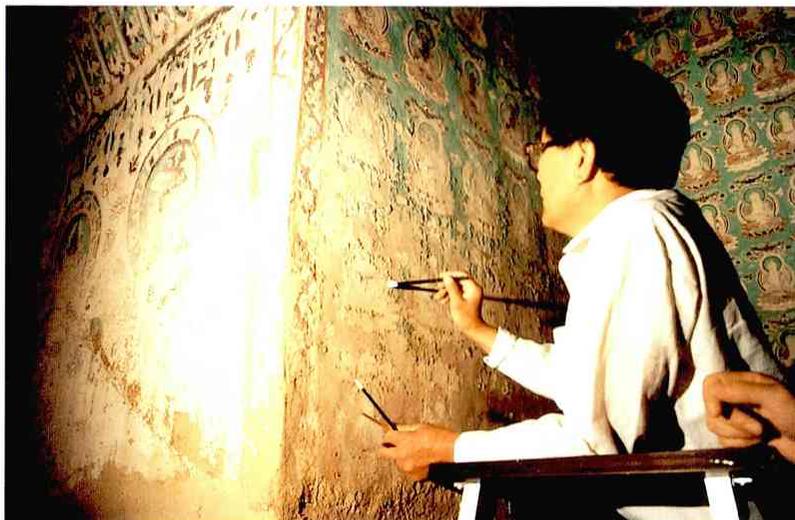
国際文化財保存修復協力センター

修復技術部

保存科学部

美術部

情報資料部



敦煌研究院職員による修復の実演

文化財の保存修復技術に関する国際共同研究

— 文化財の保存修復に用いられる新材料 —

目 的

本国際共同研究は、文化財保存・修復の最先端技術について、この分野の先進研究所であるベルギー王立文化財研究所と研究を行うと同時に、東南アジアの中で、実際上の問題を多く抱えつつも、一応それなりの研究体制の整っているタイ国立博物館とも研究を行うものであり、本研究は 3 年間の協力事業として、文化財の保存技術の向上をめざし、もって世界の文化遺産の保存に資することを目的とするものである。

成 果

タイ国において建造物、遺跡等屋外の文化財の保存・修復に用いられている合成樹脂についての調査を、タイ国政府芸術局考古部と共同で行った。とくに東北部のクメール遺跡・アユタヤ遺跡・スコータイ遺跡での調査を石材およびレンガの保存対策と絡めて進めている。

ベルギー王立文化財研究所が進めている石造建造物の保存、修復に用いられている合成樹脂の物性評価法の標準化について、種々の情報を収集した。

タイ国等東南アジアで、美術工芸品・考古遺物・民俗資料・古文書等、博物館・美術館の収蔵品を中心とした、屋内に保存されている文化財の保存、修復に用いられている合成樹脂についての調査を、タイ国立博物館保存部と共同で行った。東南アジアでは天然樹脂もかなり用いられており、合成樹脂との使い分けや、その根拠などについても調査を行っている。併せて、タイ国の研究者を日本に招へいし、修復用合成樹脂の物性についての研究協議を行った。

実験的研究として、木造古建築の外装塗装としての丹塗りへの合成樹脂の応用について、その耐久性の面からの評価実験を継続して行っている。

研究組織

- 西 浦 忠 輝 (国際文化財保存修復協力センター)
- 宮 本 長二郎 (国際文化財保存修復協力センター)
- 松 本 修 自 (修復技術部・国際文化財保存修復協力センター)
- 朽 津 信 明 (国際文化財保存修復協力センター)
- 増 田 勝 彦 (修復技術部)
- 川野邊 渉 (修復技術部)
- 大 石 不二夫 (神奈川大学)

文化財の保護に関する日独学術交流

目 的

日本とドイツ両国は、古い歴史と多くの文化財を持っている点だけでなく、第二次大戦の惨禍から急速に復興し高度に産業化された社会を作り上げたが、その反面、古来の文化や文化財が衰退や破壊の危機に晒されている点も共通している。本研究は互いの国の文化財保護に関する知識や経験を交換し、それぞれの国の文化財保護に資することを目的としている。

本研究の背景には次のような経緯がある。日本とドイツとの間では、1974（昭和49）年に科学技術に関する学術交流のための協定書が調印され、医学・物理学などを中心に日独学術交流が行われてきたが、1990（平成2）年の第13回日独科学技術合同交流委員会においてドイツ側から「文化財保護に関する日独学術交流」の提案があり、1992（平成4）年から交流が開始された。ドイツ側ではミュンヘンのバイエルン州立文化財研究所が、日本側では東京国立文化財研究所がそれぞれ事務局となって、共同研究を行っている。

成 果

ドイツの歴史的ラッカーに関する日独研究セミナーの開催、日本語の研究論文の翻訳などを行ったが、詳細については文部省科学研究費補助金の項目を参照。

研究者の派遣と招聘など主要な経費や研究組織については文部省科学研究費補助金（国際学術研究）「文化財の微量試料分析法の開発」及び「建造物保存修復の理念及び方法に関する研究」の項目を参照。

研究組織

- 三 浦 定 俊（保存科学部）
- 佐 野 千 絵（保存科学部）
- 宮 本 長 二郎（国際文化財保存修復協力センター）
- 松 本 修 自（修復技術部・国際文化財保存修復協力センター）
- 亀 井 伸 雄（文化庁）
- 加 藤 寛（東京国立博物館）
- 後 藤 文 子（東京国立博物館）
- 沢 田 正 昭（奈良国立文化財研究所）
- 木 村 勉（奈良国立文化財研究所）
- 村 田 健 一（奈良国立文化財研究所）
- 長 尾 充（奈良国立文化財研究所）
- 斎 藤 努（国立歴史民俗博物館）
- 日 高 薫（国立歴史民俗博物館）
- 斎 藤 英 俊（東京芸術大学）
- 宮 腰 哲 雄（明治大学）
- 馬 淵 久 夫（作陽短期大学）
- ミヒャエル・キューレンタール（バイエルン州立文化財研究所）
- ジーククリート・エンデルス（ヘッセン州文化財保護局）
- K. ヴァルヒ（バイエルン州立文化財研究所）
- C. ゼゲバード（国立金属材料研究所）

6. 文部省科学研究費補助金による研究

文化財収蔵庫の庫内空気環境調査法の公定化のための基礎的研究

目 的

防火・防災施設である博物館は、資料の膨張・収縮による破壊を避けるために温湿度の安定を重視しており、その結果、建築材料から出る各種の汚染ガスが充満し、空気質の評価および改善に関する研究が早急に求められている。本研究は特に収蔵庫内の空気環境の清浄度の評価に関して、具体的な規制対象物質とその文化財材質への影響、規制対象物質の濃度規制値のガイドライン作成、その分析に関する公定化を目的とし、そのための基礎研究を行う。

成 果

本年度は主として、空気汚染物質の同定と定量方法の選定、その発生原因、動態調査、調査法の検討、資料への影響の調査を行なった。換気の効果の他、除去方法についても検討を開始した。

(1) 空気環境調査法

ホルムアルデヒドやき酸・酢酸の微量定量分析と実地調査のため、情報収集と基礎実験を行った。実地調査は、発生源調査と調査対象の空間の平均濃度測定に分かれる。発生源調査に当たってはその場で、できる限り短時間・簡便・安価に結果が分かるという特性が求められる。一方、調査対象の空間の平均濃度測定に対しては、その化学物質が文化財材質に影響を与える濃度レベルが検知でき、かつその影響の程度を比較できるように濃度差が明確に把握できること、その上でできる限り短時間・簡便・安価であることが望ましい。実在の美術館内で実地調査に適用可能な捕集条件やさまざまな測定法による測定結果のクロスチェックをおこなった。発生源や動態調査には使えるものの、比色分析法を用いた簡易定量法は濃度を高めに判断する傾向があることがわかった。

生物的調査法については、ポンプを用いて大気中の浮遊菌の捕獲と培養を試みた。市販の機器は捕獲の際の流速が大きいため、落下菌に比べて菌の生育が遅くなる傾向があることがわかった。

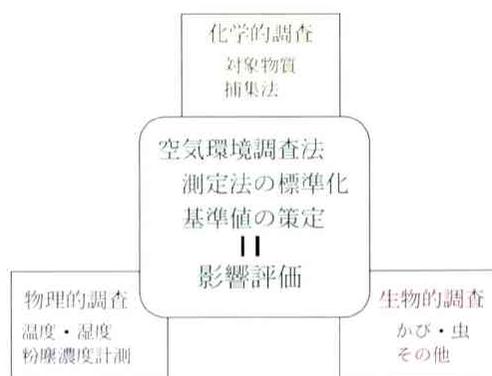
(2) 影響評価

デシケータ（プラスチック製）中をホルマリン由来の発生ガスで満たし、日本画顔料への影響を検討した結果、密陀僧（一酸化鉛）・鉛丹など鉛系の顔料と、群青など銅系の顔料に著しい化学変化が生じた。詳細については、現在検討中であるが、今後、低濃度での影響、低湿度下での影響および膠などのメディウム存在下での影響について検討をすすめる予定である。

ほか、建材の空気汚染能調査の試験方法を設定するための基礎実験を行っている。

研究組織

- 佐野 千 絵（保存科学部）
- 三浦 定 俊（保存科学部）
- 木川 り か（保存科学部）
- 早川 泰 弘（保存科学部）
- 二宮 修 治（東京学芸大学）



空気環境調査法の公定化



博物館内の空気のサンプリング

日本における美術史学の成立と展開（科学研究費補助金による研究）

目 的

西洋近代の学を範として明治20年前後にはじまった日本の美術史学が、その成立当初から、国家的制度や機構と密接な関係を維持し、国民が共有しうる美的価値と歴史の体系を形成してきたことを、近年の研究成果は明らかにしている。それは近代国家として西洋に認知されようとする国情を背景として、日本の文化的ナショナルアイデンティティの構築をめざすものであった。今日、一般的に用いられる美術史の言葉や思考が、こうした美術史学の歴史のなかで形成され、意識化されない制度として働いていることは、美術史研究者が広く認識すべき問題となっている。

本研究は、このような問題意識にたち、日本における美術史学成立期以来の資料を収集するとともに、①美術行政・美術教育と美術史学、②「作品」概念の成立とその社会的機能、③日本におけるアジア美術研究、④美術史家の美術批評と創作、⑤近代の言説と日本美術史観の形成という5つの観点から美術史学の歴史に分析を加え、美術史学の今日的な課題と可能性を問い直すことを目的とする。

成 果

(1) 資料収集

北海道大学所蔵「京都日の出新聞」マイクロフィルムから、美術および文化財関連記事を抜粋した。今年度は、1885（明治18）～1892（明治25）年分を終えた。また *The Ornamental Arts of Japan*（2巻、1882～1885年、ロンドン）、プリンクラー『日本風俗写真図絵』（持軍版全12巻、1897～1901年、ボストン）、田島志一編、英語版『浮世絵派画集』（全4巻、1906年、審美書院）等を購入し、明治期に刊行された国内外の美術出版資料の収集につとめた。

(2) データ化

明治期の博覧会・展覧会のうち、本研究所および国会図書館所蔵の目録類、計22資料（京都博覧会、視古美術会、パリ万博など）を入力した。また次年度の研究に備えるため、地域別博覧会（京都、奈良、名古屋および和歌山）の現地調査を行った。

(3) 分 析

1997（平成9）年12月3日～5日の日程で、第21回文化財の保存に関する国際研究集会「今、日本の美術史学をふりかえる」を開催した（於東京国立近代美術館講堂）。本研究の研究テーマに関わる研究分担者の発表は次のとおりである。

(1) 美術行政・美術教育と美術史学

金子一夫「近代日本美術教育の出発と風景画」

北澤憲昭「日本美術史の枠組について」

高木博志「日本近代の文化財保護行政と美術史の成立」

(2) 日本におけるアジア美術研究

佐藤道信「世界観の再編と歴史観の再編」

岡田 健「龍門石窟への足跡—岡倉天心と大村西崖—」

井手誠之輔「〈境界〉美術のアイデンティティ—請来仏画研究の立場から—」

(3) 美術史家の批評と創作

山梨絵美子「日本近代洋画におけるオリエンタリズム」

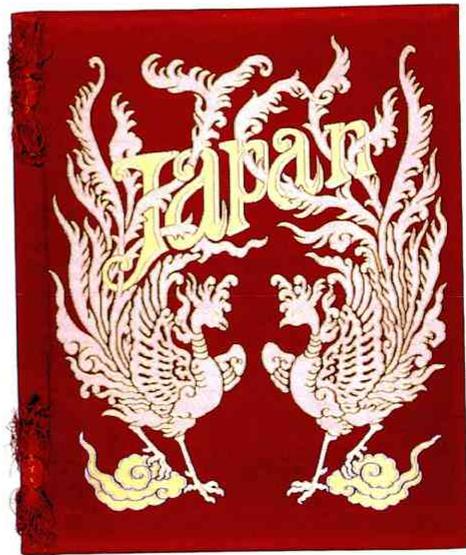
(4) 近代の言説と日本美術史観の形成

長岡龍作「〈仏像の語り方〉の境界」

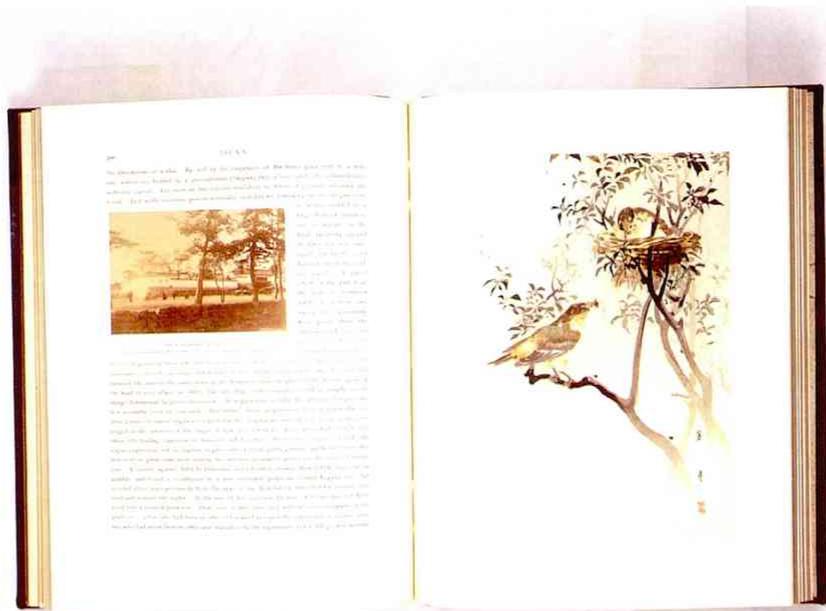
研究組織

○鶴 田 武 良（美術部）

中野 照 男 (美術部)
 山梨 絵美子 (美術部)
 鳥尾 新 (美術部)
 田中 淳 (美術部)
 岡田 健 (美術部)
 松島 健 (情報資料部)
 米倉 通 夫 (情報資料部)
 鈴木 廣 之 (情報資料部)
 井手 誠之輔 (情報資料部)
 長岡 龍 作 (情報資料部)
 安達 直 哉 (東京国立博物館)
 古田 亮 (東京国立博物館)
 三輪 英 夫 (九州大学)
 佐藤 道 信 (東京芸術大学)
 金子 一 夫 (茨城大学)
 高木 博 志 (北海道大学)
 北澤 憲 昭 (跡見学園女子大学)



《JAPAN》(『日本風俗写真図絵』) Shogun 版 (全 12 卷) 表紙



《JAPAN》(『日本風俗写真図絵』) Shogun 版 (全 12 卷) 本文

古建築の保存を目的とした石材強化保存用合成樹脂の物性評価

目 的

文化財は人類共通の遺産であり、現在に伝えられてきたこれらの文化財を保存、修復し後世に伝えていくことは、現在に生きる我々の責務である。

本研究は、貴重な文化財である石造古建築の保存技術の向上に資するものであり、もって文化の発展に寄与することを目的とする。

成 果

現在、石造古建築の保存、修復に用いられている石材強化保存用合成樹脂および近年開発された新しい合成樹脂の基本的な物性、すなわち石材への浸透性、石材への凝集力の付与効果（強化力）、処置効果の持続性（耐久性）等についての実験室および実験フィールドによる評価試験を行っている。1996（平成8）年度に行った基礎物性試験により、良好な結果が得られた数種のシリコーン樹脂溶液、アクリル樹脂溶液、エポキシ樹脂溶液について、さらに試験を行った。浸透性については、石材がかなりの水分を有している場合について、石材の含有水分量と樹脂溶液の浸透性との関係を調べた。強化力については、樹脂の含浸深さと強度改善効果との関係を調べた。また樹脂処置後の石材の気体透過性の変化を水蒸気透過性を指標として調べた。さらに、樹脂処置効果の持続性については、種々の劣化促進処理を行って比較検討した。実験フィールドにおける現場作業性試験では、とくに表面からの樹脂溶液の浸透性と強化力について調査した。以上の試験の結果、得られた主な知見は以下の通りである。

- (1) 含水状態にある石材への浸透性は、溶剤タイプが水溶性タイプに比べて格段に優れており、また、粘度の影響が大きい（粘度が低いほど浸透がよい傾向がより高まる）。
- (2) 樹脂溶液を毛細管現象で表面から浸透含浸させた場合、一般的に外側面において石材の強度がより高まる傾向にある。これは溶剤の揮発に伴う樹脂分の外側面への移動によるものと考えられる。したがって、樹脂濃度の低い（溶剤分の多い）溶液にその傾向が大きく、本試験ではアクリル樹脂、エポキシ樹脂が該当する。
- (3) 樹脂処置後の水蒸気透過性は、撥水性シリコーン樹脂の場合にかなり低下する。これは水蒸気が石材内で一旦液体化するためと考えられ、さらに実験を継続中である。

研究組織

- 西 浦 忠 輝（国際文化財保存修復協力センター）
- 朽 津 信 明（国際文化財保存修復協力センター）
- 松 本 修 自（修復技術部・国際文化財保存修復協力センター）
- 木 川 り か（保存科学部）
- 肥 塚 隆 保（奈良国立文化財研究所）
- 大 石 不二夫（神奈川大学）

環境の湿度変化が国宝中尊寺金色堂に与えた影響に関する研究

目 的

中尊寺金色堂は1965（昭和40）年以降から、保存施設内のガラスケースに納められている。しかし従来のガラスケースは外界の影響を受けやすく、年平均湿度が80%RHにも達してカビや錆の発生が見られた。それらの被害を防ぐために1986（昭和61）年から1990（平成2）年にかけて改修工事が行われ、ガラスケース内の湿度を65%RH程度に下げたところ、新たな問題として湿度変化によって木材が乾燥収縮し、部分的に亀裂が発生する問題が起きた。現在も木材の収縮が進行しているか知り、次回の修復の参考とするために、ガラスケース内の温湿度と木材および漆膜の収縮との関係について測定を行った。

成 果

ガラスケース内の温湿度を測定したところ、温度は5℃から25℃の間で年変動するが、湿度はほとんど65%RHに保たれていた。金色堂の周囲の縁板に2枚の縁板にまたがるようにして変位計を取り付け、木材の収縮の様子を測定したところ、計測された縁板の隙間は、季節の温度変動に対応して0.3~0.4mm程度変化していることがわかった。この隙間は本研究を始めた当初は少しずつ開いてゆく傾向にあったが、今年度の測定では昨年引き続きほぼ安定した季節変化を示した。また漆膜の内部応力を測定したが、その変化も温度に対応した変化が大部分であった。別途、漆膜に生じた亀裂の伸びを観察したが、今年度は大きな変化は見られなかった。これらの測定結果から、当初はガラスケース内の湿度低下により木材が乾燥して収縮が進んだが、新しい環境になって10年近く経った現在では木材の乾燥が落ちついたと考えられる。

研究組織

○三 浦 定 俊（保存科学部）



金色堂保存施設（覆堂）



漆膜に生じた亀裂

古代日本の動物遺体の DNA 解析

目 的

本研究では、古代日本の動物遺体の遺伝子 DNA を調べることによって、家畜等の伝播経路等について有力なデータを得るために基礎的な系をつくることを目的としている。古代試料の DNA 分析においては、DNA の保存状態が非常に悪いこと、細菌やカビ、人間を含めた現世の生物のコンタミネーションを避けられないことなどの制約がある。そこで、本研究では、古代試料中に多量に含まれる細菌やカビなどの汚染微生物の遺伝子の中から、目的の生物種の遺伝子を単離するための基礎的研究を行い、実際の試料に応用することを目的としている。

成 果

本年度は、本研究で扱う特定の哺乳類の遺伝子を試料中に含まれる細菌やカビなどの遺伝子の中から特異的に効率よく増幅・単離するための系を作った。目的の生物由来の遺伝子配列を調べるための領域として、ミトコンドリア DNA の特定の領域を選定した。古い DNA は、重度の損傷を受けて断片化しているために、PCR 手法により増幅できる遺伝子断片の長さは一般的に短いものに限られるが、この領域ならば短い領域でも生物種についての情報を得やすい。哺乳類ならばほとんどの種類で共通である配列のほか、ウサギ、シカなどの生物種ごとに特異性が大きい配列をいくつか選定してプライマーセットを作製した。現世の哺乳類の毛や毛皮、肉などから DNA を抽出して遺伝子増幅を行い、これらのプライマーセットの有効性を検討した。その結果、哺乳類共通のプライマーのほか特定の種に特異的な PCR のプライマーセットをいくつか得ることができた。これらのプライマーを組み合わせるとすれば、ヒトの遺伝子などのコンタミネーションをほぼ確実に区別できる。

現在、古代試料として大谷古墳（推定5世紀～6世紀築造）から出土した馬甲（重要文化財）に付着していた毛皮から DNA を抽出し、毛皮の生物種を同定すべく実験を進めている。本試料は金属器とともに出土したため、多量のさびがついており、金属や金属イオンをいかに除去して目的の DNA を精製するかが大きな課題であった。しかし、このほど生物種特異的な PCR 増幅産物が得られ、その DNA 領域の塩基配列を決定した。その結果、この毛皮はシカのものであることが示唆された。

研究組織

○木 川 り か（保存科学部）



大谷古墳出土馬甲小札
〔紀伊大谷古墳〕和歌山市立博物館、平成4年より

弥生時代青銅器の産地推定

目 的

弥生時代の青銅資料として、九州地方に点在する銅矛・銅剣・銅戈を主として集め、化学組成・鉛同位体比との関連性について考察する。また神戸市立博物館所蔵の桜ヶ丘銅鐸一式の化学組成、鉛同位体比、錳の同位体比を測定することから、形式と科学的內容との比較検討および埋納状態について検討する。

これら資料は東京国立博物館・九州歴史資料館、九州の春日市資料館・福岡市博物館、神戸市立博物館などに広がっている。これらの資料を採取し、測定する。

成 果

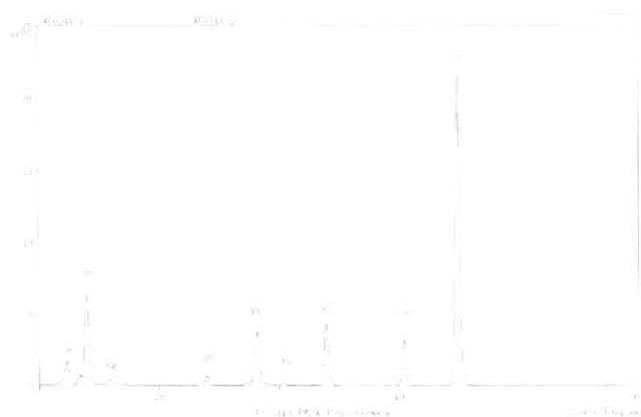
弥生時代青銅器を構成している金属は一般に、銅-スズ-鉛を主成分とした合金であり、産地によって、また青銅器の型式によって、系統的に元素組成が異なる。また鉛の同位体比も青銅の供給地の違いによって、異なることが分かっている。それゆえ、本研究では弥生時代に用いられた各種青銅器を化学組成や鉛同位体比という側面から調査することから、弥生時代における青銅の流通や人間の交流あるいは社会構造などについて理解しようとした。

本研究においては弥生時代および関連した時代の青銅資料に関して、資料の採取および自然科学的な測定を進めた。

昨年度、弥生時代青銅器として神戸市立博物館所蔵の銅鐸などを主として約 100 点の試料に関して鉛同位体比を測定した。本年度はこれらに関して考察を進め、考古学的にも矛盾の少ない結論をまとめた。新たな資料として、神戸市立博物館から銅鐸・銅戈の修復時に採取された錳を約 50 点提供していただいた。これらの資料から、当時の資料の並びかたや資料相互の汚染環境などに関する情報が得られる可能性がある。また日本産の資料として、平安時代の経筒など 50 点の資料、地方教育委員会が所蔵する資料約 30 点に関して、測定を進めた。これら 100 点以上の資料に関して、考古学的にどのような意義があるかを検討中である。

研究組織

- 平尾 良 光 (保存科学部)
- 早川 泰 弘 (保存科学部)



大岩山 1-1 号銅鐸の蛍光 X 線スペクトル



大岩山 1-1 号銅鐸測定の様子

地方に残る雅楽・能楽の古楽器研究

目 的

地方の寺社には未調査の楽器が多く残され、最良とは言えない保存状況の中で朽ち果てようとしている。そのなかには従来知られていなかった特異な形態のものもあり、今日の規格に整う以前の過渡期の姿を留めたものも少なくない。本研究では鼓胴と横笛を対象を絞り、雅楽から能楽に至る楽器の変遷過程を明らかにすることを目的とする。

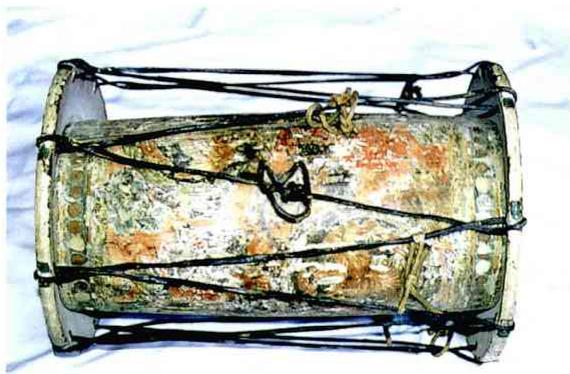
成 果

今年度は、地方の寺社や博物館が所蔵する雅楽古楽器の状況確認を主として行った。その中で、調査の必要性の高いものから順に現地調査を開始したが、中では京都府日吉町で現在も使用している鼓が、雅楽から能の大鼓胴に至る過渡期の遺物として注目された。同町では、室町期に盛んに行われた「羯鼓スリ」という民俗芸能を伝え、その中でこの鼓胴を用いているのだが、芸能の盛行年代がこの鼓胴の製作時期を決定するひとつの要因となりそうだ。また、日吉町の鼓胴と素材、寸法や形態がほとんど同じものとして、奈良県石上神宮や香川県神谷神社が所蔵する鼓胴が挙げられるが、過渡期の楽器とはいえある程度規格が固定していた事は興味深い。1ヶ所で大量生産され、各地に流通していた可能性も考えておきたい。

また兵庫県神戸市太山寺の羯鼓には、白鳥と紅花を交互に描く華やかな文様が描かれていたが、その簡素化したものが大阪府河内長野市金剛寺の羯鼓にも見られた。太山寺の羯鼓は桃山期の製作と推定されるが、今後同時期の作例を調査して、一時代の特徴、流行としてこの文様を位置づける方向を探りたい。本年度の成果としては、日吉町の調査結果を踏まえ、研究代表者高桑が『日本の美術』383号舞楽装束に「舞楽の楽器—その意匠と展開—」と題して寄稿した。

研究組織

- 高 桑 　　いづみ（芸能部）
- 加 藤 　　寛（東京国立博物館）
- 樋 口 　　昭（埼玉大学）



太山寺の羯鼓



金剛寺の羯鼓

多孔質材料の凍結・融解による劣化機構の解明とその防止対策

目 的

石造文化財として知られる石仏や磨崖仏が大谷石などの多孔質の岩石で作られていて凍結・融解作用のもとで、著しく劣化することが知られている。この現象を詳しく調べて見ると、石材の内部で水分が移動し、温度の低い部分で氷晶析出が起り、石材を劣化させる大きな要因となっていることがわかる。研究目的は、多孔質体材料を一定の温度勾配、凍結速度のもとで凍結し、氷晶析出過程の観察を行い、劣化機構のメカニズムを明らかにすることである。また、材料の孔隙径分布や不凍水量の温度依存性などの物性値を測定し、材料の物性値と劣化特性の関係を明らかにする。

成 果

凍結試験のための試料としては大谷石を用いた。試料の乾燥密度、飽和含水比、体積含水率はそれぞれ、 1.38 g/cm^3 、30.3%、41.6%である。大谷石の比表面積は $17.2 \text{ m}^2/\text{g}$ と大きく、凍上性の強いカオリナイト粘土と同程度の値を示している。凍上とは、凍結の際、水が凍結面近くへ吸い寄せられ、そこで氷として析出する現象をいう。凍上現象をおこすためには、 0°C 以下でも凍結しない水（不凍水量）の存在が重要である。この不凍水量の温度依存性を核磁気共鳴装置（NMR）を用いて測定した。これを図1に示す。 -10°C でも約10%の水が凍結しない状態で存在していることがわかる。この水は、鉱物粒子の表面力により強く吸着されているため 0°C 以下でも凍結しない状態で存在することができる。この不凍水層を通して水は凍結面へ向かって流れることができる。

部分凍結した石材中の水の流れと、氷晶析出状況を見るため、厚さ2cm、直径10cmの円盤状の大谷石を4枚重ね下方から上方へ凍結実験を行った。それぞれの円盤の中心部には、あらかじめ熱電対センサーを設置しておき、氷晶の析出温度を測定した。図2は部分的に凍結した試料の写真例である。試料中央部に厚さ2mm程度の氷晶（氷レンズ1）の析出が見られる。またこの氷晶と 0°C との間に厚さ1mm程度の氷晶の発生（氷レンズ2）が見られる。氷レンズ2は、大谷石を氷晶の析出圧力（凍上力と呼ぶ）で破壊して成長している。これらの氷晶と 0°C 線との間は部分的に凍結した領域であり、不凍水が低温方向に流れ氷晶析出が継続する。実験では、この氷晶析出温度と析出速度の関係を求めた。これらの実験結果を用いて、大谷石の間隙構造をモデル化し、氷晶析出速度と氷晶析出面温度の関係を計算したところ実験結果と良い一致が見られた。今後は、材質による凍結劣化状況の違い、材料別の対策手法について検討して行く予定である。

研究組織

○石 崎 武 志（保存科学部）

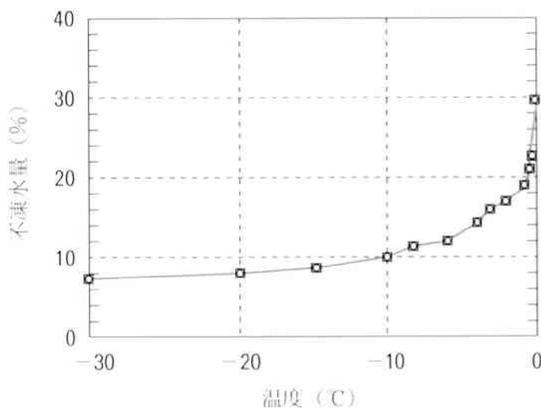


図1 大谷石の不凍水分量の温度依存性

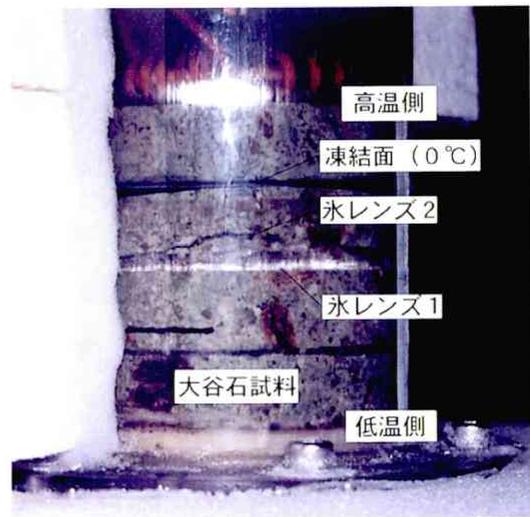


図2 凍結した大谷石中に発生した氷晶

タイ国レンガ造遺跡の劣化現象と保存対策に関する調査

目 的

人類共通の遺産である文化財の保存のための国際協力を行うについては、第一に文化財の置かれている状況（劣化状況・保存環境等）を的確に把握すること、そして、その問題点について文化財を保護・管理している当事国の担当者と十分な協議を行うことが必要不可欠である。本調査研究は、東南アジアにおける文化財保存に関する研究、研修等の中心となりつつあるタイ国において、日・タイ共同でレンガ造遺跡についての調査を行い、保存上の問題点を明らかにして、その恒久保存のための国際協力事業に資することにより、人類文化遺産の継承に貢献することを目的とするものである。

成 果

調査フィールドであるアユタヤ遺跡のラチャプラナ寺院、マハタート寺院およびスコータイ遺跡のスリサワイ寺院、スリチュム寺院において種々の調査を行った。

アユタヤのラチャプラナ寺院、スコータイのスリサワイ寺院・スリチュム寺院には無人自動記録環境計測システムを設置して、環境条件（温度・湿度・雨量・日照強度・レンガ表面温度・レンガ内部温度）を測定し、解析、考察した。

アユタヤのマハタート寺院では、特に顕著にレンガが劣化している部分について定点観測とレンガ含有水分の測定を定期的に行い、遺構の構造形態と雨水、地下水の挙動との関係について検討、考察した。さらにマハタート寺院内の井戸に自動水位計測システムを設置し、年間の地下水位の変動を測定している。

マハタート寺院近くに実験用レンガ造小柱を設置し、季節毎の含水率の変化を測定し、雨量および地中の含水率との関係を調査、考察している。実験用小柱は2本あり、一方はレンガのみ、もう一方はセメントモルタルで被覆した。両者間で、含水率およびその変化速度が異なっており、実際の遺跡建造物の劣化挙動との共通性が示唆される。

以上の調査、研究の結果、レンガ造遺跡の保存のためには、それぞれの状況に即した防水対策がその基本であることが明らかとなった。

研究組織

- 西 浦 忠 輝（国際文化財保存修復協力センター）
- 朽 津 信 明（国際文化財保存修復協力センター）
- 宮 本 長 三郎（国際文化財保存修復協力センター）
- 松 本 修 自（修復技術部・国際文化財保存修復協力センター）
- 松 本 健（国際文化財保存修復協力センター）
- 肥 塚 隆 保（奈良国立文化財研究所）
- 今 津 節 生（奈良県立橿原考古学研究所）



スコータイ遺跡におけるレンガの著しい変化

古代東アジアにおける青銅器の変遷に関する 考古学的・自然科学的研究

目 的

東アジアにおいて、中国を主とした古代文化の発展は日本の文化の発生およびその後の日本の文化へ大きな影響をもたらしている。本研究ではこのような古代文化の発展を青銅製品を対象として、自然科学的な方法を導入することにより、理解することを目的とする。

中国における金属の利用は紀元前3500年に遡るといわれる。そこで、古代中国の商文化（殷）や二里头文化（夏）、あるいは紅山文化などの青銅資料の理解に今までの考古学的方法のほかに、鉛同位体比や化学組成の測定という方法を導入し、製作技術、材料生産、流通に関する新しい知見を得て、古代中国の文化を新しい事実に基づいて理解しようとする。

成 果

古来、日本は中国から歴史の流れと共に多くのことを学んできた。いわば、日本文化の源流は中国文化にある。中国文化の発展の中で一つの重要な足跡は銅器文化である。銅器文化の発展を理解することは中国文化の本質に迫ることであり、国際学術研究として、有意義である。この種の研究は従来は考古学の分野で行われてきたが、本研究では自然科学的な方法および理解を加えようとしている。そして、今までとは異なった視野を考古学へ導入し、歴史の流れに関してより深い理解を進めようとしている。

本年度は早期銅文化として理解されている二里头遺跡から出土した銅製資料の化学組成を測定することが出来た。また商時代中期のいくつかの遺跡から出土した約50点の資料に関して、鉛同位体比を測定することができた。得られた成果は銅器生産と発展段階を如実に示すこととなり、非常に重要な結果であった。

中国から研究者を招請し、鉛同位体比測定および早期中国青銅器の発展に関して、討議を行った。3ヶ月にわたり、測定・討議を続けたことは学術交流として有意義であった。日本の研究者が北京・西安・成都を訪れ、各所の研究グループと交流し、またそれぞれの地域における遺跡を見学した。とくに成都では三星堆遺跡から出土した総数650点におよぶ金属遺物のほとんどを見学できた。また周辺地域から出土した土器の保存収蔵庫を調査できた。普通には見せてもらえない所蔵品は貴重な資料であった。今後の研究にとって大きな成果であった。

研究組織

- 平 尾 良 光（保存科学部）
- 早 川 泰 弘（保存科学部）
- 高 浜 秀（東京国立博物館）
- 井 上 洋 一（東京国立博物館）
- トム・チェイス（フリアー美術館）
- 金 正 耀（中国社会科学院世界宗教研究所）
- 鄭 光 貴（中国社会科学院考古研究所）
- 呉 加 安（中国社会科学院考古研究所）
- 王 増 林（中国社会科学院考古研究所）



二里头遺跡出土の爵

中国砂漠地帯における文化財の保存対策に関する研究

目 的

日中文化交流の一環として行われる中国の文化財のあり方に関する日中共同研究として、とくに砂漠地帯における文化財の保存、修復の問題点について科学的に研究し、その保存対策を講じ、文化財の恒久的保存を図るための資料を得ることを目的とする。

中国甘粛省の敦煌莫高窟をフィールドとして、敦煌研究院保護研究所との共同研究を行うものであり、とくに洞窟内の壁画と彩塑像の保存・修復処置について、基礎的な調査、研究を行うことにより、その保存対策の策定に資することを目的とするものである。

成 果

敦煌莫高窟の泥下地の強化および壁画、彩塑像の彩色の修復研究として敦煌研究院が採取した土壁試料の空隙率・粒度分布・鉱物組成・液制限界・塑性限界・透水性・透気性について測定した結果、わが国の通常の土と比較して、液制限界・塑性限界がともに低く、塑性指数も著しく低いことが判明した。合成樹脂は非常に低濃度で処置するので、樹脂の種類による強度差は顕著に見られなかった。むしろそれは作業性に関与すると思われる。ただし、より安定性の良い樹脂や浸透性の改善が選択できるとと思われる。

研究組織

- 宮 本 長 二郎（国際文化財保存修復協力センター）
- 西 浦 忠 輝（国際文化財保存修復協力センター）
- 松 本 修 自（修復技術部・国際文化財保存修復協力センター）
- 朽 津 信 明（国際文化財保存修復協力センター）
- 増 田 勝 彦（修復技術部）
- 李 最 雄（敦煌研究院保護研究所）

文化財の微量試料分析法の開発

目 的

文化財に関する近年の研究では、保存や修復のためだけでなく歴史的研究のためにも、材質や製作技法などに関する自然科学的研究が必須となっていて、様々な分野の研究者が文化財に対し、総合的に取り組むことが必要となっている。本研究では、対象とする文化財の歴史的・文化的研究とその課題をふまえた上で、無機質・有機質からなるさまざまな文化財を、極微量ないし非破壊で精度良く正確に分析する手法を、ドイツの文化財研究機関との共同研究を通じて開発することを目的とする。

成 果

今年度は漆を含む天然樹脂を用いた彩色文化財について研究を行った。7月に日本側研究者が訪独し、ミュンヘンのバイエルン州立文化財研究所で、2日間にわたる日独双方の研究者による研究セミナーを開催した。セミナーでは日本側から日高が輸出漆器について、宮腰が漆のGC/MSによる分析について、北村が漆のクリーニングについて、加藤が青い漆についてそれぞれ研究発表し、ドイツ側からはダグリー兄弟、クリヤード一家、マルティン・シュネルなど17～18世紀の家具職人について数人の研究者から研究報告があり、また英国のオリバー・インビー氏から16～17世紀の日本とヨーロッパの貿易について講演があった。このほか、ハンブルグ、ミュンツァー、シュツットガルト、ミュンヘンの博物館・美術館において収蔵品を調査し、資料の収集を行った。ミュンツァーの漆芸美術館、シュツットガルトの民族博物館の漆芸品のコレクションは比較的良く知られたものであるが、それ以外にも数多くの輸出漆器がこれらの館には収蔵されていることが明らかになった。しかし当初の形態がそのまま残されている品物は少なく、その多くが解体されて西洋家具の一部に利用されているなどかなり後世の手が入っているため、可能な場合は後日試料を採取して分析することとした。この他、ドイツ側研究者が来日して四国を中心に漆芸技法について調査を行った。

研究組織

- 三 浦 定 俊 (保存科学部)
- 佐 野 千 絵 (保存科学部)
- 加 藤 寛 (東京国立博物館)
- 沢 田 正 昭 (奈良国立文化財研究所)
- 斎 藤 努 (国立歴史民俗博物館)
- 日 高 薫 (国立歴史民俗博物館)
- 宮 腰 哲 雄 (明治大学)
- 馬 淵 久 夫 (作陽短期大学)
- ミヒャエル・キューレンタール (バイエルン州立文化財研究所)
- K. ヴェルヒ (バイエルン州立文化財研究所)
- C. ゼゲバード (国立金属材料研究所)

建造物保存修復の理念及び方法に関する研究

目 的

文化財保護について制度が整い、実績を有する日独両国が、建造物の保存修復ならびに活用について、より高度な展望を開くことを目的とする。

前年度の調査研究の成果にもとづき、本年度日本側は研究項目として、①復原（再建）の理念と方法、②構造補強の技術、③用途変更の手法、④活用の理念、とくに「博物館」としての古建築のあり方の4点を挙げ、主にドイツの2都市（リンブルク・マイセン）において調査研究を行う。

成 果

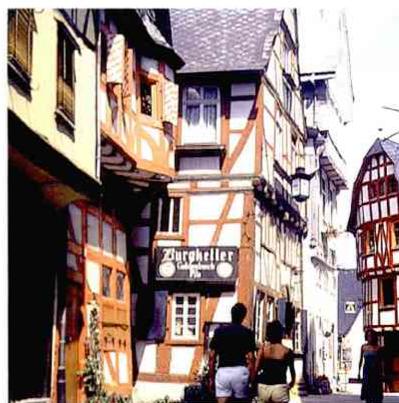
今年度は、保存のよい旧東西両独の2つの街（リンブルク・マイセン）を特定し、実際の修復例にあたって、その経緯・調査方法・修復技術等をつぶさに調査した。また補足的に、いくつかの都市（ハーメルン・ゴスラー・マールブルク）の歴史的景観の保存環境・制度的枠組みを調査し、昨年度の成果とあわせてドイツ各州の町並保存の政策的傾向を知ることができた。

リンブルクにおいては、13棟の修復例にあたり、主として所有者・建築家に対しての聞き取りにより、修理・整備に際しての材料・技術、ならびにデザイン・コンセプトの傾向を調査した。一般的に、当初復原の感覚は少なく、外観は現状を保存し、内装については鉄・ガラス等の新材料を積極的に導入し、建築家の主張を打ち出した快適な空間を目指しているように見受けられた。成功例もある反面、遺構の歴史性が損なわれている場合に批判の余地がある。

マイセンにおいては、とくに重点的に数棟の修復例を調査し、修復がどのような経緯によって実施され、所有者・建築家・行政かどのような役割を果たすのか、また修理方針にしたがってどのような技法が採用されたのか、など修理の実際について詳細に明らかにすることができた。日本との比較考察により、今後のよりよい修復のありかたを検討する十分な基礎を築き得たと考えられる。

研究組織

- 松 本 修 自（修復技術部・国際文化財保存修復協力センター）
- 宮 本 長 二郎（国際文化財保存修復協力センター）
- 亀 井 伸 雄（文化庁）
- 後 藤 文 子（東京国立博物館）
- 木 村 勉（奈良国立文化財研究所）
- 村 田 健 一（奈良国立文化財研究所）
- 長 尾 充（奈良国立文化財研究所）
- 斎 藤 英 俊（東京芸術大学）
- ミヒャエル・キューレントール（バイエルン州立文化財研究所）
- ジークフリート・エンデルス（ヘッセン州文化財保護局）



木造建築の町並（リンブルク）



調査風景（リンブルク）

絹などのたんぱく質資料の劣化状態の Py-GC-MS による評価手法の確立

目 的

Py-GC-MS 法は特に前処理が必要ないため微量の試料で十分に構造や物性研究、同定が可能であり、文化財のようなその特質上サンプリングが容易でない試料に対して大変有用な手法である。本研究では歴史資料への応用の前に必要な各種の検討を行うとともに、特に劣化の研究の上で検討を必要とするチロシン、セリン、トリプトファンのアミノ酸組成比を簡便に求める方法を検討する。その基礎的な研究の成果を歴史資料へ応用し、考古遺物から江戸期の小袖まで、その素材の同定とともに劣化状態を検討し、Py-GC-MS 法を用いた劣化状態の評価法の開発を行う。

成 果

分析法として確立させるためには、熱分解温度や試料量などの熱分解条件の他、カラム種類や分離ガス種類などがスクロマトグラフ分析条件などを検討し、再現性・精度を確認する必要がある、現在はこれらの基礎的な条件の検討をおこなっている。

(1) 染色処理後の絹布の Py-GC-MS 法分析条件の検討

Py-GC-MS 法によるアミノ酸分析の定量性と再現性について熱分解温度を変化させて検討したが、芳香族アミノ酸と飽和アミノ酸の熱分解特性が大きく異なり、いずれのアミノ酸についても同時に十分な再現性・定量性のある温度帯は認められなかった。絹タンパク質については、加水分解を促進させる反応熱分解などの他の手法も取り入れて分析すべきであることがわかった。

(2) 歴史資料の収集と分析

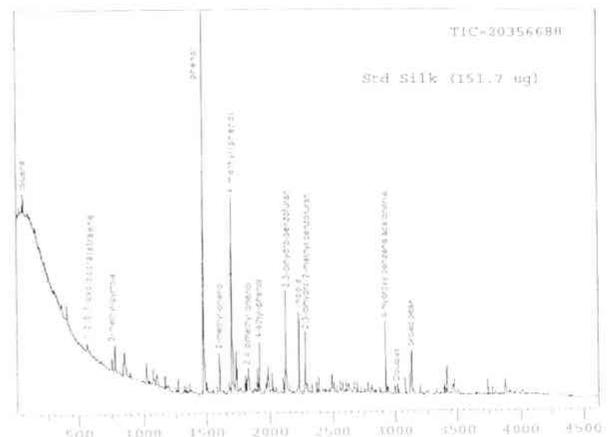
修復工房の協力により、わずかながら収集できた試料について Py-GC-MS 法で分析を行った（鎌倉期または南北朝時代、室町時代、鎌倉～室町時代、江戸時代、江戸末期のいずれも絹本および江戸期の黒染衣裳の 6 点）。古い試料ほど TIC チャートに熱分解ピークが多く現れ、特に低温での熱分解で芳香族アミノ酸由来の熱分解生成物が他種類検出できた。飽和アミノ酸についても経年劣化で切断が進みつつあることがわかった。

これまでの研究成果を The Fiber Society 全体会議 “International Conference on Advances in Fiber and Textile Science and Technology”、(1997 年 4 月、Mulhouse) にて発表した。また、文化財保存修復学会年次大会 (1997 年 6 月、山形) において、「熱分解—ガスクロマトグラフ/質量分析法を用いた絹の劣化状態の検討」の題目でポスター発表した。

研究組織

○佐野千絵 (保存科学部)

メアリー・アン・ベッカー (外国人特別研究員)



7. その他の共同研究

海外所在日本美術品調査

目 的

海外所在の日本美術に関しては、従来、個人的なあるいは特定の作品を対象とした調査は行われてきたが、収集されたデータは部分的にしか公開されておらず、在外日本美術作品の総リストすら存在しないのが現状である。この現状を改め、基礎データを蓄積・公開することは、文化財の研究及び保存のための基礎作業であり、国際的な学術交流に対応し得る状況を整え、また保存修復の計画立案のために重要である。

上記の認識に基づき、本研究は、欧米所在の日本絵画・彫刻に関する基礎データを収集し、カタログの刊行と関係機関への配付を通じて、国際的な情報の共有化をはかることを目的とする。また、将来的には現在文化庁を中心にすすめられている文化財情報ネットワークを通じて、オンラインによるより効率的かつ広範なデータの運用を目指す。

成 果

当研究所は、1988（昭和63）年以來、欧米所在の明治時代以前の日本美術作品に関する基礎データを収集してきた。1990（平成2）年度より、古文化財科学研究会（現文化財保存修復学会）が日本芸術文化振興会から助成金を得て「海外所在の日本文化財を対象とする調査研究」を行うことになり、当研究所がその委嘱を受けて調査研究を担当した。1990（平成2）年度のメトロポリタン美術館、1991（平成3）年度のバーク・コレクション、バーク・ファンデーション、1992（平成4）年度のフィラデルフィア美術館、1993（平成5）年度のブライス・コレクション、1994（平成6）年度のサンフランシスコ・アジア美術館、1995（平成7）年度のブルックリン美術館に引き続き、1996（平成8）年度からはハーバード大学アーサー・M・サックラー美術館の絵画・彫刻作品の調査を行っている。本年度、その成果として『海外所在日本美術品調査概報 ブルックリン美術館 絵画・彫刻』を刊行するとともに、『海外所在日本美術品調査報告7 ハーバード大学アーサー・M・サックラー美術館 絵画・彫刻』の刊行の準備をすすめている。1991（平成3）年度から奈良国立博物館が調査研究に参画し、ヨーロッパを担当、1995（平成7）年度にギメ東洋美術館の報告書を刊行し、現在ケルン東洋美術館の調査を継続している。

研究組織

- 鶴田 武 良（美術部）
- 渡 邊 明 義（東京国立文化財研究所）
- 與那原 進（東京国立文化財研究所）
- 中 野 照 男（美術部）
- 島 尾 新（美術部）
- 岡 田 健（美術部）
- 山 梨 絵美子（美術部）
- 鈴木 廣 之（情報資料部）
- 井 手 誠之輔（情報資料部）
- 長 岡 龍 作（情報資料部）
- 勝 木 言一郎（情報資料部）
- 野 久 保 昌 良（情報資料部）
- 増 田 勝 彦（修復技術部）
- 尾 立 和 則（修復技術部）
- 中 島 健 次（国際文化財保存修復協力センター）
- 松 下 冬 樹（国際文化財保存修復協力センター）
- 副 島 弘 道（跡見学園女子大学）
- 山 下 裕 二（明治学院大学）



ハーバード大学アーサー・M・サックラー美術館



ブルックリン美術館



調査風景

ハーバード大学アーサー・M・サックラー美術館

シリア・アインダーラ神殿遺跡保存修復プロジェクト

目 的

アイン・ダーラ神殿遺跡は、アレppoの北西約37kmにある石造遺跡で、紀元前10世紀に遡る重要な遺跡である。この遺跡を特徴づけるのは、玄武岩でできた神殿の外壁にくまなく彫られたスフィンクスとライオン像のレリーフや大理石の足跡石などであり、歴史のみならず美術的にも極めて価値の高いものである。しかし、これらの石調物は、発掘直後から損傷が著しく、柄状、ブロック状に剥離、剥落してその姿が失われつつあった。また床面の不同沈下等があった。そこで、その保存・修復を行うために、1994（平成6）年に日本とシリアの共同プロジェクトが組織され、5ヶ年計画で調査・研究および実際の保存、修復処置を行ってきた。この日本・シリア共同保存修復プロジェクトは、中近東地域における発掘後の遺跡の保存修復プロジェクトとして国際的にも注目を集めている。なお、本事業は住友財団「海外の文化財維持・修復事業助成」によって行われている。

成 果

ギロッシュ紋様レリーフ装飾石について、破断部分の再接着をエポキシ樹脂接着剤によって行った。装飾石は原位置からずれた状態にあったが、位置が確定できないものを除いて、原位置へセットした。

大型石彫像のほとんどは大きなブロック状に破断脱離し、脱離部は離れた場所に転がった状態で発掘された。これらの原位置の同定は極めて困難であったが、一部については同定することができた。それらの原位置への再接合をエポキシ樹脂接着剤によって行った。神殿から30m程離れたところではほぼ完全な形のライオン像が発掘された。このライオン像について、一部割損部の再接着、小欠損部の充填成形およびクリーニングを行った。そして、安定した基壇を造り、起立した状態で安置した。併せて、像周辺の整備を行った。

遺跡に隣接して建てられたゲストハウス屋上に無電源自動連続環境計測システムを設置し継続的に測定（外気温度・外気湿度・コンクリート表面温度・コンクリート内部温度・雨量・日照強度・風速）を行っている。これらのデータを回収し解析した。また新たに最大風速計測システムを設置し、測定を開始した。

以前、シリア政府考古局によりドーム状覆屋の建設が計画され、遺跡を囲む形で鉄筋コンクリートの柱が立てられた。計画は中止されたが、柱は残されたままで外観上極めて見苦しい状況であった。この柱を下部の基礎部分を残して切断除去した。

研究組織

- 西 浦 忠 輝（国際文化財保存修復協力センター）
- 朽 津 信 明（国際文化財保存修復協力センター）
- 井 上 洋 一（東京国立博物館）
- 海老澤 孝 雄（(株)ぎ・エトス）
- 三 輪 嘉 六（文化庁）
- 山 内 奈美子
- 山 崎 やよい（アレppo博物館）
- ウヒード・ハイヤータ（アレppo博物館）
- ハミード・ハマード（アレppo博物館）
- サーメル・ハフォール（アレppo博物館）
- オマール・ヒナウィ（ダマスカス博物館）



神殿正面の石彫レリーフ



大型石彫物の修復作業

3. 個人の研究業績

凡 例

氏 名

- (1) 公刊図書（単著・共著・編著・監修・翻訳など）
- (2) 学術雑誌（論文・研究ノート・書評・内部報告など）
- (3) 学会発表（口頭発表・ポスターセッションなど）
- (4) 展示など
- (5) 研究・調査
- (6) 講 演
- (7) 解説・翻訳など
- (8) 委員・学会役員など

青 木 繁 夫 AOKI Shigeo（修復技術部）

- (2) 高徳院国宝銅像阿彌陀如来像の気象調査—主に風況について—（三浦・青木・川野邊・中村）『保存科学』37号 98.3
- (2) 重要文化財の大气腐食に関連した風観測『超音波テクノ』VOL. 10, No. 2 98.2.8
- (3) 鎌倉大仏における環境汚染物質の影響 ドイツ ICOMOS 保存修復会議 97.10.24
- (6) 文化財における環境汚染の影響 スウェーデン大使館における環境汚染シンポジウム 97.5.22
- (8) 群馬県月夜野町 矢瀬遺跡整備委員
- (8) 千葉県館山市 大寺山洞穴調査委員会
- (8) 福島県棚倉町 流庵寺跡出土鉄剣調査指導委員会

石 井 倫 子 ISHI Tomoko（芸能部）

- (2) 能と蹴鞠と兵法と—伝書に見る身体論— 『国語と国文学』887号 97.9
- (2) 能の中の新古今—名歌名句の言葉をとること— 『国文学』42 13号 97.11

石 崎 武 志 ISHIZAKI Takeshi（保存科学部）

- (1) 土の凍結、『土の環境圏』フジテクノシステム編、岩田進午、喜田大（監修）（1997）
- (2) Characteristics of the soil-structure of frozen soils. (Sugita, Ishizaki and Fukuda) Proc. 8th Int. Symp. on Ground Freezing (1997)
- (2) Experimental study on microstructure near freezing front during soil freezing. (Watanabe, Mizoguchi, Ishizaki and Fukuda) Proc. 8th Int. Symp. on Ground Freezing (1997)
- (2) Essential characteristics of frozen fringe and determination of its parameters: (Xu, Wu, Ishizaki, Fukuda, Chuvilin and Ershov) Proc. 8th Int. Symp. on Ground Freezing (1997)
- (2) 凍結過程における土の凍結面近傍の微視的構造についての実験研究（渡辺・溝口・石崎）、『農業土木学会論文集』191号（1997）
- (3) 石材の凍結劣化機構の基礎的研究（石崎・三浦）文化財保存修復学会第19回大会 97.6.7
- (3) ガラスビーズを用いた凍土実験（武藤・石崎・溝口・渡辺）農業土木学会 97.7
- (3) 土の凍結膨張率と温度勾配、凍結速度の関係について（石崎）日本雪氷学会 97.10
- (3) 史跡・フゴッベ洞窟の風化と保存Ⅰ（朽津・三田・安田・石崎）日本応用地質学会平成9年度研究発表会 97.10
- (3) 史跡・フゴッベ洞窟の風化と保存Ⅱ—洞窟内温度測定結果について—（竹内・安田・遠藤・石崎・朽津）日本応用地質学会平成9年度研究発表会 97.10

- (3) 細孔中に生成されたメタンハイドレートの解離圧測定 (内田・海老沼・石崎) 日本雪氷学会 97.10
- (3) メタンハイドレートの基礎物性に関する研究 (内田・海老沼・吉田・平野・前・石崎) 資源素材学会 97.9
- (5) 石造文化財の凍結劣化、塩類風化機構と保存対策に関する研究
- (5) 遺跡内の水分、塩分移動のシミュレーション手法に関する研究
- (5) 低温下での文化財の劣化に関する研究
- (6) 石造文化財の劣化に対する多孔質内の水分・塩分移動の影響 (石崎) 研究会「多孔質中の水分・塩分移動と塩類風化のメカニズム」東京国立文化財研究所 97.11.25
- (6) 凍結や乾燥過程における多孔質体内の水分・塩分移動と氷晶および塩類の析出機構について 講演会「多孔質体中の物質移動研究の新しい動向」東京大学農学部 97.11.26
- (6) Frost damage incultural heritages of stone and weathering mechanism due to salt. (Ishizaki) Workshop on modeling of deterioration in composite building components due to heat and mass transfer. BRI-Tsukuba, Japan, January 1998.
- (8) 日本雪氷学会凍土分科会幹事

井手 誠之輔 IDE Seinosuke (情報資料部)

- (1) 『日本美術館』(共同執筆・室町時代)
禅林国際社会と美術、スーパー美術館・頂相(以上、南北朝時代の美術)
東アジアの中の日本美術、室町時代の中国と朝鮮、日本の画家が見たもの、海を渡った日本の美術(以上、東アジアの中の日本美術)
仏教版画(以上、神仏と人々) 小学館 97.11
- (1) 『高麗・李朝の仏教美術展』図録 多用のなかの統一—高麗仏画の領分 山口県立美術館 97.10
- (2) 黎明館本の仏伝場面に関する覚書 平成7・8年度科学研究費補助金(基盤研究B1)『九州における仏教美術の遍在と偏在—中央様式と地方様式の関係を中心に—』(代表者:菊竹淳一<九州大学>)報告書 98.3
- (3) 請来された宋元仏画の諸相 第16回国際交流美術史研究会国際シンポジウム(谷口シンポジウム) 97.10
- (3) 「境界」美術のアイデンティティ—請来仏画研究の立場から 第21回文化財の保存に関する国際研究集会 97.12.4
- (4) 『高麗・李朝の仏教美術展』監修補助 山口県立美術館 97.10
- (5) 高麗仏画の調査(10月)
阿弥陀如来像(萩原寺本)、阿弥陀八大菩薩像(広福護国禅寺・大念仏寺)、水月観音図(功山寺・個人蔵)、万五千仏図(不動院)等の高麗仏画について調査し、基礎データを収集するとともに写真撮影を行った。
- (5) 請来仏画の調査(3月)
北部九州地域に伝来する請来仏画について調査し、基礎データを収集するとともに写真撮影を行った。十王図(誓願寺)・見心来復像(萬歳寺)・以亨得謙像(萬歳寺)・水月観音図(広福護国禅寺)・善財童子歴参図(広福護国禅寺)・釈迦三尊図(広福護国禅寺)・水月観音図(大慈寺)・阿弥陀浄土図(大慈寺)。
- (6) 東アジア絵画史における高麗仏画の領分 国際理解講座/朝鮮・中国の仏教美術 田無市谷戸公民館 97.7.5
- (7) 高麗仏画解説10点
阿弥陀如来像(根津美術館本・萩原寺本)・阿弥陀八大菩薩像(広福護国禅寺本・大念仏寺本・根津美術館本)・水月観音図(功山寺本・養寿寺本・個人蔵本・静嘉堂文庫美術館本)・万五千仏図(不動院本)『高麗・李朝の仏教美術展』(山口県立美術館)図録 97.10

岡田 健 OKADA Ken (美術部)

- (2) 奈良・光明寺蔵 銅造如来立像 『美術研究』368号 97.12
- (2) 東寺毘沙門天像 —羅城門安置説と造立年代に関する考察— 『美術研究』370号 98.3
- (3) 龍門石窟への足跡 —岡倉天心と大村西崖 第21回文化財の保存に関する国際研究集会 97.12.4
- (5) 中国仏教美術調査(北京・河北) 97.12.12~12.17
- (6) 岡倉天心と中国の仏像 東京国立文化財研究所美術部・情報資料部公開学術講座 97.10.22

(7) 釈迦如来像／像内納入品一切（京都・清凉寺）『週刊朝日百科 日本の国宝』16 97.6

尾立 和 則 ORYU Kazunori（修復技術部）

(3) 襖の解体と下張り文書の保存修復技術についての解説と実技指導 下張文書研究会 97.8.22～23 奈良大学

勝木 言一郎 KATSUKI Gen-ichiro（情報資料部）

- (1) 細井尚子・山本宏子編 『泉州目連傀儡にもとづく日中文化の諸相』 日本「目連傀儡」研究会 97.12.25
- (2) 泉州開元寺にみられる楽器をもった飛天・迦陵頻伽形の斗拱について 細井尚子・山本宏子編 『泉州目連傀儡にもとづく日中文化の諸相』 日本「目連傀儡」研究会 97.12.25
- (2) 泉州開元寺“有樂器的飛天與迦陵頻伽”形の斗拱 細井尚子・山本宏子編 『泉州目連傀儡にもとづく日中文化の諸相』 日本「目連傀儡」研究会 97.12.25
- (3) ヘラクレス・イメージの東漸—毘沙門天図像にみる乾闥婆を中心に— 東京国立文化財研究所総合研究会 97.12.9
- (4) 敦煌壁画にみる迦陵頻伽の図像について 東京国立文化財研究所美術部特別研究「中国仏教美術基準作品調査研究」研究会 98.2.4
- (5) 宗教図像を通じてみた古代文化の東西交流に関する研究
- (5) 中国福建省泉州地区における宗教美術の調査研究
- (7) 泉州における宗教像 細井尚子・山本宏子編 『泉州目連傀儡にもとづく日中文化の諸相』 日本「目連傀儡」研究会 97.12.25

鎌倉 恵子 KAMAKURA Keiko（芸能部）

- (1) 「けいせい素襖障」（翻刻 解題）『歌舞伎台帳集成』第36巻 勉誠社 97.9
- (1) 細井尚子・山本宏子編 『泉州目連傀儡にもとづく日中文化の諸相』 日本「目連傀儡」研究会 97.12.25
- (2) 日本の目連 細井尚子・山本宏子編 『泉州目連傀儡にもとづく日中文化の諸相』 日本「目連傀儡」研究会 97.12.25
- (2) 式三番覚書き—いわゆる元禄歌舞伎の時代— 『芸能の科学』26号 98.3
- (2) 元禄歌舞伎に登場する動物 《International Symposium on the Conservation and Restroration of Cultural Property—Kabuki: Changes and Prospects—1996》 98.3
- (6) 翁（式三番）の種々相 東京国立文化財研究所夏期学術講座 97.7.10
- (7) 日本古典文学研究史事典（担当項目執筆） 勉誠社 97.10
- (7) 日本史広辞典（担当項目執筆） 山川出版社 98.1
- (7) 楽劇紹介「中国泉州の人形戯と説経浄瑠璃—『目連』をめぐって—」 楽劇学会例会 98.3

蒲生 郷 昭 GAMO Satoaki（芸能部）

- (2) 長唄正本研究（共同研究）176～187 『邦楽と舞踊』562～573号 97.4～98.3
- (3) 『めりやす豊年蔵』をめぐって 東京国立文化財研究所総合研究会 97.4.8
- (6) 翁（式三番）の種々相 東京国立文化財研究所夏期学術講座 97.7.9
- (6) 17世紀風俗画中描繪の三味線初探 第2回中日音楽比較研究国際検討会 天津市京川会館 97.10.21
- (6) 日本の笛のあらまし 第28回芸能部公開学術講座 97.10.29
- (6) 私たちが採譜していたころ『新義真言声明集成楽譜篇第二巻二箇法要集(下)』真言宗豊山派仏教青年会 98.3
- (8) 国際民俗芸能フェスティバル企画委員
- (8) 教科書用図書検定委員
- (8) 国立劇場専門委員
- (8) 芸術作品賞レコード部門審査員
- (8) 楽劇学会理事

川野邊 渉 KAWANOBE Wataru (修復技術部)

- (2) 装飾技術における酵素利用の可能性について (竹上・君嶋・岡・木川・川野邊) 『保存科学』37号 98.3
- (2) 文化財建造物の修復に用いられた合成樹脂の変遷 (竹之内・川野邊) 『保存科学』37号 98.3
- (2) 屋外に用いられた人工木材の劣化状況と新規人工木材の提案 (竹之内・川野邊) 『保存科学』37号 98.3
- (2) ラインセンサを用いた可視光・赤外線デジタル撮影システム (川野邊) 『保存科学』37号 98.3
- (2) 重要文化財の大気腐食に関連した風観測 (青木・川野邊・中村・宮下) 『超音波テクノ』vol.10, No.2 98.2
- (2) 高徳院国宝銅像阿弥陀如来座像の気象調査—主に風況について— (三浦・青木・川野邊・中村) 『保存科学』37号 98.3
- (2) 修復材料の現状 (川野邊) 『学術月報』51巻1号 98.1
- (3) 地温変動を用いた遺跡調査 (三浦・森・工藤・川野邊) 日本文化財科学会第14回大会 97.6.21~6.22
- (6) 文化財に対する酸性降下物の影響と評価 酸性降下物の影響に関する研究会 筑波大学 97.9

木川りか KIGAWA Rika (保存科学部)

- (2) 臭化メチルの使用規制と博物館・美術館等における防虫防霉対策の今後 (三浦・木川・山野) 『月刊文化財』414号 98.3
- (2) 脱酸素剤の文化財顔料等に及ぼす影響 (木川・宮沢・朽津・佐野・山野・三浦) 『保存科学』37号 98.3
- (2) 温度を利用した殺虫法(1)—低温処理および高温処理による殺虫効果の検討— (木川・永山・山野) 『保存科学』37号 98.3
- (2) 装こう技術における酵素利用の可能性について (竹上・君嶋・岡・木川・川野邊) 『保存科学』37号 98.3
- (3) 脱酸素環境の文化財顔料等に及ぼす影響 (低酸素濃度殺虫法に関する基礎実験(2)) (木川・山野・佐野・三浦) 文化財保存修復学会第19回大会 97.6
- (5) 新たな虫害防除法(脱酸素法、温度処理法)に関する基礎研究
- (5) 各種防虫剤、防霉剤等の文化財材質(顔料、金属)に及ぼす影響試験
- (6) 新たな殺虫法としての脱酸素法・温度処理法 文化財保存修復研究協議会 97.9.13
- (6) 燻蒸剤臭化メチルの規制の動向と今後の代替策について 記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究会 国文学研究資料館 97.10
- (7) 燻蒸剤・臭化メチルの使用規制と博物館・美術館等における防虫防霉対策の今後 ミュージアム多摩(東京都三多摩公立博物館協議会報) No.19 10.3

串田紀代美 KUSHIDA Kiyomi (芸能部)

- (2) 東京都の江戸祭り囃子—現状調査とその報告から 『「江戸の祭囃子」江戸の祭囃子現状調査報告書』 97.4

朽津信明 KUCHITSU Nobuaki (国際文化財保存修復協力センター)

- (2) 敦煌莫高窟における壁画の塩類風化 『土と基礎』45巻 97.4
- (2) Evaporation and Salt Efflorescence of the Mural Paintings in the Mogao Grottoes 《The Conservation of Dunhuang Mogao Grottoes and the Related Studies》(Kuchitsu, Wang, Duan) 97.10
- (2) タイの遺跡における使用石材とその劣化に関する調査報告 『保存科学』37号 98.3
- (2) 脱酸素剤の文化財顔料等に及ぼす影響 (木川・宮沢・朽津・佐野・山野・三浦) 『保存科学』37号 98.3
- (3) 鉛丹の変色に関する鉱物学的考察 文化財保存修復学会第19回大会 97.6
- (3) タイの遺跡における煉瓦の塩類風化—タイの遺跡における石材とその劣化(II) 日本文化財科学会第14回大会 97.6
- (3) 洞窟遺跡などで観察される黒色の汚れについて (朽津・三田) 日本文化財科学会第14回大会 97.6
- (3) 史跡・吉見百穴における蒸発岩の形成と壁面後退 (朽津・尾崎) 日本地質学会第104年年会 97.10
- (3) 史跡・フゴッペ洞窟の劣化と保存I (朽津・三田・安田・石崎) 日本応用地質学会平成9年度研究発表会 97.10
- (3) 史跡・フゴッペ洞窟の劣化と保存II (竹内・安田・遠藤・石崎・朽津) 日本応用地質学会平成9年度研究発表会 97.10

- (6) 鉍物から見た壁画顔料 東京国立文化財研究所総合研究会 98.2.10
- (6) タイ、アユタヤ遺跡におけるレンガ建造物の塩類風化の現状 研究会「多孔質中の水分・塩分移動と塩類風化のメカニズム」 97.11.25
- (8) 史跡・フゴッベ洞窟保存調査委員会委員

佐野 千絵 SANO Chie (保存科学部)

- (2) 脱酸素剤の文化財顔料等に及ぼす影響 (木川・宮沢・朽津・佐野・山野・三浦) 『保存科学』37号 98.3
- (2) 展示公開施設の館内環境調査報告—平成8年度— (佐野・三浦) 『保存科学』37号 98.3
- (3) 博物館等施設におけるアルデヒド類の汚染状況 (小瀬戸・佐野・三浦) 文化財保存修復学会第19回大会 97.6.7~6.8
- (3) 光回折による絵絹構造の解析 (馬越・Becker・佐野・小谷野) 文化財保存修復学会第19回大会 97.6.7~6.8
- (3) 脱酸素環境の文化財顔料等に及ぼす影響 (低酸素濃度殺虫法に関する基礎研究(2)) (木川・山野・佐野・三浦) 文化財保存修復学会第19回大会 97.6.7~6.8
- (3) 熱分解—ガスクロマトグラフ/質量分析法を用いた絹の劣化状態の検討 (佐野・Becker・馬越) 文化財保存修復学会第19回大会 97.6.7~6.8
- (3) 紙資料を収納した保存箱内の温・湿度環境 (高瀬・稲葉・佐野・青木) 文化財保存修復学会第19回大会 97.6.7~6.8
- (3) 収蔵展示施設の消火設備の設置状況—ハロン生産中止後の動向— (佐野・三浦) 文化財保存修復学会第19回大会 97.6.7~6.8
- (3) 熱分解—ガスクロマトグラフ/質量分析計を用いた出土漆の分析 (佐野・中里・高根沢・山田・宮腰) 文化財保存修復学会第19回大会 97.6.7~6.8
- (3) 出土漆の熱分解—GC/MSによる漆の産地推定 (宮腰・高根沢・山田・佐野) 日本文化財科学会第14回大会 97.6.21~6.22
- (5) 漆・絹等有機質文化財の劣化の評価法に関する研究
- (5) 室内汚染物質の文化財に与える影響に関する研究
- (5) 科学的な繊維同定法に関する研究
- (5) 科学研究費補助金基盤研究B「染織文化財の展示、保存、管理に関する研究」研究分担者 (研究代表者 斎藤昌子 (共立女子大学))
- (5) 科学研究費補助金基盤研究B「歴史史料の材質劣化評価への化学発光の応用研究」研究分担者 (研究代表者 青木睦 (国立国文学研究資料館))
- (6) 博物館の保存環境 京畿道博物館 97.11.5
- (6) 有機質文化財の劣化の評価法 マテリアルライフ学会 東京 97.5.16
- (7) 国立歴史民俗博物館共同研究員 博物館資料の保存環境 (代表 神庭信幸 (国立歴史民俗博物館))
- (8) IIC-Japan 運営委員 (会計担当)
- (8) 文化財保存修復学会会誌編集委員

島尾 新 SHIMAO Arata (美術部)

- (1) 『日本美術館』(共著) 小学館 97.11
- (1) 『水墨画と語らう』(美術館へ行こう) 新潮社 97.11
- (3) 美術史データの現状 「歴史系資料の基礎情報分析とモデル化に関する研究」研究会 静岡大学 97.6.21
- (3) 室町美術三題 美術部・情報資料部研究会 97.6.25
- (3) 「近代」の雪舟 国際交流美術史学会 97.10.21
- (5) 基盤研究(B)(2) 歴史系資料の基礎情報分析とモデル化に関する研究 (研究代表者 八重樫純樹 (静岡大学))
- (7) 雪舟筆四季山水図について 石橋美術館 97.10.25
- (8) ジョー・D・プライス「コンピュータの眼で探る若冲の世界」(翻訳)『静岡県立美術館紀要』13号 98.3

鈴木 廣之 SUZUKI Hiroyuki (情報資料部)

- (3) カレッジ・アート・アソシエーション第85回年次大会(報告と発表原稿「明治期における身体の再構築と『美術』の創設」要旨)『鹿島美術研究』年報第14号別冊 97.11
- (4) 和辻哲郎『古寺巡礼』と日本美術史 美術部・情報資料部研究会 97.4.30

高 桑 いづみ TAKAKUWA Izumi (芸能部)

- (1) 講座日本の演劇『中世の演劇』(共著) 勉誠社 98.2
- (2) 小鼓の世界『花伝の会特別公演パンフレット』 97.8
- (2) ハヤフシで意図したもの—一世阿弥自筆本の小段表記をめぐって—『芸能の科学』26号 98.3
- (3) 世阿弥自筆本の小段表記 第2回世阿弥忌研究セミナー 97.8.8
- (6) 翁(式三番)の種々相 東京国立文化財研究所夏期学術講座 97.7.7~7.8
- (6) 能管の誕生とその後の展開 第28回芸能部公開学術講座 97.10.29
- (6) 能楽鑑賞講座 国立能楽堂公開講座 97.10~12
- (6) 能の流れ—一世阿弥から式楽まで—昭和音楽大学生涯学習講座 98.1.24

田 中 淳 TANAKA Atsushi (美術部)

- (1) 章解説「明治の洋画」他、『日本美術館』小学館 97.11
- (2) 回顧と展望 近代美術『史学雑誌』97年5月号
- (2) 序論 黒田清輝の生涯と芸術『近代日本洋画の巨匠 黒田清輝展』図録、佐野美術館 97.10
- (2) 後期印象派・考(上)『美術研究』368号 97.12
- (3) 「基調報告」シンポジウム『萬鐵五郎の多面性』東京国立近代美術館 97.4.19
- (4) 「萬鐵五郎」展作品展示 京都国立近代美術館 97.5/岩手県立博物館 97.7
- (5) 萬鐵五郎作品調査 東京国立近代美術館 97.4
- (5) 山脇信徳作品調査 高知県立美術館 97.10
- (6) 講演「黒田清輝の画業とその生涯」佐野美術館 97.11.8
- (7) 作品解説 黒田清輝「自画像(トルコ帽)」・「昼寝」『静岡新聞』97.10.20・22
- (7) 作品解説 安井曾太郎「薔薇」『毎日新聞』97.11.16
- (7) 作家・作品解説 大下藤次郎「穂高山の麓」・児島善三郎「アルプスへの道」・「発哺よりの展望」画集『巨匠が描く 日本の名山』4巻 郷土出版 97.11
- (7) 安田鞞彦他8名作家解説『マイクロソフト エンカルタ98 エンサイクロペディア』97.11

鶴 田 武 良 TSURUTA Takeyoshi (美術部)

- (1) 中国年鑑1997年版 文化・美術の項 中国研究所 97.7
- (2) 留欧美術学生—近百年來中国絵画史研究6『美術研究』369号 98.3
- (5) 近百年中国絵画史研究 北京、上海での現代美術調査 97.4
- (5) 近百年中国絵画史研究 瀋陽での調査 97.8
- (6) 中国近代絵画に及ぼした日本美術の影響 渋谷区立松涛美術館 97.9

長 岡 龍 作 NAGAOKA Ryusaku (情報資料部)

- (2) 神護寺という「場」と薬師如来像『週刊朝日百科 日本の国宝』011号 京都/神護寺 朝日新聞社 97.5
- (3) 「仏像の語り方」の境界 第21回文化財の保存に関する国際研究集会 97.12.5
- (6) 日本人と大陸の仏像—古代日本の外来美術受容— 田無市国際理解講座 97.6.21
- (7) 作品解説(薬師如来立像・五大虚空蔵菩薩坐像) 週刊朝日百科『日本の国宝011 京都/神護寺』朝日新聞社 97.5

中 里 壽 克 NAKASATO Toshikatsu (修復技術部)

- (1) 漆の焼き付け(高温硬化)に関する研究(1) —伝統的技法の調査・科学的解析—(木下・中里・上野・宮田) 『保存科学』37号 98.3
- (2) 伝統的焼付漆技法の研究 『保存科学』37号 98.3
- (3) 平等院から金色堂へ—蒔絵技法の移行— 東京国立文化財研究所総合研究会 97.10.14

中 野 照 男 NAKANO Teruo (美術部)

- (1) 『十二神将像』『日本の美術』381号 至文堂 98.2
- (3) The Wall Paintings of the Kondō, Hōryūji and the Idea of the Pure Land. International Conference "The Nature of the Masterpiece in Japan and Europe", Sainsbury Centre for Visual Art, Norwich, England, 97.9.7
- (6) 太鼓叩きはなぜ笑う—シルクロード美術に表われた楽器— 白井文化懇話会 98.1.18
- (7) 解説 普賢菩薩ほか 東京国立博物館名品図録CD-ROM版 98.2.20
- (7) 資料提供・監修 「シルクロード 甦るキジル大石窟群」NHK衛星第2 98.1.19~1.22
- (8) 千葉県四街道市文化財審議委員

中 村 茂 子 NAKAMURA Shigeko (芸能部)

- (1) 細井尚子・山本宏子編 『泉州目連傀儡にもとづく日中文化の諸相』日本「目連傀儡」研究会 1997.12
- (2) 花祭りの信仰—小林の花祭り文書を史料として— 『民俗芸能研究』25号 97.9
- (2) 盆踊り「目連地獄巡り」の伝承 細井尚子・山本宏子編 『泉州目連傀儡にもとづく日中文化の諸相』 97.12.25
- (2) 花祭りの舞・構成と意義 『芸能の科学』26号 98.3
- (2) 歌舞伎俳優研修修了生・研修生の現状と将来 《International Symposium on the Conservation and Restriction of Cultural Property —Kabuki: Changes and Prospects— 1996》 98.3
- (6) 翁(式三番)の種々相 東京国立文化財研究所夏期学術講座 97.7.8~7.9
- (7) 伝統芸能を支えるシルバークラウド —黒森歌舞伎— 『音楽鑑賞教育』342号 97.5
- (7) 岩手県北上和賀大乘神楽 『音楽鑑賞教育』343号 97.6
- (7) 神楽を町の心臓にした鷺宮町『文化庁月報』349号 97.10
- (8) 東京都文化財専門審議委員
- (8) 民俗芸能学会理事

西 浦 忠 輝 NISHIURA Tadateru (国際文化財保存修復協力センター)

- (1) 《Conservation Project for Ain Dara Temple, Syria》(Annual Report, 1997), Japan Center for International Cooperation in Conservation, Tokyo National Research Institute of Cultural Properties & Aleppo Museums and Antiquities, Syria 98.3
- (1) 『シリア・アインダーラ神殿遺跡保存修復プロジェクト』(年次報告:1997) 東京国立文化財研究所・国際文化財保存修復協力センター、シリア国アレppo考古局 98.3
- (2) Microclimate of Cave Temples 53 and 194, Mogao Grottoes (MIURA・NISHIURA) 《Conservation of Ancient Sites on the Silk Road》 The Getty Conservation Institute 97.7
- (2) Analysis on the Micro-Environment on the Mogao Caves 《Proceedings of the International Symposium on the Conservation of Dunhuang Mogao Grottoes and the Related Studies》 97.10
- (2) 敦煌莫高窟保存修復のための日中共同研究 『おもしろアジア考古学』 連合出版 97.12
- (2) アジア諸国における文化財保存の現状—アンケート調査の結果と考察(2)— (二神・西浦) 『保存科学』37号 98.3
- (2) 第11回イコモス総会・国際シンポジウム報告 『国際文化財保存修復協力センター:Newsletter』No.1 97.5
- (2) 遺跡保存を考える「シリアのアインダーラ神殿遺跡の保存修復」 『ニュースレター [日本西アジア考古学会通信]』No.2 97.

- (2) An Overview for the Conservation of Mogao Grottoes-Aim and Procedure of the Symposium 《Proceedings of the International Symposium on the Conservation of Dunhuang Mogao Grottoes and the Related Studies》 97.10
- (2) シリアのアインダーラ神殿遺跡の保存修復 [2]「古代オリエント世界を掘る」(第4回西アジア発掘調査報告会収録集) 98.2
- (2) シリア・アインダーラ神殿遺跡の保存修復とその問題点 『第2回アジア文化財保存修復研究会報告書』 98.3
- (2) 国際(アジア)文化財保存修復研究会について 『国際文化財保存修復協力センター:Newsletter』No.3 98.3
- (3) パキスタン・ガンダーラ仏教遺跡の保存:ラニガト遺跡における新技術の応用(西浦・増井・海老澤)保存修復学会第19回大会 97.6
- (3) アジア諸国における文化財保存の現状—アンケート調査の結果と考察(2)(二神・西浦)保存修復学会第19回大会 97.6
- (3) 石材保存用樹脂の評価試験 [V]—樹脂処理含浸石材の水蒸気透過性—(西浦・大石ほか)保存修復学会第19回大会 97.6
- (3) パキスタン・ガンダーラ仏教遺跡保存国際プロジェクト(西浦・増井ほか)日本文化財科学会第14回大会 97.6
- (3) シリア・アインダーラ神殿遺跡の保存修復とその問題点 第2回アジア文化財保存修復研究会 97.10
- (3) 文化財保存修復への新材料の応用とその問題点「文化財の保存の修復:何をどう残すのか?」文化財保存修復学会第2回学術シンポジウム・パネルディスカッション 98.2
- (3) 敦煌莫高窟保存のための日中共同研究の経緯、現状、問題点(西浦・増田)第3回国際文化財保存修復研究会 98.3.3
- (6) 海外における石造文化財の保存対策:特に塩類風化について 研究会「多孔質中の水分・塩分移動と塩類風化のメカニズム」 97.11
- (8) 大分県石造文化財保存調査事業委員 97.7.1~98.3.31
- (8) 文化財保存修復学会運営委員・編集委員
- (8) 日本文化財科学会幹事

羽田 昶 HATA Hisashi (芸能部)

- (2) 「能」の真価と魅力 『「能」の心理学』(河出書房) 97.7
- (2) 批評の機能 《International Simposium on the Conservation and Restroration of Cultural Property—Kabuki: Changes and Prospects—1996》 98.3
- (6) 翁(式三番)の種々相 東京国立文化財研究所夏期学術講座 97.7.7~7.8
- (6) 狂言の囃子事 武蔵野女子大能楽資料センター公開講座 97.10.13
- (6) 先代梅若六郎 梅若能楽学院公開講座 98.3.11
- (8) 国立能楽堂専門委員
- (8) 日本演劇学会理事
- (8) 楽劇学会理事
- (8) 芸能学会常任理事

早川 泰弘 HAYAKAWA Yasuhiro (保存科学部)

- (2) Measurement of hydrogen permeation into steel by using hollow bolt and SnO₂ gas sensor (Hayakawa, Komoda, Ono) 『Sensors and Actuators B』Vol.42 97.2
- (2) 各種の蛍光 X 線分析装置による文化財試料の分析(早川・平尾) 『保存科学』37号 98.3
- (2) 絵画用 S 環の安全性の評価(2)(三浦・早川) 『文化財保存修復学会誌』42号 97.12
- (3) 微小部蛍光 X 線分析法による文化財試料の分析(早川・平尾) 第58回分析化学討論会 要旨集 97.5.25
- (3) 複数の蛍光 X 線分析装置を用いた文化財試料の測定(早川・平尾) 日本文化財科学会第14回大会要旨集 97.6.22

- (3) 硬玉製勾玉の蛍光 X 線分析 (早川・早乙女) 日本分析化学会第 46 年会要旨集 97.10.7
- (5) 古代金属器に含まれる微量元素組成に関する研究
- (5) 硬玉製勾玉の化学組成と材料産地に関する研究
- (5) アイスガラスの化学組成および交易に関する研究
- (5) 科学研究費補助金基盤研究 B 「中国北方系青銅器の研究」研究分担者 (研究代表者 高浜秀 (東京国立博物館))
- (5) 平安時代における銅製品の材質調査と鑄造技法の研究 (福武学術文化振興財団) (研究代表者 原田一敏 (東京国立博物館))
- (5) 日韓硬玉製勾玉の基礎研究 (福武学術文化振興財団) (研究代表者 早乙女雅博 (東京大学))
- (6) 蛍光 X 線分析法による青銅器の化学組成の測定 「自然科学的方法の考古学への応用」講演会 北京大学考古系 97.10.23
- (8) 日本分析化学会誌編集委員

平尾良光 HIRAO Yoshimitsu (保存科学部)

- (2) カマン・カレホユック第 8 次 (1993 年) および第 9 次 (1994 年) 調査で出土した銅製品の化学的測定 (平尾・榎本) 『アナトリア考古学研究』6 号 97.3.5
- (2) カマン・カレホユック第 7 次調査から出土の銅製品の微量元素分析 (鈴木・平井・古谷・平尾) 『アナトリア考古学研究』6 号 97.3.5
- (2) トルコ共和国カマン・カレホユックから出土した銅製品中不純物のマイクロプローブ分析 (津越・古谷・阿部・平井・平尾) 『アナトリア考古学研究』6 号 97.3.5
- (2) 西野西遺跡群川原田遺跡出土火熨斗の科学的調査 (平尾・瀬川) 『長野県北佐久郡御代田町川原田遺跡科学分析報告書』長野県御代田町教育委員会 (1996) 97.3.31
- (2) 奈良県の (財) 天ヶ瀬組が所有する銅造不動明王立像の鉛同位体比 (平尾) 『奈良県上北山村財団法人天ヶ瀬組筆の窟の銅造不動明王像』上北山村文化財調査報告 (2) 97.7.31
- (2) 谷山遺跡から出土した青銅製遺物についての自然科学的研究 (平尾・鈴木) 『谷山遺跡』『安富町文化財調査報告 4』兵庫県宍粟郡安富町教育委員会 97.8.18
- (2) 日永遺跡出土の銅矛・銅戈 (平尾・鈴木) 『九州歴史資料館研究論集 22、四、鉛同位体比』 97.9.15
- (3) 東アジア四千年前の青銅文明を探る (佐々木・平尾・平井・早川・鈴木) 第 1 回黎明研究発表会口頭発表 日本原子力研究所 97.5.22
- (3) 微小部蛍光 X 線分析法による文化財資料の分析 (早川・平尾) 第 58 回分析化学討論会ポスター発表 97.5.23
- (3) 鉛同位体比法を用いた小銅鐸の材料に関する一考察 (平尾・鈴木) 第 19 回文化材保存修復学会大会ポスター発表 97.6.7
- (3) 奈良薬師寺講堂の薬師三尊像の銅造薬師三尊像に関する材質調査 (平尾・榎本・竹中) 日本文化財科学会第 14 回大会口頭発表 97.6.22
- (3) 対馬出土銅矛に用いられた材料に関する考察—鉛同位体比法を用いて— (平尾・鈴木) 日本文化財科学会第 14 回大会ポスター発表 97.6.22
- (3) 蛍光 X 線法を用いた文化財資料の化学組成 (早川・平尾) 日本文化財科学会第 14 回大会ポスター発表 97.6.22
- (3) 「古代銅製遺物の銅の XANES スペクトル解析」(星野・栗崎・山口・平尾・脇田) 日本分析化学会第 46 年会ポスター発表 97.10.5
- (5) 自然科学的方法を用いた古代金属の歴史的変遷に関する研究
- (5) 古代ガラスの化学組成
- (5) 炭素 14 年代測定法の開発
- (5) 科学研究費補助金基盤研究 B 「中国北方系青銅器の研究」研究分担者 (研究代表者 高浜秀 (東京国立博物館))
- (5) 科学研究費補助金国際学術研究「アナトリアの古代遺跡出土遺物の産地同定」研究分担者 (研究代表者 大村

幸弘（中近東文化センター）

- (5) 平安時代における銅製品の材質調査と鑄造技法の研究（福武学術文化振興財団）（代表 原田一敏（東京国立博物館））
- (5) 芸大受託研究 弥生時代青銅器に関する自然科学的研究（研究代表者 平尾良光）
- (6) 中国古銅器を自然科学から見る 京都泉屋博古館第41回講演会講演 97.5.17
- (6) 自然科学から見た古代青銅器 大阪府立弥生博物館考古学セミナー講演 97.6.8 要旨・解説書「鉛同位体比法による産地推定の原理」
- (6) 中国古代青銅器の鉛同位体比「自然科学的な方法の考古学への応用」講演会 北京大学考古学系 97.10.24
- (7) 文化財資料の非破壊分析 立教大学原子力研究所編『第11回立教大学原子力研究所講演会論文報告集—放射線を用いた実用研究の最近の話題—』1996年度版 立教大学原子力研究所 97.3.31

細井尚子 HOSOI Naoko（芸能部）

- (1) 細井尚子・山本宏子編『泉州目連傀儡にもとづく日中文化の諸相』日本「目連傀儡」研究会 97.12
- (1) 『空間移動の演劇性』共著 新しい演劇研究の会 98.3
- (2) 「中国の身体表現—「戯曲」と舞踊」『芸能の科学』26号 98.3
- (3) 「泉州提線木偶戯と目連戯」楽劇学会 98.3
- (6) 「日本伝統芸術の身体性—日本の生活習慣から考える日本舞踊／中国との比較から」主催蜚舎 中国北京・河北省石家荘 97.12
- (7) 「越劇」京劇ニコニコ新聞 オーロラオーバル 97.6
- (7) 翻訳「台湾の人形劇文化」（原文 江武昌）『自然と文化』55号（財）日本ナショナルトラスト 97.9
- (7) 「梨園戯①」京劇ニコニコ新聞 オーロラオーバル 97.9
- (7) 中国越劇訪日公演「寒情」（字幕翻訳・作成）日本テレビ 97.10
- (7) 翻訳 張中学「川劇にみる化粧」（13）『化粧文化』37号 ポーラ文化研究所 97.11
- (7) 「梨園戯②」京劇ニコニコ新聞 オーロラオーバル 97.12
- (7) 翻訳 呉金塔「泉州の道教と道士」『自然と文化』56号（財）日本ナショナルトラスト 98.1
- (7) 翻訳 張中学「川劇にみる化粧」（14）『化粧文化』38号 ポーラ文化研究所 98.3
- (7) 「高甲戯①」京劇ニコニコ新聞 オーロラオーバル 98.3

増田勝彦 MASUDA Katsuhiko（修復技術部）

- (2) 受託研究報告 藩札料紙について（増田・大川・稲葉）『保存科学』37号 98.3
- (3) 土石流によって埋没した大般若経の真空凍結乾燥と修復処理 文化財保存修復学会第19回大会 97.6.7
- (5) 安政五年条約書保存修復のための調査 外交史料館 98.20
- (5) 打曇紙の技術実験 高知県立紙産業技術センター 97.4.5
- (6) The Japanese Customs and Conservation of Historical Paintings オーストラリア文化財保存学会パース大会 97.9.1~5
- (6) 西域の残紙について 書道研究会 98.1.26
- (6) 敦煌莫高窟保存のための日中共同研究の経緯、現状、問題点 第3回国際文化財保存修復研究会 10.3.3
- (7) 三県和紙産地交流会 平成9年度高知大会 高知 98.3.5
- (8) 京都国立博物館文化財保存修理所 運営委員
- (8) 石川県文化財保存修復工房 運営委員
- (8) 文化財保存修復学会 運営委員

松島 健 MATSUSHIMA Ken（情報資料部）

- (2) 仁王像は“超大型プラモデル”『一冊の本』15号
- (4) 百済観音—日本の古代彫刻の一例— 展 97.9.10~10.13 フランス パリ・ルーヴル美術館
- (6) 新発見の運慶様の不動明王像について 美術部・情報資料部公開学術講座 97.10.22

松本修自 MATSUMOTO Shuji (国際文化財保存修復協力センター)

- (1) 『上野忍岡遺跡群発掘調査報告書 東京国立文化財研究所新宮予定地点』(共著) 97.10
- (1) 建造物保存修復の理念及び方法に関する研究(共著) 科学研究費補助金国際学術研究報告書 98.3
- (2) 建造物保存修復の日独共同研究 『学術月報』51巻1号 98.1
- (7) アクロポリスの歴史とその修復 Japan ICOMOS Information 4-1 98.3
- (7) 第6回アジア文化財保存セミナー 『国際文化財保存修復協力センターニューズレター』No.1 97.5
- (7) アジア地域の世界文化遺産—その持続的発展と保存— 『国際文化財保存修復協力センターニューズレター』No.2 97.9
- (7) 第7回アジア文化財保存セミナー 『国際文化財保存修復協力センターニューズレター』No.3 98.3
- (7) 金峯山寺仁王門・本堂・栄山寺八角堂(解説) 『日本の国宝』10 97.4
- (7) 根来寺多宝塔、善福院釈迦堂(解説) 『日本の国宝』40 97.11
- (8) 富田林市伝統的建造物群保存審議会委員

三浦定俊 MIURA Sadatoshi (保存科学部)

- (1) 「焼損壁画の保存」小学館編『回顧・金堂罹災』98.1
- (2) Scientific Research of the Dragon-head Pitcher of the Tokyo National Museum 《TECHNE》No.5 97.6
- (2) Microclimate of Cave Temples 53 and 194, Mogao Grottoes (Miura, Nishiura, Zhang, Wang, Li) 《Conservation of Ancient Sites on the Silk Road》The Getty Conservation Institute, 97.7
- (2) Climate of Dunhuang Area, China (Takahashi, Miura) 《Proceedings of the International Symposium on the Conservation of Dunhuang Mogao Grottoes and Related Studies》97.10
- (2) Analysis on the Micro-Environment of the Mogao Caves (Zhang, Wang, Miura) 《Proceedings of the International Symposium on the Conservation of Dunhuang Mogao Grottoes and Related Studies》97.10
- (2) 絵画用S環の安全性の評価(2)(三浦・早川) 『文化財保存修復学会誌』42号 97.12
- (2) 非破壊による法隆寺献納宝物竜首水瓶の調査 『学術月報』638号 98.1
- (2) 臭化メチルの使用規制と博物館・美術館における防虫防黴対策の今後(三浦・木川・山野) 『月刊文化財』414号 98.3
- (2) 高徳院国宝銅像阿弥陀如来坐像の気象調査—主に風況について—(三浦・青木・川野邊・中村) 『保存科学』37号 98.3
- (2) 脱酸素剤の文化財顔料等に及ぼす影響(木川・宮沢・朽津・佐野・山野・三浦) 『保存科学』37号 98.3
- (2) 史跡薬師堂石仏の保存環境 『保存科学』37号 98.3
- (2) 展示公開施設の館内環境調査報告—平成8年度—(佐野・三浦) 『保存科学』37号 98.3
- (3) 博物館等施設におけるアルデヒド類の汚染状況(小瀬戸・佐野・三浦) 文化財保存修復学会第19回大会 97.6.7~6.8
- (3) 隠された肖像の画像解析(4)(三浦・君嶋・大林・山本・岡) 文化財保存修復学会第19回大会 97.6.7~6.8
- (3) 脱酸素環境の文化財顔料等に及ぼす影響(低酸素濃度殺虫法に関する基礎研究(2))(木川・山野・佐野・三浦) 文化財保存修復学会第19回大会 97.6.7~6.8
- (3) 石材の凍結劣化機構の基礎的研究(石崎・三浦) 文化財保存修復学会第19回大会 97.6.7~6.8
- (3) 収蔵展示施設の消火設備の設置状況—ハロン生産中止後の動向—(佐野・三浦) 文化財保存修復学会第19回大会 97.6.7~6.8
- (3) 地温変動を用いた遺跡探査(三浦・森・工藤・川野邊) 日本文化財科学会第14回大会 97.6.21~6.22
- (5) 文化財の画像計測法の研究
- (5) 文化財の温湿度環境に関する研究
- (7) 国立歴史民俗博物館共同研究員 歴史資料分析の多角化と総合化
- (7) 放射線を使って文化財を調査「エネルギーレビュー」17(10) 97.10
- (8) 文化財保存修復研究国際センター(ICCROM)理事(財政計画委員会委員)
- (8) 学術審議委員会専門委員(科学研究費分科会)

- (8) アジア太平洋地域の世界文化遺産の保護に関する国際協力のあり方に関する調査研究協力者会議委員
- (8) 新しい美術展示施設（ナショナルギャラリー）に関する基本計画検討協力者会議専門部会協力者
- (8) 史跡フゴッベ洞窟保存調査委員会委員
- (8) 史跡隼人塚整備検討委員会委員
- (8) 重要文化財福岡県平原方形周溝墓出土品修理委員会委員
- (8) 重要文化財藤ノ木古墳出土品修理委員会委員
- (8) 重要文化財紀伊大谷古墳出土品修理委員会委員
- (8) 国際文化財保存学会（IC）理事
- (8) 国際文化財保存学会（IC）日本支部運営委員
- (8) 文化財保存修復学会運営委員・会誌編集委員長
- (8) 日本文化財科学会評議員・幹事
- (8) 国立民族学博物館研究協力者

宮本 長二郎 MIYAMOTO Nagajiro（国際文化財保存修復協力センター）

- (1) すまい 『復原・技術と暮らしの日本史』 新人物往来社 98.2
- (1) 温故知新 『つち』 No.1-6（雇用促進事業団） 97.1-6
- (2) 西本6号遺跡建築遺構の復元的考察 『西本6号遺跡』 東広島市教育委員会 97.5
- (2) 日本中世家論 『世界民族建築国際会議論文集』（中国文物学会） 97.8
- (2) 金堂と塔の復元 『奥村廃寺』 龍野市教育委員会 97.8
- (2) 遺構と復原 『建築雑誌』（日本建築学会） 97.9
- (2) 常陸風土記の丘一鹿子史跡公園の復元 『歴史と地理』508号 山川出版社 97.12
- (3) 桜町遺跡出土の建築部材富山県小矢部市シンポジウム 97.11.24
- (3) 西本6号遺跡の建築 東広島市シンポジウム 97.11.30
- (6) 宮殿建築の源流 大阪府文化財調査研究センター文化講座 97.11.5
- (6) 遺跡の建物復原 奈良国立文化財研究所研修講義 97.12.1
- (6) すまいの考古学 岐阜県多治見市文化講演会 98.2.15
- (8) 日本建築学会建築雑誌編集委員
- (8) 日本イコモス国内委員会理事

山梨 絵美子 YAMANASHI Emiko（美術部）

- (1) 黒田清輝の絵画世界一底流に流れるバルビゾン派への共感 『黒田清輝巡回展図録』（佐野美術館 97.10.25～12.8）
- (1) 中川八郎の生きた日本近代洋画界 『中川八郎とその時代展図録』 愛媛県立美術館 98.2.21～3.22
- (1) Painting in the time of “Heavy Hands” “The Confusion Era” (“Asian Art and Culture” 97)
- (3) 英国人画家フランク・ベレスフォードと中條精一郎 『明治村だより』 Vol.10 98.1.1
- (3) 所蔵資料紹介「矢代幸雄資料によせて」 『神奈川近代文学館』 57号 97.7.15
- (4) 日本近代洋画におけるオリエンタリズム 第21回文化財の保存修復に関する国際研究集会 97.12.3～12.5
- (6) 米国ハーバード大学アーサー・M・サックラー・ギャラリー所蔵日本絵画調査 98.3.10～3.20
- (5) 鹿児島市立美術館、岩崎美術館所蔵黒田清輝作品調査 98.3.24～3.25
- (5) 明治前期の水彩画家およびその作品に関する調査（五百城文哉、渡辺豊州他）
- (6) 中川八郎の生きた時代の日本近代洋画界 愛媛県立美術館 98.3.7
- (7) 伝アントニオ・フォンタネージ筆「牛追い図」「木立図」解説 『学問のアルケオロジー』（『東京大学創立120周年記念東京大学展』図録 東京大学 97.10.16）
- (7) 徳川慶喜筆「風車のある風景」他解説 『徳川慶喜展』 三越美術館 98.1.31～2.15
- (7) 近代日本美術の軌跡展（東京国立博物館 98.3.24-5.10） 洋画出品作品選定への協力
- (7) 作品解説 黒田清輝筆「湖畔」「編物」 『静岡新聞』 97.10.23～10.24

山 野 勝 次 YAMANO Katsuji (保存科学部)

- (2) シロアリの生態に関する実務的知識(2) 『しろあり』 108号 97.4
- (2) シロアリの話(1) —Q & A— 『文化財の虫菌害』 33号 97.6
- (2) シロアリの生態に関する実務的知識(3) 『しろあり』 109号 97.7
- (2) シロアリの話(2) —Q & A— 『文化財の虫菌害』 34号 97.12
- (2) 「第17回文化財虫菌害燻蒸処理実務講習会」報告 『文化財の虫菌害』 34号 97.12
- (2) 臭化メチルの使用規制と博物館・美術館などにおける防虫防霉対策の今後(三浦・木川・山野) 『月刊文化財』 414号 98.3
- (3) 脱酸素環境の文化財顔料に及ぼす影響低酸素濃度殺虫法に関する基礎実験(2) (木川・山野・佐野・三浦) 文化財保存修復学会第19回大会 97.6
- (3) 燻蒸剤・臭化メチルの使用規制と今後の諸問題 文化財保存修復研究協議会 97.9.19
- (5) 平塚市美術館の生物被害調査(1月)
収蔵庫と特別収蔵庫における昆虫による被害調査を行い、その結果をまとめて報告した。
- (5) 国立歴史民俗博物館の生物被害調査(3月)
第1.2.3.5展示室における昆虫ならびにカビによる被害調査を行い、その結果をまとめて報告した。
- (7) 文化財の害虫と防除対策 第19回文化財の虫菌害保存対策研修会(文化財虫害研究所) 97.7.18
- (7) シロアリに関する実務的知識 平成9年度しろあり防除施工士資格第2次指定講習会(日本しろあり対策協会) 97.9.12
- (7) 文化財虫菌害燻蒸処理仕様書ならびに危害防止措置について 第17回文化財虫菌害燻蒸処理実務講習会(文化財虫害研究所) 97.10.7
- (7) シロアリの生態と被害 平成10年度しろあり防除士資格第1次指定講習会(日本しろあり対策協会) 98.1.30
- (7) 昆虫の基礎知識、昆虫による文化財の被害と防除、文化財殺虫燻蒸 第19回文化財虫菌害防除作業主任者の能力認定試験とその講習会(文化財虫害研究所) 98.2.2

米 倉 迪 夫 YONEKURA Michio (情報資料部)

- (3) 美術史研究と情報—東洋美術の情報部門からの観察 第15回国際美術史研究会シンポジウム報告書 98.2
- (5) 特定研究「古典籍研究の新しい課題と研究方法の開発をめざす総合的研究」(研究代表 岡雅彦(国文学研究資料館))
- (7) 神護寺所蔵伝源頼朝象についての諸説 『週刊朝日百科 日本の国宝』11(神護寺)朝日新聞社 97.5
- (7) 東西二つの頼朝像 『狩野派と福岡展』図録 98.2
- (7) 第16回国際美術史研究会シンポジウム「東洋美術史研究の展望」 コメンテータ(97.10.20~10.24)

渡 邊 明 義 WATANABE Akiyoshi

- (5) 日中水墨画史
- (5) 絵画技術史
- (5) 装潢史
- (5) 文化財修理学
- (6) 雪舟を辿る 山口県立美術館・雪舟研究会 97.6.8
- (6) 文化財の保存と修理 昭和女子大学 97.6.24
- (7) 豊かな文化を語る御寄贈品 『アサヒグラフ』「皇室の名宝」 98.2.15

4. 事業

1. 研究集会など

(1) 国際研究集会

「文化財の保存に関する国際研究集会」は1977（昭和52）年度から毎年行われ、1997年で第21回を迎えた。1997年度は下記に従って美術部と情報資料部が担当した。なお、シンポジウムの詳細と内容の総括は、現在、準備中のブローディングス（1998（平成10）年度出版予定）を参照されたい。

名 称 第21回文化財の保存に関する国際研究集会
—今、日本の美術史学をふりかえる—
日 時 1997（平成9）年12月3日（水）～5日（金）
会 場 東京国立近代美術館講堂
参加者数 国外 21名
国内 248名

趣 旨

日本の美術史学は、西洋近代の学を範として明治20年前後に端を発し、今日まで約100年の歴史を歩んできた。日本の美術史学の歩みが、近代国家として西欧諸国に認知されようとする明治期以来の国情を背景とし、日本の文化的ナショナルアイデンティティやナショナルヒストリーの形成に深く関わってきたことは言うまでもない。

そもそも「美術」が、翻訳語であり新たに移入された概念であったように、美術史学の用語や分類・思考の枠組み自体は、明治期以来、西洋の翻案と過去の再構築をめざすなかで新たにつくられたものであった。それらが美術史上の言説のなかで、意識化されない制度として今も大きな影響力を働かせていることは、研究者が広く認識すべき新たな問題となっている。

今回のシンポジウムは、このような問題意識にたって、日本の美術史学の歩みをふりかえろうとする試みである。さまざまな議論のなかから、現在の日本における美術史学の課題と21世紀にむけた展望が多角的に示されることを期待したい。

第1日 12月3日

第1セッション：近代と美術／近代と美術史

日本が近代国家として制度を確立していくなかで美術および美術史が果たした役割の検証を試みる。維新後の日本は独立国家として西洋世界に認められるよう、殖産興業、富国強兵などの政策を掲げて近代化を進めた。同時に、万国博覧会への参加、各種の国内博覧会の開催、全国規模の美術品調査事業、博物館や美術学校の開設に見られるように、「美術」もまた近代化の重要な要件として認識されていた。

このセッションでは歴史学・政治学・教育学・思想・哲学といった多様な視点から、近代日本における美術・美術史の位置や役割を浮き彫りにしたい。

日本近代の文化財保護行政と美術史の成立

日本美術史の枠組について

近代日本における美学と美術史学

1900年パリ万国博覧会と *Histoire de l'Art du Japon* をめぐって

北海道大学

跡見学園女子大学

関西学院大学

日本女子大学

高木博志

北澤憲昭

加藤哲弘

馬淵明子

見いだされたもの：日本と西洋の過去としての日本美術史

カリフォルニア大学
サンディエゴ校

ステファン・
タナカ

近代日本美術教育の出発と風景画

茨城大学

金子一夫

日本近代絵画におけるオリエンタリズム

美術部

山梨 絵美子

司 会

美術部

田中 淳

情報資料部

米倉 迪夫

第2日 12月4日

第IIセッション：内なる他者としての東アジア

近代の学として日本の美術史が自律の歩みを深めてきた過程で、東アジアの美術は、どのように語られてきたのだろうか。

東アジアの美術は、古来、日本美術の外延を形成するばかりでなく、さまざまな交流と受容をとおして、日本美術の内部構造を支える「内なる他者」として重要な役割を担ってきた。明治以来、美術史学の成立とともに、東アジアの美術に関する情報は質量ともに飛躍的に増大してきた。美術史研究者の視野の拡大は、日本における東アジア美術の受容の様相を鮮明にする一方で、既存の枠組みのなかでは十分に解釈できない問題の多様さをも露呈している。

このセッションでは、近代の日本における東アジア美術研究の歴史を振り返りながら、東アジアの美術が如何に語られてきたのか、あるいは東アジア地域における自国美術史の可能性や東アジアという範疇自体のもつ意味などについて、さまざまな観点から議論したい。

世界観の再編と歴史観の再編

東京芸術大学

佐藤 道 信

龍門石窟への足跡—岡倉天心と大村西崖—

美術部

岡田 健

近代日本のなかの中国画研究

実践女子大学

宮崎 法 子

雪舟に対する認識をめぐって

明治学院大学

山下 裕 二

「境界」美術のアイデンティティー 請来仏画研究の立場から—

情報資料部

井手 誠之輔

韓国美術史研究の視点と東アジア

韓国美術研究所

洪 善 杓

中国を見せる

デューク大学

スタンリー・
K・アベ

司 会

東京大学

小川 裕 充

美術部

中野 照 男

韓国語通訳

情報資料部招へい研究員・

韓国慶州大学校 鄭 于 澤

第3日 12月5日

第IIIセッション：語る現在、語られる過去

明治時代にはじまる「美術」「美術史学」の生みだした諸制度は、現在でも美術史研究の大枠を決定している。例えば「古美術」と「近代美術」の分離は、それに従った研究者の構成を生み、両者の断絶によって「近代」に流れ込んだ「前近代」の問題は放置されたままとなった。言うまでもなく、研究者のおかれる「現在」の枠組みは、研究対象となる「過去」の再構成の仕方を決定づける。「近代」における「美術史学」の形成過程が明らかになりつつある今日、議論は、その中で自己形成をおこなってきた私たち自身の立場、現在の美術史を問直す方向へも向かう必要があるだろう。

現実には「美術史」をなりわいとする私たちにとって、美術史的思考の枠組みは、意識化されない制度としてどのようにはたらくしているのだろうか。またそれを自覚したとき、私たちは、どのように「過去」と向き合い、どのように「語る」ことができるのだろうか。様々に提示される新たな方向性や研究方法は、どのような展望を示しているだろうか。

このセッションでは、「語る者」と「語られるもの」との関係を強く意識しながら、いくつかの具体的な問題を取り上げて、美術史の内包する問題点と可能性について議論したい。

近代日本における画家のアイデンティティ

—美術と非美術の境界の諸問題—

日本美術における王朝の「みやび」

「日本美術の装飾性」という言説

浮世絵の善と悪

「仏像の語り方」の境界

日本の美術史言説におけるジェンダー研究の重要性

日本美術の始まり

司 会

札幌大学

山 口 昌 男

ブリティッシュ・
コロンビア大学

ジョシュア・
S・モストウ

静嘉堂文庫美術館
ロンドン大学

玉 蟲 敏 子
タイモン・
スクリーチ

情報資料部

長 岡 龍 作

学習院大学

千 野 香 織

東京大学

木 下 直 之

札幌大学

石 塚 純 一

美術部

島 尾 新



第 21 回文化財の保存に関する国際研究集会

(2) アジア文化財保存修復セミナー

アジア文化財保存セミナーは、アジア各国の専門家の参加を得て、アジア地域の文化財保存において焦点となるテーマについて各国の経験を共有し、また人的ネットワークを整備することにより、文化財の保存修復に向けた国際協力を促進することを目的とする。

主 題 アジア地域の世界文化遺産 —その持続的発展と保存

日 時 1997（平成9）年10月13日（月）～14日（火） 世界遺産視察「古都京都の文化財」
10月15日（水）～18日（土） セミナー

場 所 国立オリンピック記念青少年総合センター国際交流会館第1ミーティング・ルーム

趣 旨

近年、文化遺産の維持管理は、自然環境、社会経済的環境などの様々な周辺環境の整備を含めて論じられている。この傾向は、世界遺産の維持管理において、バッファー・ゾーン（緩衝地域）の概念が導入されたことが一つの契機となっている。とくに都市部の歴史的都市においては、居住区を含めて周辺環境の整備を行うことが要請されており、また都市部の記念物（建造物）遺跡においては、人間活動の影響を考慮した動的な維持管理を行う必要がある。このように都市部の文化遺産の保存およびその周辺環境の整備は、人間活動の影響の問題と不可分であるがゆえに、社会経済的発展との関係から系統的に捉えることが必要となる。

そこで、今回のセミナーでは、アジア地域の世界文化遺産（予備リストに登録されているものを含む）のうち、歴史的都市あるいは都市部の記念物のカテゴリーに属するもの焦点を当てて、それらの維持管理に従事する責任者等から現状と問題点、ならびにそれらを解決するために行っている措置について具体例の報告を受け、都市部の文化財の保存と社会経済的発展の関係を考察・整理するとともに、より効果的かつ実践的な保存のための対応策を検討した。

関係機関 主催：文化庁、東京国立文化財研究所

協力：ユネスコ、ICCROM（国際文化財保存修復研究センター）

参加国・参加機関 10ヶ国・2機関

中国・韓国・タイ・ラオス・ベトナム・インド・ネパール・パキスタン・スリランカ・日本・ユネスコ世界遺産センター・ICCROM

セミナーで報告された世界文化遺産

日本：古都京都の文化財

中国：西安のイスラム地区

韓国：キョンジュの歴史的地区

タイ：アユタヤ遺跡と周辺の歴史的地区

ラオス：ルアン・プラバンの町

ベトナム：ホイ・アンの町

インド：アグラの城

ネパール：ガトマンズの谷

パキスタン：ラホールの城塞とシャリマール庭園

スリランカ：キャンディ



会議風景

(3) 各種の研究協議会

1) 文化財保存修復研究協議会

本協議会は、保存に関する研究成果を発表し、関係の専門家とともに協議することを目的として、毎年テーマを定めて開催している。1971（昭和46）年度の「木材を素地とした文化財彩色の保存と修復」を第1回として、今年度が第27回にあたる。保存科学部、修復技術部、国際文化財保存修復協力センターが交代で主催しているが、今年度は保存科学部が主催した。

主 題 文化財展示収蔵施設における虫害対策の新たな展開とその諸問題

日 時 1997（平成9）年9月19日（金）

10：00～17：00

会 場 東京国立文化財研究所別館会議室

参加者数 50名

趣 旨

かねてより文化財燻蒸ガスとして広範に用いられてきた臭化メチルの使用がオゾン層の保護のため、数年内に全廃になる見通しであることを受け、文化財展示収蔵施設における虫害対策は緊急の見直しを迫られている。

本研究協議会では、このような転機にあたって、今後どのような方法で文化財を害虫等の生物被害から守っていけばよいのか、また現段階ではどのような問題点があるのかを討議し、具体的な対処法を考えていくことを目的とする。

プログラム

燻蒸剤・臭化メチルの使用規制と今後の諸問題

保存科学部 山 野 勝 次

オゾン層保護と臭化メチルの規制

環境庁 世 一 良 幸

文化財害虫の習性とその被害

神戸大学名誉教授 奥 谷 禎 一

博物館における害虫予防の取り組みの実際

群馬県立歴史博物館 岡 部 央

博物館における生物被害のモニタリングの方法とその諸問題

国立歴史民俗博物館 神 庭 信 幸

新たな殺虫法としての脱酸素法・温度処理法

保存科学部 木 川 り か

ピレストロイド系防虫・殺虫剤の利用

国立民族学博物館 森 田 恒 之

モントリオール議定書第9回締約国会議報告

保存科学部 三 浦 定 俊

2) 国際（アジア）文化財保存修復研究会

人類共通の遺産である文化財を守るためには、国家、民族を越えて保存修復に当たらなければならず、国際協力は不可欠である。世界、特にアジア地域の文化遺産の保存修復のために日本が果たすべき役割は大きく、海外の文化財の調査研究、保存修復事業への協力が多く行われている。しかし、社会体制、経済状況等が異なる中で文化遺産の保存修復を行う際には、様々な問題に直面しているのが現状である。

本研究会は、海外の文化財の調査研究、保存修復事業に携わるさまざまな分野の国内の専門家を招き、文化財保存修復の国際協力事業に関するさまざまな問題点について議論し、その解決に向けて方策を探ることを目的とする。また、本研究会は情報ネットワーク構築の一環としても位置づけている。

本研究会は第1回、第2回を「アジア文化財保存修復研究会」として行い、第3回からは「国際文化財保存修復研究会」と変更した。

第2回 アジア文化財保存修復研究会

日時 1997（平成9）年10月22日（水）

10：30～17：45

会場 東京芸術大学美術学部中央棟会議室

参加者数 90名

プログラム

ネパール・仏教僧院イ・バハ・バヒの保存修復とその問題点

日本工業大学 渡辺 勝彦

ベトナム・ホイアン町並み保存プロジェクトの現状と問題点

昭和女子大学 友田 博通

日本建築セミナー 増田 千次郎

昭和女子大学 櫻井 清彦

シリア・アインダーラ神殿遺跡の保存修復とその問題点

国際文化財保存修復協力センター 西浦 忠輝

インドネシア・トラジャ伝統家屋の保存修復とその問題点

（財）文化財建造物保存技術協会 岡 信治

総合討議

第3回 国際文化財保存修復研究会

日時 1998（平成10）年3月3日（火）

10：30～17：25

会場 国立教育会館社会教育研修所・2階大研修室

参加者数 85名

プログラム

敦煌莫高窟保存への米中研究協力の経緯、現状と問題点

ゲティ保存研究所 前川 信

敦煌莫高窟保存のための日中共同研究の経緯、現状と問題点

国際文化財保存修復協力センター 西浦 忠輝

修復技術部 増田 勝彦

エジプト・ネフェルタリ王妃墓保存修復協力事業の成果と課題

ゲティ保存研究所 前川 信

世界的視野から見た日本の文化財保存国際協力の特色と問題点

ユネスコ文化遺産部 野口 英雄

総合討議

(4) 各種の研究会・講演会など

1) 総合研究会

総合研究会では毎年4、6、10、12、2月に各部・センターが順番に研究発表を行っている。

期 日	題 目	所 属	発 表 者 名
97. 4. 8	『めりやす豊年蔵』をめぐって	芸能部	蒲 生 郷 昭
97. 6. 10	寒冷地域の自然環境	保存科学部	石 崎 武 志
97. 10. 14	平等院から金色堂へ —蒔絵技法の移行—	修復技術部	中 里 壽 克
97. 12. 9	ヘラクレス・イメージの東漸 —毘沙門天図像にみる乾闥婆を中心に—	情報資料部	勝 木 言 一 郎
98. 2. 10	鉱物から見た壁画顔料	国際文化財保存修復協力センター	朽 津 信 明

2) 美術部・情報資料部

研究会一覧の中には美術部特別研究「中国仏教美術基準作品調査研究」にともなう研究協力者会議を含む。

期 日	題 目	所 属	発 表 者 名
97. 4. 30	和辻哲郎『古寺巡礼』と日本美術史	情報資料部	鈴 木 廣 之
97. 6. 25	室町美術三題	美術部	島 尾 新
97. 7. 9	奈良県・光明寺蔵銅造如来立像	美術部	岡 田 健
97. 9. 10	白馬会と大画面の構想画	情報資料部招へい研究員・石橋美術館	植 野 健 造
97. 10. 29	冷泉家の絵画	美術部招へい研究員・大手前女子大学	冷 泉 為 人
97. 11. 5	東京国立博物館所蔵の明治以降公文書について	東京国立博物館・科学研究費研究分担者	安 達 直 哉
97. 12. 10	ホノルル美術館のコレクションについて	美術部招へい研究員・ホノルル美術館	ジュリア・ ホワイ ト
97. 12. 16	一九四〇年代の日本美術	情報資料部招へい研究員・国際交流基金 パリ事務所	ミシェル・ リュッケン
97. 12. 24	総合討議・国際シンポジウムを終えて		
98. 1. 14	総合討議・国際シンポジウム第1セッションの総括		
98. 1. 21	総合討議・国際シンポジウム第2セッションの総括		
98. 1. 28	総合討議・国際シンポジウム第3セッションの総括		
98. 2. 7	敦煌壁画にみる迦陵頻伽の図像について	情報資料部	勝 木 言 一 郎
98. 2. 7	沂南画像石をめぐる二、三の問題	美術部招へい研究員・精華大学	山 名 伸 生
98. 2. 25	江戸から明治に至る仏師の動向について —職人から彫刻家へ—	情報資料部招へい研究員・堺市博物館	張 洋 一
98. 2. 25	高麗時代の裸形男子倚像	美術部招へい研究員・九州大学	菊 竹 淳 一
98. 3. 4	造像銘にみえる北魏の仏教信徒団体(合邑・ 邑義)について	美術部招へい研究員・岡山大学	佐 藤 智 水
98. 3. 4	豊臣秀吉像と豊国社	情報資料部招へい研究員・大阪城天守閣 博物館	北 川 央
98. 3. 25	広島宝寿院蔵薬師三尊図 —朝鮮前期記念碑の仏事一例—	情報資料部招へい研究員・韓国・東亜大 学校人文大学	朴 銀 卿
98. 3. 25	中国の中世都城制度をたった一人で変えて しまった外国人デザイナー	美術部招へい研究員・ドイツ・ヴュルツ ブルグ大学中国学研究所	外 村 中

3) 芸 能 部

期 日	題 目	所 属	発 表 者 名
97. 10. 7	沖繩御座楽の復原に関する一考察	芸能部招へい研究員・福建師範大学	王 耀 華
98. 2. 26	山伏神楽の伝承について	芸能部招へい研究員・テルアピブ大学講師	イリット・アベルブッフ
98. 3. 6	歌舞伎音楽の現状と問題点	(社)日本俳優協会	浅 原 恒 男
98. 3. 16	上方歌舞伎の伝承をめぐって	大阪学院大学	権 藤 芳 一
98. 3. 20	近代テクノロジーと歌舞伎の変質 —写真・照明・装置・音声—	明治大学	神 山 彰

4) 保存科学部

期 日	題 目	所 属	発 表 者 名	
97. 5. 23	IPM (Integrated Pest Management) について	修復家	谷 口 博 美	
97. 5. 30	東京国立博物館における事例	東京国立博物館	石 川 陸 郎	博物館美術館における害虫対策の動向と課題
97. 5. 30	国立歴史民俗博物館における事例	国立歴史民俗博物館	神 庭 信 幸	博物館美術館における害虫対策の動向と課題
97. 5. 30	国文学研究資料館における事例	国文学研究資料館	広 瀬 睦	博物館美術館における害虫対策の動向と課題
97. 5. 30	宮内庁正倉院における事例	宮内庁正倉院事務所	成 瀬 正 和	博物館美術館における害虫対策の動向と課題
97. 5. 30	国立民族学博物館における事例	国立民族学博物館	宇 治 谷 恵	博物館美術館における害虫対策の動向と課題
97. 6. 11	染織品の保存と管理	米国歴史博物館	ポリー・ウィルマン	
97. 8. 23	殷墟発掘の最近の成果	保存科学部招へい研究員・中国社会科学院考古研究所	楊 錫 章	
97. 11. 14	文化庁による指導の詳細	文化庁美術工芸課	森 田 稔	第6回文化財施設の保存(収蔵展示)環境に関する研究会:文化財公開施設の計画—その現状と今後の問題
97. 11. 14	東文研における指導の内容	保存科学部	佐 野 千 絵	第6回文化財施設の保存(収蔵展示)環境に関する研究会:文化財公開施設の計画—その現状と今後の問題
97. 11. 25	石造文化財の劣化に対する多孔質内の水分・塩分移動の影響	保存科学部	石 崎 武 志	多孔質中の水分・塩分移動と塩類風化のメカニズム
97. 11. 25	van Genuchten 博士と米国塩類研究所の紹介	佐賀大学	取 出 伸 夫	多孔質中の水分・塩分移動と塩類風化のメカニズム
97. 11. 25	多孔質体中の水分移動のメカニズム	米国農務省塩類研究所	マルチヌス・ヴァン・ゲニヒテン	多孔質中の水分・塩分移動と塩類風化のメカニズム
97. 11. 25	土壌物理学分野におけるシミュレーション手法の現状	三重大学	溝 口 勝	多孔質中の水分・塩分移動と塩類風化のメカニズム
97. 11. 25	多孔質体中の水分・塩分移動のシミュレーション	鳥取大学	井 上 光 弘	多孔質中の水分・塩分移動と塩類風化のメカニズム
97. 11. 25	イースター島モアイ像の劣化と保存修復	奈良国立文化財研究所	沢 田 正 昭	多孔質中の水分・塩分移動と塩類風化のメカニズム

期 日	題 目	所 属	発 表 者 名	
97. 11. 25	タイ、アユタヤ遺跡におけるレンガ建造物の塩類風化の現状	国際文化財保存修復センター	朽 津 信 明	多孔質中の水分・塩分移動と塩類風化のメカニズム
97. 11. 25	海外における石造文化財の保存対策一特に塩類風化について	国際文化財保存修復センター	西 浦 忠 輝	多孔質中の水分・塩分移動と塩類風化のメカニズム
97. 11. 26	不飽和多孔質体中の透水性の評価と測定法に関する最近の動向	米国農務省塩類研究所	マルチヌス・ヴェン・ゲニヒテン	多孔質体中の物質移動の研究の新しい動向（於東京大学農学部）
97. 11. 26	凍結や乾燥過程における多孔質体内の水分・塩分移動と氷晶および塩類の析出機構について	保存科学部	石 崎 武 志	多孔質体中の物質移動の研究の新しい動向（於東京大学農学部）
97. 11. 26	大型不攪乱土ライシメータを用いた撥水性の砂中に生ずる選択流に関する研究	佐賀大学	ゲリット・ルイジ	多孔質体中の物質移動の研究の新しい動向（於東京大学農学部）
97. 11. 26	通電によるコンクリート中のイオンの移動	東京工業大学	久 田 真	多孔質体中の物質移動の研究の新しい動向（於東京大学農学部）
98. 2. 9	千葉市美術館における展示ケース設計の現状と問題	千葉市美術館	田 辺 昌 子	第7回文化財施設の保存（収蔵展示）環境に関する研究会：展示ケースのUtilityとUsability（於千葉市美術館）
98. 2. 9	展示ケースの設計・発注における注意点	(株)イトーキ	榎 本 憲 司	第7回文化財施設の保存（収蔵展示）環境に関する研究会：展示ケースのUtilityとUsability（於千葉市美術館）

5) 修復技術部

期 日	題 目	所 属	発 表 者 名
97. 10. 7	ヨーロッパにおける近代化遺産の修復の現状について	修復技術部招へい研究員・ベルリン交通と技術博物館	フ ォ ル ケ ・ケ ス リ ン ク
97. 12. 1	町並み保存の動機付けと歴史地区における都市計画手法	ゲルハルト・メルカトール大学	ウ ー タ ・ホ ー ン
98. 2. 26	ドイツにおける産業文化財の修復・保存について	修復技術部招へい研究員・ドイツ修復家協会	コ ル ネ リ ウ ス ・ゲ ッ ツ

6) 国際文化財保存修復協力センター

期 日	題 目	所 属	発 表 者 名	
98. 2. 27	国際文化財生物劣化学会 of 経緯と展望（於東京国立博物館）	東京芸術大学客員教授	桜 井 英 夫	文化財生物劣化研究会 文化財保存修復学会との共催
98. 2. 27	東南アジアにおける生物劣化の現状と課題（於東京国立博物館）	タイ国立博物館	チ ラ ポ ー ン ア ラ ニ ャ ナ ッ ク	文化財生物劣化研究会 文化財保存修復学会との共催
98. 2. 27	ゲティ保存研究所における生物劣化の研究動向（於東京国立博物館）	米・ゲティ保存研究所	前 川 信	文化財生物劣化研究会 文化財保存修復学会との共催
98. 2. 27	文化遺産の生物劣化に対するユネスコの考え方（於東京国立博物館）	ユネスコ	野 口 英 雄	文化財生物劣化研究会 文化財保存修復学会との共催
98. 2. 27	総合討議 生物劣化研究の進め方と研究ネットワークの構築について（於東京国立博物館）			文化財生物劣化研究会 文化財保存修復学会との共催
98. 3. 14	アクロポリスの歴史とその修復 Acropolis, history and restoration	ギリシア文化省アクロポリス文化財保護委員会	マ ノ リ ス ・コ レ ー ス	日本イコモス国内委員会との共催

2. 調査指導など

(1) 所外経費による調査指導

公費・文部省科学研究費補助金・受託研究費などの所内の経費によらずに調査指導を行った事例は下記の通りである。

氏名	調査先	目的
青木 繁夫	新治村中央公民館	武者塚古墳出土遺物保存の指導
青木 繁夫	月夜野町	矢瀬遺跡保存整備委員会の出席・矢瀬遺跡保存のための土質調査
青木 繁夫	清巖寺	重要文化財清巖寺鉄塔婆の修復調査
青木 繁夫	千葉県文化財センター	埋蔵文化財専門技術講習会の講師
青木 繁夫	ドイツ	ICOMOS 金属修復会議の出席
青木 繁夫	静岡県埋蔵文化財調査事務所	五ヶ山 B-2 号出土遺物保存処理検討会議の出席
青木 繁夫	広島市	原爆ドーム保存にかかる指導調査
青木 繁夫	清水市	巴川出土丸木舟保存処理指導委員会への出席
青木 繁夫	佐賀県立九州陶磁文化館	柿右衛門様式の総合調査指導
石崎 武志	旭川市	旧旭川偕行社屋上煙突煉瓦の劣化防止に関する指導
尾立 和則	成田空港	在外日本美術品（絵画）の輸送の随行
尾立 和則	ドイツ・英国	在外日本古美術品修復協力事業に関する事前調査
蒲生 郷昭	長野県民文化会館	国際民俗芸能フェスティバル実施等の指導
川野邊 渉	法界寺	修復材料の打ち合わせ・法界寺修復にかかる調査
川野邊 渉	長崎市本田家住宅	煉瓦建造物の劣化調査
川野邊 渉	広島市	原爆ドーム保存にかかる指導調査
木川 りか	国文学研究資料館	記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究
朽津 信明	フゴッペ洞窟	史跡フゴッペ洞窟保存委員会の出席
朽津 信明	群馬県埋蔵文化財調査事業団	観音山古墳出土埴輪の顔料に関する指導・助言
朽津 信明	旭川市	旧旭川偕行社屋上煙突積煉瓦の劣化防止に関する指導
朽津 信明	京都市	法界寺壁画修復のための接着剤仕様に関する壁画の顔料調査指導
朽津 信明	福島県双葉町	史跡「清戸迫横穴墓」の装飾壁画保存措置に関する現地指導
佐野 千絵	かみつけの里博物館	博物館環境調査
佐野 千絵	徳島県立博物館	共同研究「博物館資料の保存環境」による研究会への出席
佐野 千絵	京畿道博物館ほか	京畿道博物館の環境調査
佐野 千絵	京都文化博物館	博物館環境の調査研究
佐野 千絵	高知県紙産業技術センター・伊野町紙の博物館	歴史資料の紙質に関する調査研究
佐野 千絵	国立歴史民俗博物館	研究会への出席
島尾 新	静岡県立美術館	仮想の楽園展にともなう講演会通訳の派遣
田中 淳	岩手県立博物館	萬鐵五郎展の展示指導
田中 淳	佐野美術館	黒田清輝展にともなう講演会講師の派遣

氏名	調査先	目的
長岡龍作	高蔵寺・大徳寺	彫刻作品合同調査
長岡龍作	願成寺	彫刻作品合同調査
長岡龍作	中尊寺	彫刻作品調査
長岡龍作	京都国立博物館	金剛心院蔵如来立像等の技法および様式の調査研究打ち合わせ
長岡龍作	慈恩寺・東北歴史資料館・瑞巖寺	慈恩寺他所蔵の平安彫刻に関する合同調査
中島健次	米国	在外日本古美術品修復協力事業の事前調査
中野照男	四街道市教育委員会	四街道市文化財審議会への出席、市内所在文化財の調査
西浦忠輝	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	大分県石造文化財調査委員会への出席
西浦忠輝	シリア	アインダーラ神殿遺跡保存修復に関する調査・研究・指導
西浦忠輝	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	大分県石造文化財調査委員会への出席
野久保昌良	高蔵寺・大徳寺	X線等の写真撮影
野久保昌良	願成寺・仙台市博物館・中尊寺	X線等の写真撮影
野久保昌良	中尊寺	中尊寺所蔵美術工芸品の写真撮影およびX線写真撮影
羽田昶	黒部市・新発田市・新田市・座間市	移動芸術祭巡回公演の解説
平尾良光	天理大学	資料調査
平尾良光	トルコ	トルコ共和国カマン・カレホユック遺跡の出土品調査
平尾良光	佐賀県立博物館	青銅製品の調査
平尾良光	佐賀県立博物館	弥生時代青銅器の研究
増田勝彦	国文学研究資料館	記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究
増田勝彦	カンザスシティ・ニューヨーク・プリンストン	在外日本古美術保存修復協力事業のための調査
増田勝彦	京都国立博物館	京都国立博物館文化財保存修理所運営委員会の出席
松下冬樹	ドイツ・英国	在外日本古美術品修復協力事業の事前調査
松下冬樹	京都市教育委員会	第7回アジア文化財保存セミナー・サイトセミナー運営
松下冬樹	フランス・イタリア・米国	在外日本古美術品修復協力事業の事前調査
松島健	中尊寺	中尊寺所蔵仏像調査
松島健	高蔵寺・大徳寺	中尊寺を中心とする奥州藤原文化圏の美術工芸品に関する総合的調査研究
松島健	願成寺	中尊寺を中心とする奥州藤原文化圏の美術工芸品に関する総合的調査研究
松島健	東大寺	仏像彫刻取扱指導
松島健	緒方町	まちづくりフォーラム'97 講演「豊後の石仏」
松本修自	京都市教育委員会	第7回アジア文化財保存セミナー・サイトセミナー運営
松本修自	松山市立埋蔵文化財センター	史跡来住庵寺跡調査検討委員会への出席
松本修自	富田林市	市伝統的建造物群（寺内町）保存審議会の出席および現地視察
三浦定俊	鹿児島県隼人町立歴史民俗資料館	隼人塚整備検討委員会への出席

氏名	調査先	目的
三浦定俊	隼人町教育委員会	隼人塚整備保存のための指導
三浦定俊	余市町教育委員会	フゴッベ洞窟保存調査委員会への出席
三浦定俊	イタリア	ICCROM 財政事業計画委員会、FPC・AAB 合同委員会への出席
三浦定俊	国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館重要歴史資料調査分析研究による調査
三浦定俊	長岡百穴	長岡百穴保存整備にともなう指導・助言
三浦定俊	カナダ	第9回モントリオール議定書締約国会議および第16回作業部会会議の出席
三浦定俊	南蛮文化館	収蔵品の調査
三浦定俊	イタリア	ICCROM 財政事業計画委員会、FPC・AAB 合同委員会および総会の出席
三浦定俊	奈良国立文化財研究所	平原方形周溝墓出土品修理委員会
宮本長二郎	青森県教育委員会	青森市三内丸山遺跡発掘調査指導委員会、集落復元専門委員会の出席、三内丸山遺跡発掘調査および整備事業現地指導
宮本長二郎	南河内町教育委員会	下野薬師寺跡保存整備委員会への出席
宮本長二郎	新潟県佐渡郡新穂村教育委員会	蔵王遺跡発掘調査指導
宮本長二郎	奈良国立文化財研究所	アンコール文化遺産保護共同研究に関する検討委員会への出席
宮本長二郎	鹿児島県埋蔵文化財センター	上野原遺跡住居復元の指導
宮本長二郎	富山県小矢部市教育委員会	桜町遺跡発掘調査現地指導・出土建築材の調査
宮本長二郎	鹿児島県教育委員会	国分市上野原遺跡保存活用検討委員会への出席
宮本長二郎	山形県天童市教育委員会	史跡西沼田遺跡発掘調査指導
宮本長二郎	福岡県甘木市教育委員会	史跡平塚川添遺跡整備指導
山梨絵美子	佐野美術館	黒田清輝巡回展の展示
山梨絵美子	愛媛県立美術館	「中川八郎とその時代」展にともなう講演会の講師派遣
横山直樹	千葉大学	物品等の一般（指名）競争参加資格審査事務の一括処理に関する説明会への出席
與那原進	京都市教育委員会	第7回アジア文化財保存セミナー・サイトセミナーの運営
米倉迪夫	大阪大学	大阪大学における講義

(2) その他の調査指導

1) 文化財の材質に関する調査

金属製文化財を中心に、その材質の調査・分析を行った。(平尾・早川)

総依頼件数 33件 369試料

分析内容内訳 (1試料当たり複数箇所分析あり)

蛍光 X 線分析 (XRF) 約 300 測定

鉛同位体比測定 (PBIR) 約 300 測定

依頼元および調査対象は下記の通りである。

文化庁美術工芸課	銅象嵌製品 1 点	(XRF)
東京国立博物館	鍍金経筒 1 点	(XRF, PBIR)
東京国立博物館	金銅製馬具 2 点	(XRF)
東京国立博物館	サーベル 4 点	(XRF)
東京国立博物館	水瓶 1 点	(XRF)
東京国立博物館	経筒 2 点	(XRF, PBIR)
東京国立博物館	銅剣 12 点	(PBIR)
東京国立博物館	福岡県出土青銅器 4 点	(PBIR)
東京国立博物館	密教用具 1 点	(XRF, PBIR)
東京国立博物館	青銅製品 8 点	(XRF, PBIR)
東京国立博物館	経筒 4 点	(XRF, PBIR)
東京国立博物館	銀製飾りピン 1 点	(XRF)
東京国立博物館修理室	馬具 14 点	(XRF, PBIR)
東京国立博物館修理室	馬具 9 点	(XRF, PBIR)
日本銀行貨幣博物館	大判 1 点	(XRF, XRD)
茨城県教育財団	耳環 1 点	(XRF, PBIR)
茨城県教育財団	小仏像 1 点	(XRF, PBIR)
栃木県教育委員会	耳環 2 点	(XRF, PBIR)
佐賀県教育庁	佐賀県出土青銅器 66 点	(PBIR)
大分県教育委員会	銅鏡片 1 点	(XRF, PBIR)
山梨県櫛形町教育委員会	金属製遺物 1 点	(XRF, PBIR)
茨城県千代川村教育委員会	小仏像 1 点	(XRF, PBIR)
新潟県佐渡郡教育委員会	銅鏡 2 点, 銅鏃 1 点	(XRF, PBIR)
大分県日田市教育委員会	銅鏡片 1 点	(XRF, PBIR)
早稲田大学	青銅製遺物 1 点	(PBIR)
武蔵文化財研究所	小銅鐸 1 点	(PBIR)
中近東文化センター	カマン・カレホユック出土金属製品 50 点	(XRF, PBIR)
泉屋博古館	殷周青銅器 98 点	(PBIR)
元興寺文化財研究所	青銅製鏡他 17 点	(PBIR)
元興寺文化財研究所	青銅製品 5 点	(PBIR)
(株)応用地質	青銅製遺物 4 点	(XRF, PBIR)
韓国湖巖美術館	朝鮮古銭 50 点	(PBIR)

2) 美術館・博物館等館内の環境調査

国宝・重要文化財などの指定品および東京国立博物館収蔵資料の借用展示に関して館内環境調査を行い、報告書を作成・提出した。(三浦・佐野)

北海道	北海道立近代美術館 北網圏北見文化センター	長野	豊科町近代美術館
岩手	前沢町立牛の博物館	静岡	三嶋大社宝物館
宮城	宮城県図書館	愛知	春日井市道風記念館
福島	須賀川市立博物館	滋賀	MIHO MUSEUM
茨城	茨城県立天心記念五浦美術館	京都	(財)細見美術館
群馬	かみつけの里博物館	大阪	大阪城天守閣
千葉	伊能忠敬記念館	奈良	法隆寺百済観音堂・新宝蔵館
東京	台東区立朝倉彫塑館 学習院大学史料館 日本刀装具美術館 (財)ブリヂストン美術館	岡山	高梁市歴史美術館
新潟	新津市美術館 青海町自然史博物館	広島	広島県立美術館
		山口	徳山市美術博物館
		愛媛	愛媛県立歴史博物館
		高知	高知県立美術館
		長崎	長崎県立対馬歴史民俗博物館
		鹿児島	指宿市考古博物館

現地調査は宮城県図書館、秋田市千秋美術館、茨城県天心記念五浦美術館、かみつけの里博物館、川村記念美術館、東京都公園協会小石川後楽園、大倉集古館、学習院大学史料館、三嶋大社宝物館、佐野美術館、MOA 美術館、(財)細見美術館、京都服飾文化研究財団、平等院収蔵庫、醍醐寺新収蔵庫、大塚国際美術館の 16 館。

また北海道開拓記念館など、全国 163 館の新設既設美術館・博物館等文化財展示収蔵施設に対して環境改善に関する相談を受け、助言を行った。これらの館については各館ごとに環境調査ファイルを作成して調査を行っている。

北海道	北海道開拓記念館 北海道立帯広美術館 北網圏北見文化センター 北海道立近代美術館 荒井記念美術館		国土地理院地図と測量の科学館
岩手	一関市博物館 岩手県教育委員会美術館整備室 前沢町立牛の博物館 石巻文化センター 中尊寺新讚衡蔵	栃木	宇都宮文化の森美術館 栃木県立美術館 日光山輪王寺宝物館
宮城	村田町歴史みらい館 瑞巖寺宝物館 宮城県図書館 宮城県使節船ミュージアム 東北歴史博物館	群馬	かみつけの里博物館
秋田	秋田県立近代美術館 角館町平福記念美術館	埼玉	朝霞市立博物館 さいたま川の博物館 行田市郷土資料館 鷺宮町立資料館 日本大学総合学術情報センター
山形	酒田市市民美術館 山寺芭蕉記念館	千葉	佐原市美術館 川村記念美術館 大原幽学記念館 伊能忠敬記念館
福島	須賀川市立博物館 野馬追いの里歴史民俗資料館 会津若松城天守閣郷土博物館 柳津町斎藤清美術館	東京	東京国立博物館平成館 東京国立博物館法隆寺宝物館 東京国立近代美術館フィルムセンター 東京芸術大学新美術館 宮内庁書陵部新補修室 東京都写真美術館 東京都庭園美術館 江戸東京たてもの園 東京都公園協会小石川後楽園 大倉集古館
茨城	茨城県立天心記念五浦美術館		

	日本銀行金融研究所貨幣博物館		MIHO MUSEUM
	台東区朝倉彫塑館		佐川美術館
	物流博物館		滋賀県立琵琶湖文化館
	板橋区郷土資料館	京 都	宇治市源氏物語ミュージアム
	北区郷土博物館建設準備室		(財)細見美術館
	世田谷区美術館		平等院収蔵庫
	世田谷区郷土資料館		舞鶴市郷土資料館
	日本刀装具美術館		醍醐寺新収蔵庫
	ブリヂストン美術館		宮津市歴史館
	齊田茶文化振興財団		園部町教育委員会
	学習院大学史料館		泉屋考古館
神奈川	岡本太郎美術館		(財)茶道資料館
	鎌倉市立籙木清方記念美術館		京都服飾文化研究財団
新 潟	新津市美術館	大 阪	泉南市埋蔵文化財センター
	新潟県立博物館		大阪城天守閣
	青海町自然史博物館		大阪人権博物館
富 山	富山県教育委員会新美術館建設班		大阪青山短期大学歴史文学博物館
	新湊市博物館		和泉市歴史資料館
石 川	石川県七尾美術館		大阪府土木部砂防課
	能都町真脇縄文館		大阪市都市整備局住まいの情報センター
福 井	福井市美術館		サントリーミュージアム天保山
	福井市郷土歴史博物館	兵 庫	小野市立好古館
	織田町文化歴史館		兵庫県立新美術館(芸術の館)
	勝山市勝山城博物館		姫路文学館
	三方町縄文館		兵庫県立陶芸館
長 野	長野県立歴史館		太子町立歴史資
	豊科近代美術館	奈 良	奈良国立博物館
	飯田市立美術館		水平社歴史館建設委員会
	碓山美術館		法隆寺百済観音堂・新宝蔵院
	下諏訪町立諏訪湖博物館・赤彦記念館	和歌山	和歌山県立近代美術館
	田中本家博物館		熊野古道なかへち美術館
	梅野記念絵画館	鳥 取	鳥取市立博物館準備室
岐 阜	多治見市博物館	島 根	島根県立美術館建設準備室
	美濃加茂市文化の森プラザ	岡 山	高梁市歴史美術館
静 岡	三嶋大社宝物館		成羽町美術館
	MOA 美術館		笠岡市立竹喬美術館
	静岡市アートギャラリー	広 島	広島県立美術館
	豊田町香りの博物館		頼山陽史跡資料館
	天童市秋野不矩美術館		大田庄歴史館
	富士市博物館	山 口	下関市考古博物館
	掛川市二の丸美術館		山口県立萩美術館・浦上記念館
	佐野美術館		徳山市美術博物館
	日本建築専門学校	香 川	大塚国際美術館
愛 知	田原町博物館	愛 媛	愛媛県立歴史文化館
	知多市民俗資料館		愛媛県立美術館
	尾西市三岸節子記念館		愛媛県生活文化部生涯学習課(0中核美術館)
	愛知県美術館	高 知	高知県立美術館
	愛知県陶磁資料館	福 岡	春日市ふれあい文化センター-弥生の里
	名古屋ホストン美術館		筑紫野市ヒストリー アンド カルチャーセンター
三 重	三重県教育委員会センター博物館建設室	佐 賀	唐津市立近代図書館
	鈴鹿市考古博物館(仮)	長 崎	長崎県立対馬歴史民俗資料館
	朝日町歴史博物館	熊 本	熊本県立美術館
	四日市市博物館	大 分	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
滋 賀	滋賀県立琵琶湖博物館	宮 崎	都城市立美術館
	能登川町立博物館		西都市歴史民俗資料館
	多賀町博物館近江商人博物館	鹿児島	指宿市考古博物館
		沖 縄	浦添市美術館

3) 文化財の虫害等被害に対する調査指導

虫・カビ等による文化財への被害について調査し、指導・助言を行った（木川・三浦・佐野・山野）。

調査先
 北海道 史跡フゴッペ洞窟
 東京 東京国立博物館
 日本銀行貨幣博物館
 東京都美術館
 武蔵野音楽大学楽器博物館
 ブリヂストン美術館
 静岡 八幡宮来宮神社

4) 文化財の修復および整備に関する調査指導

文化財の修復に関する調査指導は下記の通りである。

依 頼 先	調 査 指 導 の 内 容	担 当 者
千葉県千葉市	史跡加曾利貝塚遺構の保存修復指導	青木・朽津
東大寺	国宝金銅八角灯籠修復指導	青木
長崎県対馬歴史民俗資料館	収蔵庫ならび文書に対する修復処置の状況の調査	尾立
広島市江波山気象館	常設展示品の保存修復計画に対する指導	尾立
外務省外交史料館	外交文書修復法に対する助言	川野邊
文化庁建造物課	水戸八幡宮の彩色復元に対する助言	川野邊
文化庁建造物課	旭川皆行社煉瓦製煙突の修復に対する助言	川野邊
文化庁建造物課	旧近衛師団の煉瓦壁劣化の原因究明と防止法に関する助言	川野邊
文化庁建造物課	和歌山県和歌山市 重文和歌山東照宮の彩色修復法に対する助言	川野邊・朽津
東京都	第五福竜丸船体の保存・修復計画に対する助言	川野邊
東京都	第五福竜丸エンジンの保存・修復計画に対する助言	川野邊
福島県小高町	史跡薬師堂石仏	朽津
茨城県	茨城県武者塚古墳出土遺物の保存修復指導	青木
栃木県野木町	重要文化財旧下野煉瓦窯の修復協力	青木・川野邊・朽津
長崎県教育委員会	史跡壱岐原の辻遺跡整備・発掘調査指導委員会	宮本
建設省吉野ヶ里歴史公園事務所	国営吉野ヶ里公園復原検討委員会の出席	宮本
松本市教育委員会	史跡松本城公園整備研究会	宮本
相生市教育委員会	史跡感状山城整備委員会	宮本
東京国立博物館	西都原古墳出土家形埴輪修理委員会	宮本・青木
津山市建設部街づくり対策課	景観（城下町）整備指導	松本
宮内庁正倉院事務所	正倉院蔵伎楽面の修理に対する助言・指導	中里

(4) 講習会等への協力

文化庁および都道府県教育委員会が主催する講習会等で講師を務めた。

氏名	期日	講習会名	講習内容
青木 繁夫	97. 9. 4	平成9年度文化庁建造物課修理主任技術者講習会・上級コース	修復技術特論
青木 繁夫	97. 9.24	千葉県発掘調査担当者講習会	埋蔵文化財の保存について
木川 りか	97. 7.15	平成9年度文化庁指定文化財展示取扱講習会・東ブロック	文化財の保存 劣化Ⅱ：生物
木川 りか	97.11.18	平成9年度文化庁指定文化財展示取扱講習会・西ブロック	文化財の保存 劣化Ⅱ：生物
西浦 忠輝	97. 7.16	平成9年度文化庁指定文化財展示取扱講習会・東ブロック	文化財の保存 劣化Ⅲ：木、金属、石等
西浦 忠輝	97.11.19	平成9年度文化庁指定文化財展示取扱講習会・西ブロック	文化財の保存 劣化Ⅲ：木、金属、石等
平尾 良光	97. 7.15	平成9年度文化庁指定文化財展示取扱講習会・東ブロック	文化財の保存 劣化：化学
平尾 良光	97.11.18	平成9年度文化庁指定文化財展示取扱講習会・西ブロック	文化財の保存 劣化：化学
三浦 定俊	97. 7.15	平成9年度文化庁指定文化財展示取扱講習会・東ブロック	文化財の保存 環境
三浦 定俊	97. 9. 4	平成9年度文化庁建造物課修理主任技術者講習会・上級コース	保存科学特論
三浦 定俊	97.11.18	平成9年度文化庁指定文化財展示取扱講習会・西ブロック	文化財の保存 環境
増田 勝彦	97. 9. 1	平成9年度文化庁建造物課修理主任技術者講習会・上級コース	文化財保護論
増田 勝彦	97. 9.12	国文学研究資料館史料館研修	劣化損傷史料の保存修理Ⅰ
増田 勝彦	97. 9.16	国文学研究資料館史料館研修	史料の保存環境と劣化損傷要因
増田 勝彦	98. 2. 3	平成9年度埼玉県文書館文書史料取扱講習会	史料の保存科学

3. 研 修

(1) 「紙の保存修復」国際研修

趣 旨

我が国の装幀技術において基本である裏打ちの技術は1) 各種の薄い楮紙と生麩糊を用いる、2) 裏打ったものを仮貼りというパネルに貼って乾燥させる、3) 道具として用途別に分化した各種の刷毛を用いるという3種の技術が組み合わさり、組織化された技術である。

楮紙は薄くて柔軟性をもち、かつ丈夫さを兼ね備えていること、澱粉糊は適当な接着性をもち、かつ対象に対して安全性が高いことが特徴である。こうした我が国の裏打ち技術は古文献・版画など紙の文化財の修理・補強だけでなく、文化財の保存に広く用い得る可能性があり、技術研修を望む声が強い。国際文化財保存修復研究センター (ICCROM) の要望もあり、1992 (平成4) 年度より、日本で開催し、我が国の裏打ち技術の普及を図ることにしたものである。

成 果

研修は本年度で6年目を迎え、参加者77名に達しており、装幀技術の普及に相当の効果を上げている。

研修期間 1997年11月20日～12月11日 22日間
(招へい期間) 1997年11月19日～12月13日 25日間
研修会場 11月20日～11月21日 東京国立文化財研究所
11月22日～12月11日 京都国立博物館
12月5日～12月6日 奈良市・奈良県吉野郡吉野町
参加者数 12名

日 程

11月20日(木)	開会式 研修の趣旨説明	
11月21日(金)	文化財概論 日本の文化と紙 日本における文化財の保護	所長 渡 邊 明 義 渡 邊 明 義
11月22日(土)	京都へ移動 京都博物館訪問	
11月23日(日)	自由行動	
11月24日(月)	自由行動	
11月25日(火)	オリエンテーション 文化財概論 紙の劣化について 伝統的な彩画材料	修復技術部 増 田 勝 彦 東京芸術大学 稲 葉 政 満 東京芸術大学 杉 下 龍 一 郎
11月26日(水)	技術研修 裏打ちの道具と材料 糊の作り方 紙の裁断と接合の方法 仮張り製作	尾 立 和 則
11月27日(木)	技術研修 仮張り製作 裂地の裏打ち	
11月28日(金)	技術研修 墨流し 砂子蒔き 仮張り製作	

(2) 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修

近年博物館・美術館の数が増加すると共にその施設が近代化し、燻蒸室、保存・修理などの保存に関する設備が整備されて保存部門を担当する職員が配置されつつある。しかし、これらの職員が保存科学の知識や技術を修得しようとしても適当な学習の場や教材がないのが現状である。そのために博物館、美術館などの学芸員の保存担当者を対象に、文化財の科学的保存に関する基本的な知識及び技術について研修を行い、その資質の向上をもって文化財の保護に資することを目的とし、第14回研修会を開催した。

期 間 1997年7月14日～7月25日

参加者数 21名

プログラム

7月14日(月)

開講式・オリエンテーション

保存環境 総論	—文化財の保存と環境—		三浦定俊
保存環境 各論	—温湿度—		三浦定俊
保存環境〈実習〉	—温湿度測定機器の取扱い—		三浦定俊

7月15日(火)

保存環境 各論	—展示梱包ケースの湿度調節—	国立歴史民俗博物館	神庭信幸
保存環境〈実習〉	—湿度の制御法—		三浦定俊
保存環境 各論	—室内汚染—		佐野千絵
保存環境 各論	—大気汚染とその影響—		平尾良光

7月16日(水)

生物被害 虫	—害虫の生態と被害—		山野勝次
保存環境 各論	—光と劣化—		佐野千絵
保存環境 各論	—照度基準—		神庭信幸
保存環境〈実習〉	—照度の測定と調節—		佐野千絵

7月17日(木)

生物被害 カビ	—要因とメカニズム—		木川りか
保存環境〈実習〉	—環境調査 1—		佐野千絵
劣化と保存 各論	—油彩画—	東京芸術大学	歌田真介
劣化と保存 各論	—漆—		中里壽克
所内見学			

7月18日(金)

劣化と保存 各論	—木—		西浦忠輝
劣化と保存 各論	—石—		西浦忠輝
修復材料 各論	—絵画の彩色層—		尾立和則
劣化と保存 各論	—ガラス—		朽津信明
保存環境〈実習〉	—環境調査 2—		佐野千絵

7月22日(火)

劣化と保存 各論 一紙一
劣化と保存 各論 一伝統材料一
劣化と保存 各論 一金属 1一
劣化と保存 各論 一金属 2一
修復材料 各論 一合成樹脂一

増田勝彦
増田勝彦
青木繁夫
青木繁夫
川野邊渉

7月23日(水)

調査手法 各論 一化学分析一
調査手法 各論 一画像計測一
劣化と保存 各論 一考古遺物一
保存環境(実習) 一環境調査 3, 4一

平尾良光
三浦定俊
青木繁夫
佐野千絵

7月24日(木)

ケーススタディ(於:古河歴史博物館)
一博物館・美術館における収蔵・展示の問題とその対策一

佐野千絵
三浦定俊

7月25日(金)

イギリスにおける修復論争史
文化財の国際交流
閉講式

東京芸術大学 井口智子
三浦定俊

研修参加者名および所属

安部 則 男 足立美術館
牛場 珠 代 目黒区美術館
内海 靖 子 (財)白鶴美術館
胡 光 香川県歴史博物館
大貫 摩 里 日本銀行金融研究所貨幣博物館
吉川 美 也 (財)吉川報効会吉川史料館
久保田 稔 男 国立科学博物館
幸野 昌 賢 耕三寺博物館
高橋 正 秋田県立博物館
立石 尚 之 古河歴史博物館
田中 正 之 国立西洋美術館
中岡 進 (財)会津若松市観光公社
芳賀 淑 子 山口県立萩美術館・浦上記念館
長谷川 孝 徳 石川県立歴史博物館
幅 大 千葉県立美術館
原田 和 彦 松代藩文化施設管理事務所
藤川 耕 一 祐徳博物館
松田 弘 広島県立美術館
三世 善 徳 豊橋市二川宿本陣資料館
宮川 正 純 (財)田中本家博物館
宮本 裕 次 大阪城天守閣

(3) 海外学術調査員および研究者のための保存修復講座

海外学術調査における調査員、研究者に対して、調査現場の文化財の保存修復にたいする応急的、実際的な保存修復の講義と実習を行い、その資質の向上を図り、文化財の保存修復に資することを目的とする。

期 間 1997年5月12日～1998年2月23日

第1期 1997年5月～7月

第2期 1997年10月～12月

第3期 1998年1月～2月

毎週月曜 午後6:00～8:00

場 所 別館会議室

担 当 青 木 繁 夫 (修復技術部)

講義内容

第1期 保存修復とは

保存計画

資料の調査法

資料の保管方法と保管環境整備

遺跡における応急的保存処理

第2期 金属製品の保存処理

石製品の保存処理

土製品の保存処理

木製品の保存処理

第3期 染織品の保存処理

骨・象牙等の保存処理

参加者数 8名

参加者名および所属

高 宮 いづみ 早稲田大学古代エジプト調査室・早稲田大学非常勤講師

足 立 拓 朗 青山学院大学史学研究室助手

斉 藤 信 弘 千駄ヶ谷5丁目遺跡調査会調査員

徳 江 佐知子 東京大学大学院博士課程総合文化研究科

有 村 誠 筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科

渡 部 森 哉 東京大学大学院博士課程総合文化研究科

和 田 浩一郎 早稲田大学古代エジプト調査室嘱託

谷 口 陽 子 東京芸術大学修士課程保存科学専攻

(4) 博物館学実習

博物館・美術館の学芸員資格を得るためには、博物館施設での実習が必修とされている。毎年、美術部と情報資料部は近代美術を主な内容とする博物館学実習を行っている。

日 時 1997年9月7日～9月12日

会 場 東京国立文化財研究所

参加者数 15名

プログラム

第1日 9月1日(月)

午前 オリエンテーション

アジアの博物館・美術館

日本の展覧会の現状

午後 東京国立文化財研究所所蔵の日本近代美術資料

黒田清輝記念室見学

近・現代美術資料の収集・作成の意義と現状

田 中 淳・山 梨 絵美子
鶴 田 武 良
田 中 淳
山 梨 絵美子
田 中 淳
山 梨 絵美子

第2日 9月2日(火)

午前 近・現代美術資料の収集・作成実習

(1) 新聞文献

(2) 雑誌文献

(3) 写真文献

午後 文化財保存について

近・現代美術資料の収集・作成実習

田 中 淳・山 梨 絵美子
佐 野 千 絵
田 中 淳・山 梨 絵美子

第3日 9月3日(水)

近・現代美術資料の収集・作成実習

田 中 淳・山 梨 絵美子

第4日 9月4日(木)

午前 近・現代美術資料の収集・作成実習

午後 近・現代美術資料の収集・作成実習

美術品の調査について

島 尾 新・岡 田 健

第5日 9月5日(金)

午前 美術文献と情報処理

美術史研究と画像処理

午後 美術関係情報処理の実習

文化財の修復について

実習のまとめ

米 倉 迪 夫
長 岡 龍 作
米 倉 迪 夫・井 手 誠之輔
長 岡 龍 作・中 村 節 子
青 木 繁 夫

第6日 9月6日(土)

展覧会見学とまとめ

4. 文化財修復協力

(1) 在外日本古美術品保存修復協力事業

在外の博物館・美術館が所蔵する日本古美術品で価値の高い作品の修理に協力し、併せて修理対象作品を所蔵している博物館等と共同して、これに関連する研究を行う事業である。1991（平成3）年度から絵画を対象に事業を進めてきたが、すでに相当の成果を上げたことから、1997（平成9）年度からは工芸品など欧米の修理技術では修理が困難な分野にも協力対象を拡大した。

この事業によって所蔵作品の公開が高まるとともに、わが国の修復技術に対する理解も深まることができ、修復技術の交流が促進されている。本事業の立案のため、毎年現地に出張し、作品を調査するとともに、修理技術の内容について所蔵博物館と討論し、併せて輸送の手続きについて協議している。当研究所は修理内容の検討、修理作品お写真記録等の作成および整理・保存、国内外の輸送手続きに責任をもって当たっている。

この修理協力事業によって修理された作品は61件91点にのぼる。その作品の公開が増すことは当然であるが、修理協力事業が契機となって所蔵の日本古美術品に対する関心が新たに高まりつつあり、ヨーロッパでは日本の古美術品を所蔵する博物館の間で協力関係を結ぶネットワークが検討されている。

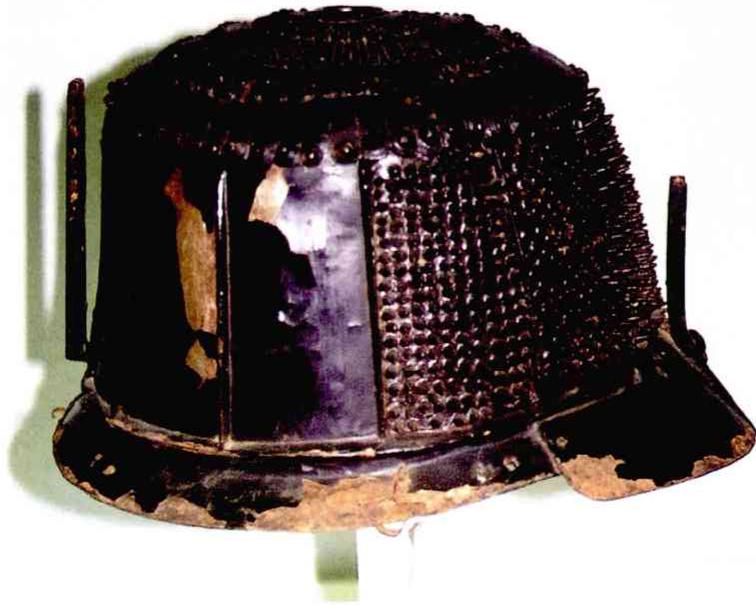
また文化財保存の専門家の交流も促進され、わが国の文化財修理技術の普及と理解に対し、大きな役割を果たしている。

	調 査 地	調 査 対 象 (内訳)
ド イ ツ	リンデン博物館	絵画12件 (10幅、2巻、10面)
ド イ ツ	ハンブルグ工芸博物館	絵画22件 (20幅、2六曲一双)
ド イ ツ	ベルリン東洋美術館	絵画15件 (16幅、2巻)
イギリス	アシュモリアン博物館	絵画7件 (4幅、2六曲一双、1二曲一双、1二曲一隻)
アメリカ	メトロポリタン美術館	工芸15件 (鞍3背、矢筒1筒、鏡1双、兜7頭、うつぼ1筒、鎧1領、剣1振)

ちなみに米国メトロポリタン美術館との間で、所蔵する刀剣・武具の修理協力について交渉を進めてきたが、1998（平成10）年度から修理協力事業を計画的にすすめることで合意、協約書を締結した。

ジャンル		所 蔵 先	修 理 作 品	製作年代		
絵 画	米 国	ダラス美術館	紙本金地著色 飲中八仙図屏風 六曲一双	江戸時代		
			絹本著色 文殊図 1幅	南北朝時代		
	米 国	クリーブランド美術館	絹本著色 十一面観音像 1幅	鎌倉時代		
			絹本著色 葉師十二神将像 額装 1面	鎌倉時代		
			紙本金地著色 南蛮屏風 六曲一双	桃山時代		
			絹本著色 不空像 額装 1面	南北朝時代		
	フランス	ギメ美術館	紙本墨画淡彩 繩衣文殊菩薩像 1幅	室町時代		
			絹本著色 普賢菩薩十羅刹女像 1幅	鎌倉時代		
			イタリア	キヨッソーネ美術館	絹本著色 吉原風俗図巻 1巻 菱川師宣筆	江戸時代
					紙本著色 風俗図巻 2巻 宮川長春筆	江戸時代
工 芸	米 国	クリーブランド美術館	絹本著色 三美人図 1幅	江戸時代		
			木製黒漆塗大般若経厨子 1基	12世紀		
	ド イ ツ	ケルン東洋美術館	蒔絵平文鞍 1背	16世紀後半		
			桜蒔絵器局 1基	17世紀前半		
			ド イ ツ	ドレスデン美術館	山水楼閣蒔絵花瓶 1対 二口	17世紀末

協力機関 文化庁
外務省現地公館
国際交流基金
芸術研究振興財団



黒漆兜（雑賀鉢） メトロポリタン美術館



菊紋螺鈿鞍 メトロポリタン美術館

5. 講座など

(1) 公開学術講座

美術部と情報資料部、そして芸能部はそれぞれ美術史研究と芸能研究の成果を一般に公開することを目的に、毎年1回公開学術講座を開いている。美術部・情報資料部の公開学術講座ではスライドを、また芸能部の場合では演者の実技を通じて、専門性の高い学術研究の内容をわかりやすく解説している。1966（昭和41）年度に始まった美術部・情報資料部の公開学術講座は本年度で第31回を数え、また1967（昭和42）年度に始まった芸能部の場合には本年度で第28回を数える。

第31回美術部・情報資料部公開学術講座

日 時 1997年10月22日（水）

会 場 東京都美術館講堂

入場者数 233名

発表者

岡田 健 岡倉天心と中国の仏像

岡倉天心（1862～1913）の1893（明治26）年7月から4ヶ月に及ぶ中国旅行は、日本美術史の研究者として、初めての中国美術調査を目的とした旅行だった。天心が紹介した中国の仏像によって、日本人は中国に日本の仏像の源流があることを知った。天心はその後半生において、ボストン美術館の中国美術の責任者として、大量の中国の仏像をアメリカへもたらした。天心が中国仏像の日本・アメリカへの紹介を通して果たした役割について考える。

松島 健 新発見の運慶様の不動明王立像

長野県諏訪市の仏法紹隆寺には、仏師運慶の作である静岡・願成就院や神奈川・浄楽寺の不動明王像に似た作風を持つ木造不動明王像が所蔵されている。仏法紹隆寺は、信濃国の一宮の諏訪大社と密接なかかわりのある寺院で、その諏訪大社の大祝職であった諏訪盛重が運慶一門を重用した執権北条氏の有力な被官であることを念頭におきつつ、X線調査によって確認された像内納入品の存在などから、本像の運慶一門による造立を推定する。



美術部・情報資料部公開学術講座
「岡倉天心と中国の仏像」

第 28 回芸能部公開学術講座

日 時 1997 年 10 月 29 日 (水)
場 所 台東区立旧東京音楽学校奏楽堂
入場者数 278 名

発表者

蒲生郷昭 日本の笛のあらまし

まず「日本書紀」「風土記」に見られる「笛」は、横吹きとは断定できないこと、日本で広く好まれる管楽器は、単式でダクトなしの構造のものに集中していること、この 2 点を確認した。そして、実技者の協力を得て、日本の重要な横笛各種に見られる、構造と技法の共通点と相違点を示し、同一の笛であっても曲種によって息の吹き入れ方を変えるなど、微妙な技法が駆使されていることを指摘した。

これは、中長期研究「日本音楽の伝承に関する研究」の成果を公表したものである。

高桑いづみ 能管の誕生とその後の展開

能で用いる笛「能管」は、管の内部に竹の細い管を差し込み、一部を狭くすることで音律が不規則になっている。このような構造がいつ頃考案されたのか不明だが、日本人はもともと音律に敏感ではなかったこと、物まね芸を主体とした能の場合、音律をあわせるよりはその場その場の情感にあった音を奏でる方が重要視されていたことなどを、平安時代の雅楽伝書や世阿弥の能伝書から指摘し、能管の音楽の特質についても解説した。

実演と話

雅楽 上 明彦
東儀 季祥
能 杉 市和
観世 元伯
長唄 中川 善雄
柗屋栄八郎
聞き手 蒲生 郷昭



能管と太鼓による総神楽の演奏

演奏曲目

1. 雅 楽
合音取 (神楽笛・箏築)
高麗調子 (高麗笛・箏築)
納曾利急 (高麗笛・箏築)
倭歌音取、大直日音取 (籠笛・箏築)
抜頭 (林邑乱声 / 音取 / 当曲) (籠笛)
2. 能
総神楽 (能管・太鼓)
3. 陰囃子、長唄
寝鳥×幽霊 三重、管弦、大太鼓入り、空笛 (能管 / 竹笛・三味線)
ドンタッポ、田舎笛、蓬菜 (部分)、越後獅子 (部分) (竹笛・三味線)
黒髪、神田祭 (部分) (竹笛・三味線)

(2) 夏期学術講座

伝統芸能研究の発展と文化財保護に役立てるため、当研究所芸能部の研究員が大学院生を対象に、その分野に関する無形文化財の調査研究の成果を講義する。

主 題 「翁（式三番）」の種々相

期 間 1997年7月7日～7月10日

10：30～12：00 13：15～14：45 15：00～16：30

場 所 別館会議室

参加者数 25名

プログラム

7月7日（月）

翁猿楽の歴史 羽 田 昶

「翁」の概観 羽 田 昶

翁・千歳の所作と囃子1 高 桑 いづみ

7月8日（火）

翁・千歳の所作と囃子2 高 桑 いづみ

三番叟の所作と囃子 羽 田 昶

民俗芸能の翁舞1 中 村 茂 子

7月9日（水）

民俗芸能の翁舞2 中 村 茂 子

近世邦楽の三番叟物1 蒲 生 郷 昭

近世邦楽の三番叟物2 蒲 生 郷 昭

7月10日（木）

歌舞伎舞踊の三番叟物 丸 茂 美恵子（日本大学講師）

近世演劇と式三番 鎌 倉 恵 子

質疑応答

(3) 能楽技法講座

能楽研究または関連する古典芸能研究を志す学生や若手研究者を対象に、能楽技法の分析と解明を中心に、能楽を楽劇として総合的に把握するための基礎的な講義を行う。

期 間 1995年9月6日～1997年6月25日

毎週水曜 午後6～8時

会 場 別館会議室・舞台

参加者数 約30名

プログラム

能本の分類

能の脚本構造と小段

謡の技法と実技

囃子の技法と実技

所作の技法

小書について

講 師

羽 田 昶 (芸能部)

高 桑 いづみ (芸能部)

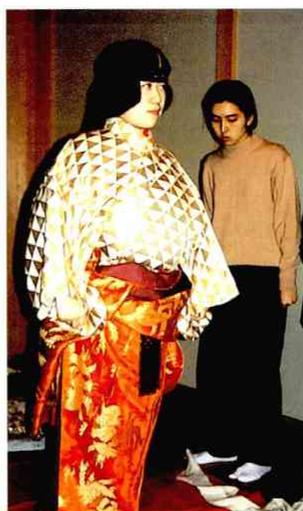
石 井 倫 子 (芸能部)

松 本 雍 (能楽研究家)

瀬 尾 菊 次 (金春流シテ方)



鬘の結髪



着付（鱗箔）と腰巻（縫箔）を付ける



上衣（唐織壺折）を着る

6. 大学院教育

—東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻システム保存学教室—

1995（平成7）年4月より東京芸術大学大学院と連携して大学院教育に従事し、これからの文化財保存を担う人材を育成している。システム保存学は、文化財の保存環境を研究する保存環境学講座と、保存修復に用いる材料について研究する修復材料学講座に分かれている。各講座3名ずつ、所員が併任教官として指導に当たっている。

受入学生の定員は、修士課程・博士課程ともに各学年2名である。1998（平成10）年度は修士課程に2名、博士課程に1名が在籍している。

(1) 併任教官及び担当授業

保存環境学講座

併任教授 三浦 定俊（保存科学部長） 保存環境計画論（前期）

併任教授 平尾 良光（保存科学部化学研究室長） 保存環境学特論（Ⅰ）（後期）

併任助教授 佐野 千絵（保存科学部主任研究官） 保存環境学特論（Ⅱ）（前期）

修復材料学講座

併任教授 宮本長二郎（国際文化財保存修復協力センター長） 修復計画論（後期）

併任教授 増田 勝彦（修復技術部長） 修復材料学特論（Ⅰ）（前期）

併任助教授 川野邊 渉（修復技術部主任研究官） 修復材料学特論（Ⅱ）（後期）

客員教授 西川杏太郎 集中講義「文化財保存学の基本」（平成9年9月24日）

助 手 井口 智子

(2) 文化財保存学演習（併任教官が担当）

第1回（1997年12月23日）：所内見学

第2回（1998年1月6日）：

講 義 「三内丸山遺跡と修復」 宮本長二郎併任教授

実 習 文化財調査法 X線透視撮影実習と赤外線カメラによる調査の実習

(3) 実験指導等

小瀬戸恵美 「ホルムアルデヒドによる美術品への影響」

指導教官（主）三浦定俊（副）佐野千絵・川野邊渉

竹之内 裕 「文化財建造物の修復に用いられた人工木材の追跡調査と改良への提案」

指導教官（主）川野邊渉（副）増田勝彦・佐野千絵

7. 出 版

当研究所は、毎年、学術雑誌・年鑑・国際研究集会プロシーディングス・研究会報告書・ニューズレターなど、多種多様な出版物を発行している。これらに掲載された研究論文や発表などは文化財の分野において最新の情報を伝えるものである。

(1) 定期刊行物

1) 美術研究

日本・東洋の古美術ならびに日本の近代・現代美術とこれらに関連する西洋美術について、研究論文・解説・資料等を掲載している。

『美術研究』第 368 号

後期印象派・考 — 一九一二年前後を中心に(上)

田中 淳

奈良・光明寺蔵 銅造如来立像 (図版解説)

岡田 健

『美術研究』第 369 号

留欧美術学生 — 近百年來中国絵画史研究 六一

鶴田 武良

後期印象派・考 — 一九一二年前後を中心に(中の一)

田中 淳

『美術研究』第 370 号

東寺毘沙門天像 — 羅城門安置説と造立年代に関する考察—

岡田 健

毘沙門天王法の請来と羅城門安置

松浦 正昭

2) 芸能の科学

古典芸能に関する研究論文・調査報告・資料翻刻等を掲載している。

『芸能の科学』26 号

ハヤフシで意図したもの — 世阿弥自筆本の小段表記をめぐって—

高桑いづみ

式三番覚書き — いわゆる元禄歌舞伎の時代—

鎌倉 恵子

花祭りの舞・構成と意義 — 小林の花祭りを中心に—

中村 茂子

中国の身体表現 — 「戯曲」と舞踊—

細井 尚子

[聞き書き] 「一谷嫩軍記」のことなど — 中村又五郎氏に聞く—

羽田 昶・鎌倉 恵子

3) 保存科学

所属研究員による文化財の保存と修復に関する科学的調査、研究、受託研究報告等の論文報告および修復処置概報等を掲載している。

『保存科学』第37号

高德院国宝銅像阿弥陀如来像の気象調査 —主に風況について—

三浦 定俊・青木 繁夫・川野邊 渉・中村 修・宮下 康一

温度を利用した殺虫法(1) —低温処理および高温処理による殺虫効果の検討—

木川 りか・永山 あい・山野 勝次

脱酸素剤の文化財顔料等に及ぼす影響

木川 りか・宮沢 淑子・朽津 信明・佐野 千絵・山野 勝次・三浦 定俊

伝統的焼付漆技法の研究 —漆の焼き付け(高温硬化)に関する研究(1)—

木下 稔夫・上野 博志・中里 壽克・宮田 聖子

伝統的焼付漆技法の研究 —文献に見る焼付漆及びその研究の歴史—

中里 壽克

タイ国石造遺跡における使用石材とその劣化に関する調査報告

朽津 信明

史跡薬師堂石仏の保存環境

三浦 定俊

装潢技術における酵素利用の可能性について

竹上 幸宏・君嶋 隆幸・岡 岩太郎・木川 りか・川野邊 渉

藩札料紙について

増田 勝彦・大川 昭典・稲葉 政満

文化財建造物の修復に用いられた合成樹脂の変遷

竹之内 裕・川野邊 渉

屋外に用いられた人工木材の劣化状況と新規人工木材の提案

竹之内 裕・川野邊 渉

各種の蛍光 X 線分析装置による文化財試料の分析

早川 泰弘・平尾 良光

ラインセンサを用いた可視光・赤外線デジタル撮影システム

川野邊 渉

展示公開施設の館内環境調査報告 —平成8年度—

佐野 千絵・三浦 定俊

アジア諸国における文化財保存の現状 —アンケート調査の結果と考察(2)—

二神 葉子・西浦 忠輝

平成9年度 修復処置概報

修復技術部

4) 日本美術年鑑

日本美術年鑑は各年の美術活動と美術研究・批評の状況を記録する刊行物である。美術部では、当研究所の前身である帝国美術院附属美術研究所が1936(昭和11)年から始めた『日本美術年鑑』の編集を引き継ぎ、刊行を継続してきた。60年を越す記録の蓄積は日本近代美術史研究の基礎をなすものとして認められており、1996(平成8)年には1936(昭和11)年版から1946(昭和21)年版までの復刻版が刊行されるなど、需要も高まっている。

1997(平成9)年版の内容は以下の通りである。

『日本美術年鑑』1997(平成9)年度版

平成8年美術界年史美術展覧会(現代美術・西洋美術)

美術展覧会(東洋古美術)

美術文献目録(定期刊行物所載)(現代美術・西洋美術)

美術文献目録(定期刊行物所載)(東洋古美術)

物故者

(2) シンポジウム等の報告書

1) 国際研究集会プロシーディングス

本書は毎年行われる「文化財保存に関する国際研究集会」の基調講演や発表をまとめた報告書である。

《*International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property — The Conservation of Dunhuang Mogao Grottoes and the Related Studies —*》

1996（平成8）年2月に行われた同タイトルの国際シンポジウムの発表内容をまとめた会議録で、敦煌莫高窟の壁画保存に関係した研究発表が収録されている。

主 題 敦煌莫高窟の保存

目 次

1. The History of Conservation of Mogao Grottoes DUAN Wenjie
2. Preservation through Cooperation at Dunhuang's Mogao Grottoes FAN Jinshi
3. An Overview for the Conservation of Mogao Grottoes: Aim and Procedure for the Symposium Tadateru NISHIURA
4. Environmental Changes in the Dunhuang Area in Past 2000yBP Masami FUKUDA
5. Climate of Dunhuang Area, China Hidenori TAKAHASHI and Sadatoshi MIURA
6. The Climate and Micro-Climates of Caves at the Mogao Grottoes Shin MAEKAWA, ZHANG Yongjun, WANG Baoyi, FU Wenli and XUE Ping
7. Analysis on the Micro-Environment of the Mogao Caves ZHANG Yongjun, WANG Baoyi, Sadatoshi MIURA
8. Evaporation and Salt Efflorescence of the Mural Paintings in the Mogao Grottoes Nobuaki KUCHITSU, WANG Xudong and DUAN Xiuye
9. The Procedures for the Environmental Protection of Decorated Caves: Application to the Combarelles Sites (Les Eyzies, France) Jacques BRUNET, Jean VOUBE and Philippe MALAURENT
10. Measures for Controlling Sand Migration and Erosion at the Mogao Grottoes Po-Ming LIN, Neville AGNEW, LING Yuquan, LI Zuixiong, LI Yunhe and WANG Wanfu
11. A Review of the Grotto Conservation Methods in China HUANG Kezhong
12. Geotechnical Issues in the Conservation Methods in China Robert E. ENGLEKIRK
13. Structural Stabilization of DaFoSi Grotto Gerd GUDEHUS and ZOU Yazhou
14. Some Further Studies on the Use of PS-F as a Grouting Mixture LI Zuixiong, ZHANG Huyuan and WANG Xudong
15. Test and Research of Traditional Material and Substitute Material for Mending-up of Leshan Grand Buddha MA Jiayu
16. Reinforcing Materials for Wall Paintings of Dunhuang Mogao Grottoes Katsuhiko MASUDA
17. Problems of Conservation of the Wall Paintings at Ajanta O.P. AGRAWAL
18. The Consolidation and the Restoration of Ancient Japanese Wall Paintings Masaaki SAWADA
19. Characteristics of Synthetic Resins Used for Restoration of Mural Paintings Eddy DEWITTE
- Overall Discussion

《International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property
— Kabuki: Changes and Prospects — 1996》

1996（平成8）年11月に行われた国際シンポジウム「歌舞伎：変遷と展望」の発表内容をまとめた報告書。以下の基調講演および研究発表が収録されている。

主 題 歌舞伎：変遷と展望

目 次

基調講演

西洋演劇界における歌舞伎公演の価値と実用性

ジェームス・ブランドン

歌舞伎海外公演が教えるもの

河 竹 登志夫

第1セッション

ドイツ、オーストリア、スイスにおける川上音二郎と貞奴

ベーター・バンツァー

“日本劇”としての『修禅寺物語』 —フィルマン・ジェミエによる1927年のパリ上演をめぐって—

中 村 哲 郎

歌舞伎のヨーロッパ演劇への影響

サンキョン・リ

第2セッション

在欧初期歌舞伎資料の重要性

トーマス・ライムス

歌舞伎曲のパロディーによるカー『矢の根』の象徴的な遊び—

ローレンス・コミンズ

歌舞伎と文楽 —近松の『双生隅田川』—

アンドリュウ・ガーストル

元禄歌舞伎に登場する動物

鎌 倉 恵 子

第3セッション

近代歌舞伎の「西洋」受容

大 笹 吉 雄

近代化における歌舞伎の変容

神 山 彰

1930年代の歌舞伎 —多様化の10年—

ブライアン・パウエル

明治初期の歌舞伎と西洋演劇 —失敗した出会い—

ジャン・ジャック・チュディン

歌舞伎俳優研修修了生・研修生の現状と将来

中 村 茂 子

第4セッション

批評の機能

羽 田 昶

歌舞伎興行 —芸術と商業主義—

アンネグレット・ベルクマン

現代歌舞伎の演目の傾向と課題

服 部 幸 雄

芸の伝承

渡 辺 保

討 論

2) アジア文化財保存修復研究会報告書

アジア文化財保存修復研究会において、日本の機関が行った文化財保存修復国際協力事業に関する事例報告、質疑応答、および総合討議の内容をまとめたものである。

第1回、第2回研究会についてそれぞれ作成されている。

第1回アジア文化財保存修復研究会報告書

目次

プログラム

イラン、チョガ・ザンビール遺跡の保存修復の現状と問題	国士舘大学	岡田保良
Chogha-zambil 遺跡日干しレンガの土質特性	埼玉大学	渡辺邦夫
ミャンマー・パガン遺跡の保存・修復・整備の現状と問題	東京大学	鈴木伸治
ガンダーラ仏教遺跡の保存・修復・整備の現状と問題点	奈良女子大学	増井正哉
ラニガト遺跡における新しいキャッピング法の開発と実験施工	国際文化財保存修復協力センター	西浦忠輝
モエンジョ=ダロ都市遺跡の保存・修復・整備の現状と問題	立教大学	小西正捷

総合討議

出席者名簿

第2回アジア文化財保存修復研究会報告書

目次

プログラム

ネパール仏教僧院イ・バハ・バヒの保存修復とその問題点	日本工業大学	渡辺勝彦
ベトナム・ホイアンの町並み保存への協力	昭和女子大学	友田博通
	日本建築セミナー	増田千次郎
シリア・アインダーラ神殿遺跡の保存修復とその問題点	国際文化財保存修復協力センター	西浦忠輝
インドネシア・トラジャの伝統的の家屋解体修理工事の概要と今後の問題点について	(財)文化財建造物保存技術協会	岡信治

総合討議

総合討議資料

イコモス専門分科会 ISCARSAH の活動について(報告)	筑波大学	日高健一郎
中国・黄山市・屯溪老街地域の実態調査および保存再生計画の立案について	京都芸術短期大学	大西國太郎

第2回アジア文化財保存修復研究会アンケート調査集計結果報告

出席者名簿

(3) その他

1) 国際文化財保存修復協力センターニュースレター

国際文化財保存修復センターは、センターの現在における状況を理解してもらうとともに、今後のセンター構想を提案していくためにニュースレターを発行している。

第1号

発刊の辞

渡邊 明 義
宮本 長二郎

第11回イコモス総会・国際シンポジウム報告

西浦 忠 輝

第6回アジア文化財保存セミナー

松本 修 自

韓国国立文化財研究所の紹介

韓国国立文化財研究所 兪 在 恩

第2号

イクロム理事会小景

三浦 定 俊

敦煌壁画修復調査記

青木 繁 夫

在外日本古美術品修復事業 ―世界に広がる日本の修復技術―

尾立 和 則

第7回アジア文化財保存セミナーのお知らせ

「アジア地域の世界文化遺産 ―その持続的発展と保存」

松本 修 自

中国社会科学院の紹介

中国社会科学院 金 正 耀

第3号

アジア文化財保存セミナーを終わって

「アジア地域の世界文化遺産 ―その持続的発展と保存」

渡邊 明 義

第7回アジア文化財保存セミナー

「アジア地域の世界文化遺産 ―その持続的発展と保存」

松本 修 自

第7回アジア文化財保存セミナー

「アジア地域の世界文化遺産 ―その持続的発展と保存」

国際（アジア）文化財保存修復研究会について

西浦 忠 輝

(4) 研究成果等の出版物

1) 東京国立文化財研究所所蔵 X線フィルム目録Ⅰ —考古資料編—

修復技術部は文化財に関する X線フィルムを多数保管している。現在、これらの X線フィルムを公開し、学術資料としての活用には便宜を図るため、データをデジタル化し、整理する作業を進めている。本書はその作業の一環として、考古資料を撮影した X線フィルム約 2,200 枚をデジタル化して、X線フィルム目録として刊行したものである。今後、分野別に逐次目録を刊行する予定である。

目次

所蔵 X線フィルム目録の刊行にあたって
凡例
記載の要領
目次
図版
都道府県別索引
資料名別索引
所蔵者別索引

2) 上野忍岡遺跡群東京国立文化財研究所新営予定地地点発掘調査報告書

本書は当研究所の庁舎新営にともなう事前発掘調査の報告書であり、東京国立博物館や東京芸術大学など、周辺の一連の調査に関連させ、上野忍岡遺跡群の名称のもとに刊行された。調査区は東京国立博物館平成館の北東背後 2,800 m²、古墳時代の堅穴住居址 36 基のほか、近世寛永寺創立以前の井戸や区画施設、寛永寺子院関連の地下室や道路などを検出、また遺物は土器など多数を採取したことを報告した。

目次

序
目次
例言
調査組織
調査経緯・経過
遺跡の位置と環境
古代
中近世
遺物
写真図版
報告書抄録

8. 公開・出品

(1) 公開

1) 黒田記念室

黒田記念室は本研究所の前身である帝国美術院付属美術研究所の創立者帝国美術院長子爵故黒田清輝の功績を記念するために設けられた陳列室であり、黒田清輝の油絵・素描・写生帖等を収蔵している。

創立当時、主として黒田家から寄贈されたものは、油絵 125 点、素描 170 点、写生帖等であるが、その後黒田照子夫人、樺山愛輔、田中良氏等からの寄贈が加わった。収蔵品の主なるものは、「智・感・情」・「花野」・「湖畔」・「赤髪の少女」・「もるる日影」・「温室花壇」などである。

また黒田記念室の公開は下記の通りである。

一般公開 毎週木曜

午後 1 時～4 時

特別公開 1997 年 10 月 13 日～10 月 19 日（上野の山文化ゾーンフェスティバル）

年間入館者数 1,204 名（1997 年末実績）

2) 資料閲覧室

当研究所所蔵の資料のなかで、情報資料部が管理するものについては、大学院生、文化財研究者を対象に閲覧に供している。閲覧は、原則として祝日・年末年始（12/25-1/7）を除く、毎週月・水・金曜日（am. 10:00-pm. 4:30）に、情報資料部において行われている。

〈図書資料〉

図書資料は、和漢書・洋書のほか、展覧会カタログ・定期刊行物が、情報資料部に保管されている。

図書検索は現在、カードによっているが、データベースによる検索を準備中である。展覧会カタログは開催年別に分けて配架され、定期刊行物は巻号目録で検索できる。

また定期刊行物所載の研究文献については、研究所で編集した『東洋古美術文献目録』・『日本東洋古美術文献目録』・『日本美術年鑑』で検索できる。

従来、開架資料として閲覧に供していた明治大正期の美術雑誌は、過度な閲覧集中にともなう劣化が進んでいる。情報資料部では資料の希少性と原本保存の必要を考慮して、現在、原本のかわりにマイクロフィルムによる閲覧を行っている。

閲覧可能なマイクロフィルム

アトリエ、生活美術、みづゑ、新美術、美術（みづゑの続刊）、中央美術、日本美術、美術評論、美術（美術新論の続刊）、美之国、美術（美之国の続刊）

〈写真資料〉

写真資料は、モノクロの焼き付け写真（四切り）が分類・配架され、自由に閲覧できるようになっている。仏像、仏画は尊種別に、絵巻・肖像画は主題別に、室町時代以降の絵画で作者のわかるものについては作者別に、不明なものは主題別に、書跡も作者別と主題別とを交えて分類されている。これらをキーに写真を参照しながら検索することができる。

そのほか、希望者に対しては、売立目録図版（作者別分類）や探幽縮図、常信縮図などのキャビネットを公開している。

(2) 黒田清輝巡回展

黒田清輝の遺作を多く所蔵している当研究所は、黒田清輝の功績を記念し、あわせて地方文化の振興に資するために、1977（昭和52）年からの事業として黒田清輝巡回展を年1回地方において開催してきた。

1997（平成9）年度は次の会場において開催された。

会 場 佐野美術館
会 期 1997年10月25日(土)～12月8日(月)
主 催 東京国立文化財研究所
佐野美術館
三島市
三島市教育委員会
静岡新聞社
静岡放送
後 援 静岡県教育委員会
助 成 増進会出版社
開館日数 39日間
入場者数 21,366名
陳列点数 油彩・パステル 61点
木炭デッサン 50点
写生帖 17冊
書簡 3点
日記 5冊
参考資料若干 (6点)
図 録 A4版変型、151頁、原色図版62頁、単色図版77頁

(3) 所蔵作品等の貸与

本年度の所蔵作品等の貸与は下記の通り4件8点であった。

「フォンタネージと日本の近代美術」展（平成9.10.23～12.14 東京都庭園美術館）

「石膏像17」 黒田清輝作 木炭

「裸婦習作27」 黒田清輝作 木炭

「編物する女」 黒田清輝作 木炭

「近代日本美術の名品 日本洋画の履歴」展（平成10.3.28～5.10 高知県立美術館）

「編物」 黒田清輝作 油彩

「中川八郎とその時代」展（平成10.2.21～3.22 愛媛県立美術館）

「十條村」 黒田清輝作 鉛筆

「農家と井戸」 黒田清輝作 鉛筆

「橋のある風景」 満谷国四郎作 鉛筆

「近代のやまと絵 一古典美の再発見一」展（平成10.3.3～10.3.29 岐阜県美術館）

「前賢故実」 菊池容斎作 版本 全10巻

(4) 展覧会への協力

当研究所が行った展覧会への協力は下記の通りである。

期 間	展 覧 会 名	会 場
97. 4. 16～ 6. 22	エドアルド・キヨッソーネ没後 100 年展	お札と切手の博物館
97. 5. 16～ 6. 8	奥田元宋展	広島県立美術館
97. 7. 19～ 8. 24	原撫松展	神奈川県立近代美術館（岡山県立美術館、郡山市立美術館）
97. 8. 30～10. 5	ジョン・ラスキンと近代日本展	神奈川県立近代美術館（郡山市立美術館）
97. 9. 9～ 9. 21	東京芸術大学所蔵名品展	三越ギャラリー・日本橋（大丸・心齋橋店、松坂屋美術館、大丸ミュージアム KYOTO）
97. 9. 20～12. 7	近代日本の陶磁	宮内庁三の丸尚蔵館
97. 10. 8～11. 24	小杉放菴展	小杉放菴記念日光美術館
97. 10. 10～11. 9	熊谷守一展	足利市立美術館（天童市美術館、浜松市美術館、飯田市美術博物館）
97. 10. 22～11. 24	福田平八郎と六潮会展	大分県立芸術会館
97. 10. 23～12. 14	フォンタネージと日本の近代美術	東京都庭園美術館
97. 11. 1～12. 14	「大正の美と心 中村麟」展	新潟県立近代美術館
97. 10. 1～98. 1. 11	15 人のコレクターたち	ブリヂストン美術館
97. 11. 22～98. 1. 18	描かれた東海道五十三次 浮世絵・広重から、新発見油絵東海道まで	郡山市立美術館
98. 1. 31～ 2. 15	徳川慶喜展	三越美術館・新宿（京都高島屋グランドホール、三越ギャラリー・福岡、茨城県立歴史館、静岡アートギャラリー）
98. 2. 21～ 3. 22	中川八郎とその時代展	愛媛県立美術館
98. 2. 21～ 3. 29	吉澤儀造 幻の画家展	小杉放菴記念日光美術館
98. 3. 3～ 3. 29	近代の大和絵 古典美の再発見	岐阜県美術館
98. 3. 22～ 4. 26	菅木志雄	神奈川県民ホールギャラリー（広島市現代美術館、伊丹市立美術館、千葉市美術館）
98. 3. 24～ 5. 10	近代日本美術の軌跡	東京国立博物館
98. 3. 28～ 5. 10	名作でたどる近代日本洋画の歩み展	高知県立美術館

9. 年度内主要事業一覧

期 日	事 業 名
1995. 9. 6～1997. 6. 25	能楽技法講座
1997. 5. 12～1998. 2. 23	海外学術調査員及び研究者のための保存修復講座
1997. 7. 7～ 7. 10	芸能部夏期学術講座
1997. 7. 14～ 7. 25	博物館・美術館等の保存担当学芸員研修
1997. 9. 7～ 9. 12	博物館学実習
1997. 9. 19	文化財保存修復研究協議会
1997. 10. 13～10. 18	アジア文化財保存セミナー
1997. 10. 13～10. 19	黒田記念室特別公開
1997. 10. 22	美術部・情報資料部公開学術講座
1997. 10. 22	第2回アジア文化財保存修復研究会
1997. 10. 25～10. 8	黒田清輝巡回展
1997. 10. 29	芸能部公開学術講座
1997. 11. 20～12. 11	「紙の保存修復」国際研修
1997. 12. 3～12. 5	第21回文化財の保存に関する国際研究集会
1998. 3. 3	第3回国際文化財保存修復研究会

5. 研究交流

1. 職員の海外渡航

氏名	渡航先	期間	目的
青木 繁夫	中国	97. 6. 16～97. 7. 14	中国砂漠地帯における文化財の保存対策に関する共同研究
青木 繁夫	ドイツ	97. 10. 21～97. 10. 27	ICOMOS 金属修復会議出席および発表
青木 繁夫	中国	98. 2. 24～98. 2. 27	第3期敦煌文化財保存修復協力事業に関する調査および協議
青木 繁夫	英国・ドイツ	98. 3. 22～98. 3. 29	「近代文化遺産」の保存修復調査
飯田 猛継	タイ	97. 12. 16～97. 12. 20	日・タイ共同研究に関する関係機関との協議等
石崎 武志	タイ	97. 9. 23～97. 10. 1	遺跡保存修復調査・研究および協議
石崎 武志	タイ	97. 12. 8～97. 12. 20	遺跡保存修復調査・研究・協議
石崎 武志	ドイツ・フランス	98. 2. 15～98. 2. 23	文化財の新しい調査手法の調査・研究
石崎 武志	タイ	98. 3. 8～98. 3. 14	遺跡保存修復調査・研究・協議
石崎 武志	パキスタン	98. 3. 20～98. 3. 29	遺跡の保存修復に関する調査と協議
井手誠之輔	台湾	97. 5. 16～97. 5. 20	故宮博物院の中国絵画展見学
岡田 健	中国	97. 12. 12～97. 12. 17	中国美術の調査・研究
尾立 和明	ドイツ・英国	97. 6. 22～97. 7. 3	「在外日本古美術品保存修復協力事業」平成9年度事前調査
勝木 言一郎	英国ほか	96. 12. 2～97. 10. 1	文部省在外研究員
勝木 言一郎	中国	98. 3. 19～98. 3. 30	泉州地区における宗教美術の調査研究
加藤 寛 (兼任)	フランス・米国 ほか	98. 1. 18～98. 1. 29	在外日本古美術品保存修復協力事業に関する平成9年度事前調査
鎌倉 恵子	中国	98. 3. 26～98. 3. 30	泉州およびその周辺の芸能調査
蒲生 郷昭	中国	97. 10. 20～97. 10. 24	会議出席 第2回中日音楽比較研究国際学術検討会への参加
蒲生 郷昭	ベトナム	98. 2. 8～98. 2. 16	第10回国際民俗芸能フェスティバルの海外招聘芸能の現地調査
川野邊 渉	英国・ドイツ	98. 3. 22～98. 3. 29	「近代文化遺産」の保存修復調査
川野邊 渉	中国	97. 7. 7～97. 7. 14	中国砂漠地帯における文化財の保存対策に関する共同研究
朽津 信明	中国	97. 7. 7～97. 7. 14	中国砂漠地帯における文化財の保存対策に関する共同研究
朽津 信明	タイ	97. 9. 27～97. 10. 1	遺跡保存修復調査・研究および協議
朽津 信明	タイ	97. 12. 14～97. 12. 20	遺跡保存修復調査・研究・協議
朽津 信明	タイ	98. 3. 8～98. 3. 11	遺跡保存修復調査・研究・協議
朽津 信明	パキスタン	98. 3. 20～98. 3. 24	遺跡の保存修復に関する調査と協議
佐野 千絵	米国	97. 6. 21～97. 6. 28	GRC 研究会議の出席および研究状況の検討
佐野 千絵	フランス	97. 7. 30～97. 8. 15	フランス北東部における文化財の保存状況の調査
佐野 千絵	ベトナム	97. 9. 21～97. 9. 28	漆植栽地区の調査と漆工品研究
佐野 千絵	韓国	97. 11. 3～97. 11. 6	京畿道博物館環境調査および博物館環境に関する研究成果の交流

氏名	渡航先	期間	目的
島尾 新	米 国	98. 3. 10～98. 3. 22	海外所在日本文化財の調査
鈴木 廣之	米 国	97. 9. 1～97. 12. 2	コロンビア大学美術史考古学部客員教授としての講義および演習
鶴田 武良	中 国	97. 4. 17～97. 4. 30	近現代中国絵画の研究
鶴田 武良	台 湾	97. 7. 19～97. 7. 23	故 宮
鶴田 武良	中 国	97. 8. 15～97. 8. 26	日中文字文化シンポジウム出席ならびに瀋陽故宮博物院、近代中国絵画資料の調査
鶴田 武良	中 国	98. 3. 3～98. 3. 5	丘堤・箴古展の調査
長岡 龍作	台 湾	97. 7. 19～97. 7. 23	台北故宮博物院宗教彫塑展観覧
中島 健次	中 国	97. 6. 16～97. 6. 24	中国砂漠地帯における文化財の保存対策に関する共同研究
中島 健次	タ イ	97. 12. 16～97. 12. 20	日・タイ共同研究に関する関係機関との協議等
中島 健次	米 国	98. 1. 11～98. 1. 22	在外日本古美術保存修復協力事業にかかる事業対象美術館との打ち合わせ
中島 健次	中 国	98. 2. 24～98. 2. 28	第3期敦煌文化財保存修復協力事業に関する調査および協議
中野 照男	英 国	97. 9. 4～97. 9. 12	国際会議「日欧美術におけるマスターピース」への出席と研究発表、イースト・アングリア大学での調査
中野 照男	米 国	98. 3. 10～98. 3. 22	海外所在日本文化財の調査
西浦 忠輝	パキスタン	97. 4. 14～97. 4. 24	遺跡保存修復に関する調査と協議
西浦 忠輝	シリア	97. 5. 16～97. 6. 1	アイン・ダーラ神殿遺跡の保存修復に関する調査・研究・指導
西浦 忠輝	タイ・パキスタン	97. 9. 23～97. 10. 6	遺跡保存修復調査・研究・協議および指導
西浦 忠輝	シリア	97. 10. 27～97. 11. 5	アイン・ダーラ神殿遺跡の保存修復に関する調査・研究・指導
西浦 忠輝	タ イ	97. 12. 8～97. 12. 20	遺跡保存修復調査・研究・協議
西浦 忠輝	タ イ	98. 3. 8～98. 3. 14	遺跡保存修復調査・研究・協議
西浦 忠輝	パキスタン	98. 3. 20～98. 3. 29	遺跡の保存修復に関する調査と協議
長谷川洋一	中 国	97. 7. 7～97. 7. 14	敦煌文化財保存修復協力事業に関する協議
早川 泰弘	中 国	97. 10. 21～97. 10. 30	中国古代青銅器の調査
早川 泰弘	ドイツ・フランス	98. 2. 15～98. 2. 23	文化財の新しい調査手法の調査・研究
平尾 良光	トルコ	97. 8. 29～97. 9. 10	カマンカレホユック遺跡出土品の調査
平尾 良光	中 国	97. 10. 21～97. 10. 30	中国古代青銅器の調査
平尾 良光	中 国	98. 3. 11～98. 3. 17	古代中国青銅器の調査
増田 勝彦	中 国	97. 6. 16～97. 7. 14	中国砂漠地帯における文化財の保存対策に関する共同研究
増田 勝彦	オーストラリア	97. 8. 30～97. 9. 7	オーストラリア文化財保存学会大会出席、講演
増田 勝彦	米 国	98. 1. 11～98. 1. 22	在外日本古美術品保存修復協力事業のための調査
増田 勝彦	中 国	98. 2. 24～98. 2. 27	第3期敦煌文化財保存修復協力事業に関する調査および協議
松下 冬樹	ドイツ・英国	97. 6. 22～97. 7. 3	在外日本古美術品保存修復協力事業に関する事前調査および協議
松下 冬樹	フランス・米国 ほか	98. 1. 18～98. 1. 29	在外日本古美術品保存修復協力事業にかかる事業対象美術館との打ち合わせ
松本 修自	ドイツ	97. 6. 4～97. 6. 21	国際共同研究の現地調査
松本 修自	タ イ	97. 12. 16～97. 12. 20	遺跡保存修復調査・研究・協議

氏名	渡航先	期間	目的
三浦 定俊	台湾	97. 4. 25～97. 5. 1	台湾における文化財の保存状況調査
三浦 定俊	イタリア	97. 6. 11～97. 6. 15	イクロム財政事業計画委員会および FPC・AAB 合同委員会への出席
三浦 定俊	ドイツ	97. 6. 30～97. 7. 10	漆工品の調査と研究協議
三浦 定俊	カナダ	97. 9. 8～97. 9. 18	モントリオール議定書第 9 回締約国会議および第 16 回作業部会会議への出席
三浦 定俊	イタリア	97. 12. 6～97. 12. 14	イクロム財政事業計画委員会、FPC・AAB 合同委員会、理事会および総会への出席
宮本長二郎	中国	97. 8. 19～97. 8. 22	世界民族建築国際会議への参加
宮本長二郎	タイ	97. 9. 23～97. 10. 1	遺跡保存修復調査・研究および協議
宮本長二郎	タイ	97. 12. 14～97. 12. 20	遺跡保存修復調査・研究・協議
山梨絵美子	米国	98. 3. 10～98. 3. 20	海外所在日本文化財の調査
與那原 進	中国	98. 2. 24～98. 2. 28	第 3 期敦煌文化財保存修復協力事業に関する協議

2. 招へい研究員等

(1) 海 外

今年度における海外からの招へいは下記の通りである。

招へい期間	氏 名	国 籍	所 属	招 へ い 理 由
97. 6. 1～ 8. 29	金正耀	中 国	中国社会科学院世界宗教研究所助教授	古代東アジアにおける青銅器の変遷に関する考古学的・自然科学的研究
97. 6. 5～ 6. 13	ポリリー・ウィルマン	米 国	スミソニアン機構アメリカ歴史博物館主任コンサーバター	米国スミソニアン研究機構との国際研究交流にかかる研究協議と調査
97. 6. 16～ 8. 15	デイ・ネグリ・ジャスミーナ	イ タ リ ア	ベニス東洋美術館修復専門家	漆芸品修復技術の研修
97. 8. 20～ 8. 29	楊錫璋	中 国	中国社会科学院考古研究所安陽工作站站长	古代東アジアにおける青銅器の変遷に関する考古学的・自然科学的研究
97. 9. 16～ 9. 17	リチャード・エンゲルハルト	ベルギー	ユネスコ・アジア太平洋地域事務所地域アドバイザー	アジア地域の世界文化遺産の保存と活用に関する研究協議
97. 10. 4～10. 17	フォルケ・ケスリンク	ド イ ツ	ベルリン交通と技術博物館科学室長	近代の文化財の保存対策と修復技術（日独）
97. 10. 5～10. 9	馬文治	中 国	甘肅省文化庁副庁長・甘肅省文物局長	敦煌莫高窟の保存修復に関する共同研究の協議
97. 10. 5～10. 9	樊錦詩	中 国	敦煌研究院副院長	敦煌莫高窟の保存修復に関する共同研究の協議
97. 10. 5～10. 9	李 実	中 国	敦煌研究院保護研究所副所長	敦煌莫高窟の保存修復に関する共同研究の協議
97. 10. 5～10. 15	王耀華	中 国	福建師範大学副学長・教授	日中の三弦（三味線）に関する研究
97. 10. 11～10. 19	リチャード・エンゲルハルト	ベルギー	ユネスコ・アジア太平洋地域事務所地域アドバイザー	第7回アジア文化財保存セミナーへの出席
97. 10. 11～10. 19	イーサン・ナディーム	パキスタン	文化スポーツ観光青年省考古・博物館局北部考古地域所長	第7回アジア文化財保存セミナーへの出席
97. 10. 11～10. 20	スルヤ・バクタ・サンガクヘ	ネバール	カトマンズ谷地区都市計画官	第7回アジア文化財保存セミナーへの出席
97. 10. 11～10. 20	セナカ・バンダラナイケ	スリランカ	考古学大学院学長	第7回アジア文化財保存セミナーへの出席
97. 10. 11～10. 21	ソーナンサ・カンラヤ	ラ オ ス	情報文化省博物館考古局歴史的建造物保存部門副主任	第7回アジア文化財保存セミナーへの出席
97. 10. 11～10. 21	アミタ・ベイ	イ ン ド	インド芸術文化財財団 INTAC プロジェクト担当所長	第7回アジア文化財保存セミナーへの出席
97. 10. 12～10. 19	董 衛	中 国	東南大学助教授	第7回アジア文化財保存セミナーへの出席
97. 10. 12～10. 19	金榮勲	韓 国	国立文化財研究所研究員	第7回アジア文化財保存セミナーへの出席
97. 10. 12～10. 19	プラテープ・ベントコ	タ イ	アユタヤ歴史的都市プロジェクト事務所研究員・考古担当	第7回アジア文化財保存セミナーへの出席

招へい期間	氏名	国籍	所属	招へい理由
97. 10. 12～10. 19	トルオン・クオック・ビン	ベトナム	文化情報省保存・博物館部ユネスコ・フェワーキンググループ常勤書記官	第7回アジア文化財保存セミナーへの出席
97. 10. 13～10. 19	サージ・ドミチェリ	オーストラリア	ドミチェリ・コンサルタンツ社長	第7回アジア文化財保存セミナーへの出席
97. 11. 4～11. 13	孫新	中国	社会科学院外事局長助理	古代東アジアにおける青銅器の変遷に関する考古学的・自然科学的研究
97. 11. 17～11. 26	ステイーブン・オウヤン	米国	セントルイス美術館学芸員	アメリカ中西部のアジア美術コレクションに関する共同研究
97. 11. 17～11. 26	ジークフリート・エンデルス	ドイツ	ヘッセン州文化財保護局調査官	建造物保存修復の理念及び方法に関する研究にかかる現地調査
97. 11. 17～11. 26	ハインツ・ヴィオンスキ	ドイツ	ヘッセン州文化財保護局調査官	建造物保存修復の理念及び方法に関する研究にかかる現地調査
97. 11. 17～11. 26	ウード・パウマン	ドイツ	ヘッセン州文化財保護局調査官	建造物保存修復の理念及び方法に関する研究にかかる現地調査
97. 11. 17～11. 26	ゲルト・カスター	ドイツ	シュレスヴィク・ホルスタイン州文化財保護局調査官	建造物保存修復の理念及び方法に関する研究にかかる現地調査
97. 11. 18～11. 22	マリザ・ラウレンツィ・タバツ	イタリア	ICCROM 事務局長補佐	「紙の保存修復」国際研修開講式への参加および共同事業協議
97. 11. 22～12. 2	マルチヌス・ヴァン・ゲニヒテン	米国	農務省塩類研究所部長	多孔質体中の水分塩分移動に関する研究の打ち合わせ
97. 11. 24～12. 5	ベルンハルト・ドール	ドイツ	科学技術省人文科学研究部長	保存修復事例の比較研究
97. 11. 24～12. 5	ウータ・ホーン	ドイツ	ゲルハルト・メルカトール大学化学地理学部教授	町並み保存事例の比較研究と資料調査
97. 11. 26～12. 8	ステファン・タナカ	米国	カリフォルニア大学サンディエゴ校準教授	第21回文化財の保存に関する国際研究集会への参加
97. 11. 27～12. 6	姜大一	韓国	国立文化財研究所研究員	文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究
97. 11. 27～12. 6	黄振周	韓国	国立文化財研究所研究員	文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究
97. 11. 29～12. 15	ショシュア・S・モストウ	カナダ	ブリティッシュ・コロンビア大学アジアセンター助教授	日本文化史における「雅」の系譜の研究ならびに第21回文化財の保存に関する国際研究集会への参加
97. 11. 29～12. 21	スタンリー・ケンジ・アベ	米国	デューク大学助教授	第21回文化財の保存に関する国際研究集会への参加
97. 11. 30～12. 7	洪善杓	韓国	(財)星岡文化財団韓国美術研究所長	第21回文化財の保存に関する国際研究集会への参加
97. 11. 30～12. 7	鄭于澤	韓国	慶州大学校教授	日本所在高麗・李朝初期仏教絵画資料の共有化に関する研究および第21回文化財の保存に関する国際研究集会への参加
97. 12. 1～12. 29	タイモン・スクリーチ	英国	ロンドン大学極東アフリカ学院助教授	第21回文化財の保存に関する国際研究集会への参加
97. 12. 5～12. 12	ジュリア・M・ホワイト	米国	ホノルル美術館学芸員	第21回文化財の保存に関する国際研究集会への参加
97. 12. 7～12. 20	ミシェル・リュッケン	フランス	国際交流基金パリ事務所専任職員	大正・昭和初期の日本洋画資料の共有化に関する研究
98. 1. 12～3. 12	郭宏	中国	敦煌研究院助理研究員	敦煌文化財の保存修復に関する日中共同研究

招へい期間	氏名	国籍	所属	招へい理由
98. 1. 12～ 3. 12	劉剛	中国	敦煌研究院助理研究員	敦煌文化財の保存修復に関する日中共同研究
98. 2. 17～ 2. 21	ルーカス・クレマー	ドイツ	ケルン東洋美術館学芸員	在外日本古美術品修復事業に関する作品搬入
98. 2. 21～ 3. 6	イリット・アベルブフ	イスラエル	テルアビブ大学東アジア学部講師	山伏神楽伝承の地域環境に関する調査研究
98. 2. 22～ 2. 28	コルネリウス・ゲッツ	ドイツ	ドイツ修復家協会会長	近代の文化遺産保存に関する研究交流
98. 2. 22～ 3. 1	スッチャイ・パンスワン	タイ	芸術総局・考古博物館局保存担当主任	日タイ共同研究に関わる調査研究
98. 2. 22～ 3. 2	チラポーン・アラニャナク	タイ	芸術総局・考古博物館局保存科学部部長	日タイ共同研究に関わる調査研究
98. 2. 22～ 3. 2	アロンコーン・サンニコーン	タイ	芸術総局・考古博物館局保存担当主任	日タイ共同研究に関わる調査研究
98. 2. 22～ 3. 2	マナッチャーヤ・ワウイソート	タイ	芸術総局・考古博物館局保存担当専門員	日タイ共同研究に関わる調査研究
98. 2. 25～ 3. 7	前川 信	日本	ゲティ保存研究所主任研究員	文化財の保存環境ならびに生物劣化とその対策に関する研究
98. 3. 8～ 3. 15	アドルフ・ホフマン	ドイツ	コッتبス工科大学建築学科教授	遺跡建造物保存修復の比較研究
98. 3. 8～ 3. 19	マノリス・コレース	ギリシア	文化省アクロポリス文化財保護委員会監督官	遺跡建造物保存修復の比較研究
98. 3. 9～ 3. 31	外村 中	日本	ヴェルツブルグ大学中国学研究所専任講師	中国南北朝期の文化と都市造営の関係に関する調査研究
98. 3. 10～ 3. 14	コルネリア・ホフマン	ドイツ	建築修復家	建造物保存修復の比較研究
98. 3. 16～ 3. 29	上田 二郎	日本	スミソニアン機構フリーア美術館研究員	日本絵画の修復に関する研究協議
98. 3. 18～ 3. 30	ミヒャエル・キューレンタール	ドイツ	バイエルン州立文化財研究所部長	漆工品の保存に関する研究調査
98. 3. 18～ 3. 30	カタリーナ・ヴァルヒ	ドイツ	バイエルン州立文化財研究所研究員	漆工品の保存に関する研究調査
98. 3. 18～ 3. 30	フリーデライク・パーバラ・ピエット・ボルガー	ドイツ	バイエルン州立文化財研究所	漆工品の保存に関する研究調査
98. 3. 19～ 3. 31	朴銀脚	韓国	東亜大学校助教授	日本所在李朝時代仏教絵画資料の共有化に関する研究
98. 3. 22～ 3. 31	李雲鶴	中国	敦煌研究院保護研究所副所長	敦煌文化財の保存修復に関する日中共同研究にかかる研究交流および協議
98. 3. 22～ 3. 31	孫毅華	中国	敦煌研究院保護研究所研究員	敦煌文化財の保存修復に関する日中共同研究にかかる研究交流および協議
98. 3. 22～ 3. 31	康文龍	中国	敦煌研究院弁公室主任	敦煌文化財の保存修復に関する日中共同研究にかかる研究交流および協議
98. 3. 22～ 3. 31	賀小萍	中国	敦煌研究院通訳	敦煌文化財の保存修復に関する日中共同研究にかかる研究交流および協議
98. 3. 22～ 3. 31	張立勝	中国	甘肅省文物局科技処長	敦煌文化財の保存修復に関する日中共同研究にかかる研究交流および協議
98. 3. 22～ 3. 31	ジョン・ウィンター	米国	スミソニアン機構フリーア美術館主任研究員	東洋絵画の修復に関する研究協議

(2) 国 内

今年度における国内からの招へいは下記の通りである。

期 間	氏 名	所 属	理 由
97. 4. 4～ 4. 5	千葉 光一	名古屋大学工学部助教授	ICP-MS による考古遺物中極微量元素の定量に関する研究
97. 4. 21	湯山 賢一	京都国立博物館学芸課長	在外日本美術品保存修復指導委員会への出席
97. 5. 18～ 5. 19	千葉 光一	名古屋大学工学部助教授	ICP-MS による考古遺物中極微量元素の定量に関する研究
97. 5. 21～ 5. 23	井上三千子	舞踊家	京舞の実演・録画
97. 5. 23～ 5. 24	谷村 博美	個人修復家	「無公害な文化財生物劣化防除法の研究」研究打ち合わせ
97. 5. 27	湯山 賢一	京都国立博物館学芸課長	在外日本美術品保存修復指導委員会への出席
97. 5. 30	青木 睦	国文学研究資料館史料館第三史料室助手	「無公害な文化財生物劣化防除法の研究」研究会への出席
97. 5. 30	神庭 信幸	国立歴史民俗博物館情報資料研究部助教授	「無公害な文化財生物劣化防除法の研究」研究会への出席
97. 5. 30～ 5. 31	宇治谷 恵	国立民族学博物館情報管理施設情報企画課標本資料係長	「無公害な文化財生物劣化防除法の研究」研究会への出席
97. 5. 30～ 5. 31	成瀬 正和	宮内庁正倉院事務所室長	「無公害な文化財生物劣化防除法の研究」研究会への出席
97. 6. 2～ 6. 3	西尾太加二	静岡県埋蔵文化財調査研究所主任研究員	「海外学術調査員および研究者のための保存修復講座」講師
97. 7. 9～ 7. 10	千葉 光一	名古屋大学工学部助教授	ICP-MS による考古遺物中極微量元素の定量に関する研究
97. 7. 10～ 7. 12	石塚 純一	札幌大学文化学部講師	美術史研究とメディア論
97. 7. 15～ 7. 16	神庭 信幸	国立歴史民俗博物館助教授	博物館・美術館等の保存修復担当学芸員研修の講師
97. 8. 17～ 8. 23	永石 祐次	福岡県立太宰府高等学校教諭	東京国立文化財研究所蔵中国仏教美術拓本資料調査の指導・助言
97. 9. 5	千葉 光一	名古屋大学工学部助教授	ICP-MS による考古遺物中極微量元素の定量に関する研究
97. 9. 7～ 9. 13	植野 健造	石橋美術館学芸員	黒田および白馬会関係資料のデータ化に関する研究
97. 9. 19	奥谷 禎一	神戸大学名誉教授	文化財保存修復研究協議会への出席
97. 9. 19	岡部 央	群馬県立歴史博物館学芸課長	文化財保存修復研究協議会への出席
97. 9. 19	神庭 信幸	国立歴史民俗博物館助教授	文化財保存修復研究協議会への出席
97. 9. 19	森田 恒之	国立民族学博物館第五研究部教授	文化財保存修復研究協議会への出席
97. 10. 14～10. 18	石川 祐一	京都市市民文化局文化部文化財保護課文化財保護技師	第7回アジア文化財保存セミナーへの出席
97. 10. 14～10. 18	河原 伸治	京都市市民文化局文化部文化財保護課文化財保護技師	第7回アジア文化財保存セミナーへの出席
97. 10. 15～10. 18	福田 敏朗	京都府教育委員会文化財保護課建造物第二係長	第7回アジア文化財保存セミナーへの出席
97. 10. 21～10. 22	西藤 清秀	奈良県立橿原考古学研究所主任研究員	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席

期 間	氏 名	所 属	理 由
97. 10. 21～10. 22	佐々木達夫	金沢大学教授	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 21～10. 22	西藤 清秀	奈良県立橿原考古学研究所主任 研究員	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 21～10. 22	内田 俊秀	京都造形大学教授	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 21～10. 23	岡 信治	(財)文化財建造物保存技術協会熊 谷家住宅修理設計監理事務所長	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	渡辺 勝彦	日本工業大学教授	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	山田 幸正	東京都立大学助手	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	森田 恒之	国立民族学博物館教授	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	宗田 好史	京都府立大学助教授	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	宮川 朝一	(財)リバーフロント整備センター	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	松田 泰典	東北芸術工科大学助教授	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	増田千次郎	日本建築セミナー	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	増澤 文武	(財)元興寺文化財研究所保存科 学センター長	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	日高健一郎	筑波大学芸術学系助教授	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	濱崎 一志	滋賀県立大学助教授	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	西山 要一	奈良大学教授	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	友田 正彦	(株)文化財保存計画協会	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	友田 博通	昭和女子大学教授	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	近森 正	慶應義塾大学教授	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	谷本 親伯	京都大学助教授	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	高妻 洋成	奈良国立文化財研究所	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	小西 正捷	立教大学教授	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	工藤父母道	プロジェクト・ワールドヘリテッ ジ総括	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	木村 勉	奈良国立文化財研究所建造物研 究室長	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	大井 邦明	京都外国語大学教授	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	海老沢孝雄	(株)ぎ・エトス代表取締役	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	今津 節生	奈良県立橿原考古学研究所	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	伊原 恵司	(財)文化財建造物保存技術協会 常務理事	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	伊藤 延男	元東京国立文化財研究所長	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	石澤 良昭	上智大学教授	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	松本 健	国士舘大学教授	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	神庭 信幸	国立歴史民俗博物館助教授	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	矢野 和之	(株)文化財保存計画協会代表取締役	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 22	大西國太郎	京都芸術短期大学客員教授	第2回アジア文化財保存修復研究会への出席
97. 10. 27～10. 31	冷泉 為人	大手前女子大学教授	近世肖像画研究

期 間	氏 名	所 属	理 由
97. 10. 28～10. 29	杉 市和	能楽師、森田流笛方	芸能部公開学術講座
97. 10. 29	上 明彦	宮内庁楽部楽長補	芸能部公開学術講座
97. 10. 29	東儀 季祥	宮内庁楽部楽師	芸能部公開学術講座
97. 10. 29	観世 元伯	能楽師、観世流太鼓方	芸能部公開学術講座
97. 10. 29	中川 善雄	長唄囃子方（笛）	芸能部公開学術講座
97. 10. 29	杵屋栄八郎	長唄三味線方	芸能部公開学術講座
97. 11. 14	河野 泰典	MOA 美術館学芸部学芸課学芸員	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
97. 11. 14	岡部 央	群馬県立歴史博物館学芸課長	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
97. 11. 14～11. 15	伊藤 実	広島県立歴史民俗資料館	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
97. 11. 14～11. 15	石川登志雄	京都府教育庁指導部文化財保護課管理調査係	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
97. 11. 14～11. 15	青山 訓子	岐阜県美術館学芸課学芸員	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
97. 11. 14～11. 15	宮 衛	石川県立美術館学芸主査	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
97. 11. 14～11. 15	御厨 義道	香川県立歴史博物館建設準備室学芸員	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
97. 11. 14～11. 15	松田 隆嗣	福島県立博物館学芸員	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
97. 11. 14～11. 15	長谷川孝徳	石川県立歴史博物館学芸主任	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
97. 11. 14～11. 15	長屋菜津子	愛知県美術館学芸員	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
97. 11. 14～11. 15	中村 康	京都国立博物館文化財保存修理管理指導室	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
97. 11. 14～11. 15	田中 善明	三重県立美術館学芸員	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
97. 11. 14～11. 15	田中 弘道	鳥取県立博物館学芸課長	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
97. 11. 14～11. 15	寺島 弘道	北海道立帯広美術館学芸課長	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
97. 11. 14～11. 15	小林 幸雄	北海道開拓記念館業務部展示課学芸員	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
97. 11. 14～11. 15	宇治谷 恵	国立民族学博物館情報管理施設情報企画課標本資料係長	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
97. 11. 21～11. 22	尾立 和則	東洋絵画修復家	「紙の保存修復」国際研修への出席・講師
97. 11. 24～11. 27	取出 伸夫	佐賀大学農学部助教授	「多孔質中の水分・塩分移動と塩類風化のメカニズム」研究会への出席
97. 11. 24～11. 27	ルージ・ゲリット	佐賀大学農学部助教授	「多孔質中の水分・塩分移動と塩類風化のメカニズム」研究会への出席
97. 11. 24～11. 27	井上 光弘	鳥取大学乾燥地域研究センター助教授	「多孔質中の水分・塩分移動と塩類風化のメカニズム」研究会への出席
97. 11. 25～11. 26	沢田 正昭	奈良国立文化財研究所研究指導部長	「多孔質中の水分・塩分移動と塩類風化のメカニズム」研究会への出席

期 間	氏 名	所 属	理 由
97. 11. 25～11. 27	溝口 勝	三重大学生物資源学部助教授	「多孔質中の水分・塩分移動と塩類風化のメカニズム」研究会への出席
97. 11. 30～12. 6	千野 香織	学習院大学教授	第21回文化財の保存に関する研究集会への出席
97. 12. 2～12. 5	山口 昌男	札幌大学教授	第21回文化財の保存に関する研究集会への出席
97. 12. 2～12. 5	宮崎 法子	実践女子大学教授	第21回文化財の保存に関する研究集会への出席
97. 12. 2～12. 5	高木 博志	北海道大学助教授	第21回文化財の保存に関する研究集会への出席
97. 12. 2～12. 5	北澤 憲昭	跡見学園女子大学教授	第21回文化財の保存に関する研究集会への出席
97. 12. 2～12. 5	金子 一夫	茨城大学教授	第21回文化財の保存に関する研究集会への出席
97. 12. 2～12. 5	加藤 哲弘	関西学院大学教授	第21回文化財の保存に関する研究集会への出席
97. 12. 2～12. 5	石塚 純一	札幌大学講師	第21回文化財の保存に関する研究集会への出席
98. 2. 1～ 2. 7	山名 伸生	京都精華大学人文学部助教授	中国仏教美術調査研究協力および研究協力者会議への出席
98. 2. 8～ 2. 10	宇治谷 恵	国立民族学博物館情報管理施設情報企画課標本資料係長	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
98. 2. 8～ 2. 10	宮 衛	石川県立美術館学芸主査	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
98. 2. 8～ 2. 10	中村 康	京都国立博物館文化財保存修復管理指導室	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
98. 2. 8～ 2. 10	寺島 弘道	北海道立帯広美術館学芸課長	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
98. 2. 8～ 2. 10	田中 善明	三重県立美術館学芸員	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
98. 2. 8～ 2. 10	小林 幸雄	北海道開拓記念館業務部展示課学芸員	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
98. 2. 9	塚田 全彦	国立西洋美術館学芸課	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
98. 2. 9	森田 稔	文化庁文化財保護部美術工芸課文化財管理指導官	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
98. 2. 9	河口 公夫	国立西洋美術館学芸課	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
98. 2. 9	田中 千秋	石橋財団ブリヂストン美術館学芸員	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
98. 2. 9～ 2. 10	岡部 央	群馬県立歴史博物館学芸課長	「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」研究会への出席
98. 2. 17～ 2. 20	茂山千之丞	能楽師	大藏流狂言謡の録音
98. 2. 22～ 2. 27	菊竹 淳一	九州大学文学部教授	中国仏教美術調査研究協力および研究協力者会議への出席
98. 2. 23～ 2. 27	張 洋一	堺市博物館学芸課研究員	江戸末・明治初期の彫刻に関わる資料の共有化に関する研究
98. 2. 25～ 3. 5	野口 英雄	ユネスコ文化遺産部主席専門官	文化財の保存修復についての国際協力に関する研究
98. 3. 1～ 3. 7	佐藤 智水	岡山大学文学部助教授	中国仏教美術調査研究協力および研究協力者会議への出席
98. 3. 1～ 3. 7	北川 央	大阪城天守閣学芸員	肖像画データベースにおけるデータ記述の研究
98. 3. 2～ 3. 3	沢田 正昭	奈良国立文化財研究所研究指導部長	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 2～ 3. 3	内田 昭人	奈良国立文化財研究所主任研究官	第3回国際文化財保存修復研究会への出席

期 間	氏 名	所 属	理 由
98. 3. 2～ 3. 3	佐々木達夫	金沢大学教授	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 2～ 3. 3	肥塚 隆保	奈良国立文化財研究所遺物処理研究室長	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 2～ 3. 3	西村 康	奈良国立文化財研究所測量研究室長	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 2～ 3. 4	伊藤 重剛	熊本大学助教授	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 2～ 3. 4	本田 光子	別府大学助教授	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 2～ 3. 4	山田 拓伸	宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 主幹研究員	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	工藤父母道	プロジェクト・ワールドヘリテッジ 総括	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	今津 節生	奈良県立橿原考古学研究所保存 科学研究室長	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	内田 俊秀	京都造形芸術大学教授	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	伊藤 延男	神戸芸術工科大学名誉教授	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	泉田 英雄	豊橋技術科学大学助教授	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	新井 英夫	東京芸術大学客員教授	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	浅野 和生	愛知教育大学助教授	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	松田 真一	シルクロード学研究センター研究主幹	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	坂井 隆	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業 団専門員	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	西藤 清秀	奈良県立橿原考古学研究所主任 研究員	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	金城 直子	(財)元興寺文化財研究所研究員	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	大西國太郎	京都芸術短期大学客員教授	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	大井 邦明	京都外国語大学教授	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	遠藤 宣雄	上智大学客員教授	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	海老澤孝雄	(株)ざ・エトス代表取締役	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	宗田 好史	京都府立大学助教授	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	宮川 朝一	(財)リバーフロント整備センター 研究第二部長	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	松田 泰典	東北芸術工科大学助教授	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	増澤 文武	(財)元興寺文化財研究所保存科 学センター長	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	増井 正哉	奈良女子大学助教授	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	濱崎 一志	滋賀県立大学助教授	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	谷 一尚	共立女子大学助教授	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	藤木 良明	(株)スペース・ユニオン代表取締役	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	松本 健	国士舘大学教授	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 3	野尻 孝明	(財)文化財建造物保存技術協会 監理課主任	第3回国際文化財保存修復研究会への出席
98. 3. 13	千葉 光一	名古屋大学工学部助教授	ICP-MS による考古遺物中極微量元素の定量に 関する研究
98. 3. 23～ 3. 24	千葉 光一	名古屋大学工学部助教授	ICP-MS による考古遺物中極微量元素の定量に 関する研究

3. 海外研究者等の来訪

(1) 来訪研究員

氏 名	国 籍	所 属 等
エリン・ダーレン	ノルウェー	ノルウェー環境研究所
レイモンド・テウニス・ーヴェンブルグ	オランダ	家具修復家
デイ・ネグリ・ジャスミーナ	イタリア	ベニス東洋美術館
黄麗淑	台 湾	省手工業研究所

(2) 表敬訪問

日 時	氏 名	国 籍	所 属 等	目 的
1997年4月	小川 盛弘	アメリカ	メトロポリタン美術館	日本美術品の修理打ち合わせ
1997年8月	鄭 文 教	韓 国	文化財管理局長	視察
1997年11月	高 柄 翊 (ほか2名)	韓 国	文化財委員会委員長	視察
1997年6月	胡 偉	中 国	中央美術学院	学院主催「巻軸絵画修復上級研修会」の協力依頼および打ち合わせ
1997年8月	胡 偉	中 国	中央美術学院	学院主催「巻軸絵画修復上級研修会」の協力依頼および打ち合わせ
1998年2月	胡 偉	中 国	中央美術学院	学院主催「巻軸絵画修復上級研修会」の協力依頼および打ち合わせ
1997年10月	呉 景 平 (ほか3名)	中 国	復旦大学歴史学部副学部長	視察
1997年12月	W. F. フェイト	ド イ ツ	ベルリン東洋美術館長	日本美術品の修理・打ち合わせ
1998年2月	G. A. ガバラ	エジプト	文化省考古最高会議議長	視察
1998年2月	ザヒ A. ハウス	エジプト	文化省考古最高会議遺跡総局長	視察

6. 主な所蔵資料

1. 図書資料

(1) 美術関係図書

日本・東洋・欧米の美術に関する書籍を中心に、各地方公共団体編集の文化財関係調査報告書、展覧会の図録・目録類、売立目録、美術関係雑誌（和文1,940種・韓文34種・中文98種・欧文391種）等を所蔵している。

特色としては江戸期の版本や明治大正期刊行の大型図録・明治期開催博覧会関係資料・明治から昭和初期にかけて発行された和文美術雑誌など、多くの貴重書を所蔵している。

(2) 芸能関係図書

雅楽・享楽・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・民俗芸能・寄席芸、その他わが国の伝統芸能の研究に必要な図書10,262冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報・歌舞伎（第1次）・テアトロ（第1次）・新劇・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説などの雑誌、それに声明本・謡本・囃子手付本・丸本などの台本・譜本も収集している。

(3) 保存科学・修復技術関係図書

伝統的生産及び工芸技術書、技術史またはそれらの科学的究明を試みたもの、修理工事報告書および化学・物理学・生物学部門の保存科学の関連和洋書、合わせて3,481冊を所蔵している。

本年度における収集数と総計は次表の通りである。

区分(1997年度)	美術関係	芸能関係	保存科学・修復技術関係	計
和漢書	433冊	312冊	50冊	1,072冊
洋書	151冊	25冊	101冊	

2. そ の 他

(1) 美術関係資料

実物よりの直接撮影を主にした写真資料の作成と、購入写真・複写写真による補足整備に加えて、印刷物中の図版をおさめるという方式で、当研究所設立当初より一貫して力を注いできた写真資料を有する。それらは日本東洋古美術、日本近代・現代美術、西洋美術の全域にわたり、それぞれ絵画・書籍・彫刻・工芸・建築等の諸部門に及ぶ。特別大型のものから小型のものまで総数凡そ 26 万点、原板保有量はほぼ 3 分の 1 にあたり、別にマイクロ・フィルム 255 巻がある。写真資料のほか、拓本、作家伝記資料、落款印章資料、近代・現代作家・団体・作品資料、資料スタック等と図書カード・図版カード・各種索引類など多数。

(2) 芸能関係資料

レコード、録音テープ、シネフィルム、ビデオテープ、写真等による芸能資料を数多く備えている。レコードには、毎年各社から発売される伝統芸能関係レコードのほか、1960（昭和 35）年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションレコード 5,450 枚が含まれている。安原コレクションは、明治・大正・昭和 3 代にわたって発売された各種邦楽レコードを網羅したもので、近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。録音テープ、ビデオテープおよび写真は、雅楽・能・歌舞伎・邦楽・邦舞・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので、演奏法の解析を中心とした写真、テープ、あるいは各種文書の記録写真等も含んでいる。資料別の所蔵数は、つぎのとおりである。

区 分	録音テープ		シネフィルム		ビデオテープ	
	analog	digital	8mm	16mm	VHS 方式	8mm
1997 年度	0 本	0 本	0 本	0 本	95 本	18 本
合 計	2,922 本	336 本	198 本	4 本	485 本	105 本

区 分	音 盤		
	SP・LP	CD	VHD・LD
1997 年度	1 枚	416 枚	0 枚
合 計	7,119 枚	572 枚	16 枚

(3) 保存科学・修復技術関係資料

考古遺物や美術工芸品など、諸部門の文化財を撮影した X 線フィルム多数を所蔵する。X 線透視撮影は昭和 20 年代から力を注いで行われており、近年それらのデータをデジタル化し、整理する作業を進めている。その一部は 1997（平成 9）年度に「X 線フィルム」目録「考古資料」として公開された。

7. 研究所関係資料

1. 設立の経緯

東京国立文化財研究所は、1952（昭和27）年4月1日に発足したが、その前身であり母体となったものは、昭和5年に創設された政府機関の帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、1921（大正13）年7月、帝国美術院長子爵故黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために寄附出捐した資金で遺言執行人が選定決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行うべき事業の選定を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原鏡二郎及び東京美術学校校長正木直彦とはかって諸方面の意見を徴し、またわが国美術研究の必要に照らして次の事業を行うこととした。

- (1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
- (2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
- (3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
- (4) 事業成立の上は一切これを政府に寄附すること。

2. 年代別重要事項

期 日	事 項
昭和元年12月	前記の事業を遂行するため委員会が組織され、東京美術学校校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業については東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列については東京美術学校教授久米桂一郎・岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二及び大給近清、建物造営については東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務については遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。
昭和2年2月	美術研究所準備事業を開始した。
同 年10月	東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1,192㎡の建物1棟を起工した（本館）。
昭和3年9月	前記の建物が竣工したので、黒田記念館と名付け、美術研究所開設のため必要な備品・図書・写真等の研究資料を設備し、また館内に黒田子爵記念室を設け、黒田清輝の作品を陳列した。
昭和4年5月	遺言執行人代表者樺山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。
昭和5年6月28日	勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ、東京美術学校校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。
同 年10月17日	美術研究所開所式を挙行政した。
昭和7年1月	美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期刊行物『美術研究』を創刊した。
同 年4月18日	株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う5か年間毎年5千円、合計2万5千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。
同 年5月26日	帝国美術院はこの申出を受理した。 明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行うことになった。
昭和9年10月18日	毎年10月18日を開所記念日と定めた。
昭和10年1月28日	鉄筋コンクリート造、2階建、延面積129㎡の書庫が竣工した。
同 年4月	『日本美術年鑑』の編纂事務を開始した。
同 年6月1日	勅令第148号により美術研究所官制が公布された。

	研究資料閲覧規定を制定し、閲覧事務を開始した。
昭和12年6月24日	勅令第281号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来、帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。
同 年11月29日	美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。
昭和13年2月12日	木造、平屋建、延面積97㎡の写真室1棟が竣工した。
昭和19年8月10日	黒田清輝の作品、並びに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。
昭和20年5月28日	美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町1丁目本間家倉庫3棟に疎開した。
同 年7～8月	酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため、さらに酒田市外牧曾根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。
昭和21年3月29日	酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。
同 年4月4日	酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し、引揚げを完了した。
同 年4月16日	東京都西多摩郡に疎開中の黒田清輝作品並びに写真原版の引揚げを完了した。
昭和22年5月1日	美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。
	国立博物館に保存修理課発足。同課内に保存技術研究室を置いた（保存科学部の前身）。昭和23年度より専任の職員を配置し、研究を開始した。研究室は国立博物館本館地下の修理室の一室（66㎡）に設けた。
昭和25年8月29日	文化財保護法の制定にともない、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。
同 年8月29日	文化財保護委員会事務局設置にともない、保存科学研究室は国立博物館保存修理課から文化財保護委員会事務局保存部建造物課に所属換えとなった。
昭和26年1月31日	美術研究所組織規程が定められ第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。
昭和27年4月1日	文化財保護法の一部が改正、東京文化財研究所組織規程が定められ、美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の3部1室が置かれ、美術研究所組織規程が廃止された。
同 年7月1日	また文化財保護委員会事務局保存部建造物課保存科学研究室も廃止された。 芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室2室を同大学から借用し、研究を開始した。
昭和28年4月26日	保存科学部研究室として、東京国立博物館構内の倉庫132㎡を改造のうえ移転した。
昭和29年7月1日	東京文化財研究所組織規程の一部が改正され、東京国立文化財研究所となった。
昭和32年3月22日	東京国立博物館構内に木造、外部鉄網モルタル塗、平屋建、8㎡の保存科学部の薬品庫が竣工した。
同 年11月30日	従来の2階建書庫の上にさらに1階を増築3階建とし、増築分延面積71㎡が竣工した。
昭和34年4月30日	東京国立文化財研究所研究受託規程が定められ、この年度から受託研究が開始された。
昭和36年9月16日	東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、従来の庶務室は庶務課となった。
昭和37年3月31日	東京国立博物館内に保存科学部庁舎（保存科学部実験室）として、鉄筋コンクリート造、2階建、延面積663㎡の建物1棟が竣工した。
同 年7月1日	東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。
同 年7月20日	芸能部研究室は、保存科学部庁舎の竣工にともない、旧保存科学部庁舎に移転した。
昭和43年6月15日	文部省設置法の一部が改正され、本研究所は文化庁附属機関となった。
昭和44年8月23日	保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎（延1,950.41㎡）の起工式が行われた。
昭和45年3月25日	前記の別館が竣工したので、同年5月26日竣工式が行われた。
同 年3月25日	芸能部は、別館3階に移転した。
同 年5月8日	保存科学部は別館の地階～2階に実験用機械類の移転据付を完了した。
同 年6月29日	保存科学部庁舎の1階の模様替工事に着手し、同年10月15日工事が完了した。
同 年11月2日	所長及び庶務課は、本館から保存科学部庁舎の1階に移転した（本館は、美術部庁舎となる）。 これにより研究所の所在地表示は「12番53号」が「13番27号」に変更された。

昭和46年4月1日	保存科学部庁舎及び別館の敷地 2,658 m ² を東京国立博物館から所管換された。
昭和48年4月12日	文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部が設けられ4部1課となり、修復技術部に第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室が置かれ、保存科学部修理技術研究室は廃止された。
昭和52年4月18日	文部省設置法施行規則の一部が改正され、情報資料部の新設により5部1課となり、情報資料部に文献資料研究室及び写真資料研究室が置かれ、美術部資料室は廃止された。
昭和53年3月20日	本館構内の写場等（木造、平屋建、延面積 144 m ² ）を取りこわし、情報資料部研究棟として、鉄筋コンクリート造、地下1階、地上3階、延面積 569.95 m ² の建物が竣工した。
昭和53年4月5日	文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部に第三修復技術研究室が置かれた。
昭和59年6月28日	文部省組織令が改正され、本研究所は文化庁施設等機関となった。
平成2年10月1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、新たにアジア文化財保存研究室が置かれ、5部1室1課となった。
平成5年4月1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、アジア文化財保存研究室は、国際文化財保存修復協力室となった。
平成7年4月1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、国際文化財保存修復協力室が廃止され、新たに国際文化財保存修復協力センターが設置された。同センターには、企画室及び環境解析研究指導室が置かれ、1センター5部1課となった。
平成7年4月1日	東京芸術大学と「東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻の教育研究に対する連携・協力に関する協定書」が交わされ、連携併任分野として独立専攻大学院文化財保存学専攻（システム保存学）が設置された。
平成8年8月2日	新営建物建築工事の着工式を挙行政した。
平成9年10月1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、国際文化財保存修復協力センターに保存計画研究指導室が置かれた。

3. 歴代所長（昭和5年～平成9年）

役 職	氏 名	期 間
主 事	正 木 直 彦	昭和 5. 6. 28～昭和 6. 11. 24
主 事	矢 代 幸 雄	昭和 6. 11. 25～昭和 10. 5. 31
所長事務取扱	和 田 英 作	昭和 10. 6. 1～昭和 11. 6. 21
所 長	矢 代 幸 雄	昭和 11. 6. 22～昭和 17. 6. 28
所長事務取扱	田 中 豊 蔵	昭和 17. 6. 29～昭和 22. 8. 15
所 長	田 中 豊 蔵	昭和 22. 8. 16～昭和 23. 5. 10
所長代理	福 山 敏 男	昭和 23. 5. 11～昭和 24. 8. 30
所 長	松 本 栄 一	昭和 24. 8. 31～昭和 27. 3. 31
所長事務代理	矢 代 幸 雄	昭和 27. 4. 1～昭和 28. 10. 31
所 長	田 中 一 松	昭和 28. 11. 1～昭和 40. 3. 31
所 長	関 野 克	昭和 40. 4. 1～昭和 53. 3. 31
所 長	伊 藤 延 男	昭和 53. 4. 1～昭和 62. 3. 31
所 長	濱 田 隆	昭和 62. 4. 1～平成 3. 3. 31
所 長	西 川 杏太郎	平成 3. 4. 1～平成 8. 3. 31
所 長	渡 邊 明 義	平成 8. 4. 1～現在

4. 名誉研究員

氏 名	退 職 時 官 職 名	在 所 期 間	名誉研究員 発令年月日
白 畑 よ し		昭和 5. 6. 30～昭和 27. 8. 1	昭和 53. 10. 18
高 田 修	美術部長	昭和 27. 12. 1～昭和 44. 3. 31	昭和 53. 10. 18
登 石 健 三	保存科学部長	昭和 27. 10. 1～昭和 50. 4. 1	昭和 53. 10. 18
岡 畏 三 郎	美術部長	昭和 20. 5. 15～昭和 51. 4. 1	昭和 53. 10. 18
関 野 克	所長	昭和 40. 4. 1～昭和 53. 4. 1	昭和 53. 10. 18
秋 山 光 和	美術部第一研究室長	昭和 16. 10. 1～昭和 42. 2. 1	昭和 54. 10. 18
久 野 健	情報資料部長	昭和 20. 5. 31～昭和 57. 4. 1	昭和 57. 10. 18
川 上 湮	美術部長	昭和 21. 2. 28～昭和 57. 4. 1	昭和 57. 10. 18
関 千 代	美術部第二研究室長	昭和 18. 12. 15～昭和 58. 4. 1	昭和 58. 10. 18
横 道 萬 里 雄	芸能部長	昭和 28. 3. 16～昭和 51. 4. 1	昭和 59. 10. 18
上 野 ア キ	情報資料部文献資料研究室長	昭和 17. 11. 3～昭和 59. 4. 1	昭和 59. 10. 18
江 上 綏	情報資料部主任研究官	昭和 38. 5. 18～昭和 59. 3. 31	昭和 59. 10. 18
田 村 悦 子	美術部主任研究官	昭和 22. 6. 16～昭和 60. 3. 31	昭和 60. 10. 18
猪 川 和 子	情報資料部文献資料研究室長	昭和 22. 6. 27～昭和 60. 3. 31	昭和 60. 10. 18
伊 藤 延 男	所長	昭和 53. 4. 1～昭和 62. 3. 31	昭和 62. 10. 18
柳 澤 孝	美術部長	昭和 21. 9. 30～昭和 62. 3. 31	昭和 62. 10. 18
三 隅 治 雄	芸能部長	昭和 27. 10. 1～昭和 63. 3. 31	昭和 63. 10. 18
樋 口 清 治	修復技術部長	昭和 37. 11. 1～昭和 63. 3. 31	昭和 63. 10. 18
田 實 榮 子	美術部主任研究官	昭和 23. 3. 31～平成元. 3. 31	平成元. 10. 18
見 城 敏 子	保存科学部物理研究室長	昭和 34. 4. 1～平成元. 3. 31	平成元. 10. 18
濱 田 隆	所長	昭和 62. 4. 1～平成 3. 3. 31	平成 3. 10. 18
関 口 正 之	美術部長	昭和 42. 2. 1～平成 3. 3. 31	平成 3. 10. 18
佐 藤 道 子	芸能部長	昭和 34. 4. 1～平成 4. 3. 31	平成 4. 10. 18
馬 淵 久 夫	保存科学部長	昭和 50. 10. 1～平成 4. 3. 31	平成 4. 10. 18
新 井 英 夫	保存科学部長	昭和 45. 9. 1～平成 5. 3. 31	平成 5. 4. 1
石 川 陸 郎 ^{*1}	保存科学部主任研究官	昭和 32. 4. 15～平成 5. 3. 31	平成 5. 4. 1
西 川 杏 太 郎	所長	平成 3. 4. 1～平成 8. 3. 31	平成 8. 4. 1
門 倉 武 夫	保存科学部生物研究室長	昭和 32. 4. 1～平成 8. 3. 31	平成 8. 4. 1
三 輪 英 夫	美術部第二研究室長	昭和 53. 8. 1～平成 8. 3. 31	平成 8. 4. 1

*1 1997年6月28日 逝去

5. 1997（平成9）年度予算

（単位：千円）

事 項	予 算 額
1. 人件費	406,671
2. 運営費	470,195
事業管理	33,969
一般研究	49,372
特別研究	166,801
受託研究	2,414
文化財保存修復の国際交流事業の促進等	189,784
国際文化財保存修復協力センター運営	9,855
重要資料緊急修理	18,000
3. 施設費	349,974
4. 文化財情報総合システムの整備	44,973
5. 文部本省	
各所修繕他	813
6. 文化庁	
文化財保存事業費	6,000
合 計	1,278,626

1997（平成9）年度特別研究一覧

（単位：千円）

事 項	予 算 額
中国仏教美術基準作品調査研究	6,917
日本近代美術の発展に関する明治後期から昭和初期の基礎資料作成作成	5,554
近代歌舞伎の伝承に関する研究	5,541
文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究	7,851
文化財における環境汚染の影響と修復技術の研究協力	72,022
文化財の保存を目的としたレンガの劣化現象と保存対策に関する調査研究	4,982
無公害な文化財生物劣化防除法の研究	8,007
研究用機器維持費	11,927
研究用機器整備（大気観測監視・記録システム他）	44,000
合 計	166,801

1997（平成9）年度科学研究費補助金交付一覧

（単位：千円）

研究種目	研究課題	研究代表者	交付額
基盤研究(A)	文化財収蔵庫の庫内空気環境調査法の公定化のための基礎的研究	佐野 千絵	4,400
〃	日本における美術史学の成立と展開	鶴田 武良	9,500
〃	古建築の保存を目的とした石材強化保存用合成樹脂の物性評価	西浦 忠輝	1,600
基盤研究(C)	環境の湿度変化が国宝中尊寺金色堂に与えた影響に関する研究	三浦 定俊	300
〃	古代日本の動物遺体のDNA解析	木川 りか	800
〃	弥生時代青銅器の産地推定	平尾 良光	800
〃	地方に残る雅楽・能楽の古楽器研究	高桑いづみ	2,000
〃	多孔質材料の凍結・融解による劣化機構の解明とその防止対策	石崎 武志	1,700
国際学術研究	タイ国レンガ造遺跡の劣化現象と保存対策に関する調査	西浦 忠輝	3,300
〃	古代東アジアにおける青銅器の変遷に関する考古学的・自然科学的研究	平尾 良光	5,500
〃	中国砂漠地帯における文化財の保存対策に関する共同研究	宮本長二郎	2,700
〃	文化財の微量試料分析法の開発	三浦 定俊	4,800
〃	建造物保存修復の理念及び方法に関する研究	松本 修自	6,800
特別研究員奨励費	絹などのたんぱく質材質試料の劣化状態のPy-GC-MSによる評価手法の確立	佐野 千絵*1	600
基盤研究(B)	染織文化財の展示、保存、管理に関する基礎的研究	佐野 千絵	400
合計			45,200

*1 研究分担者

1997（平成9）年度受託研究一覧

（単位：千円）

研究課題	受入額
装潢材料の生化学的研究	300
塑像如信上人坐像の修復処置研究	700
金唐革紙分析調査	1,414
合計	2,414

6. 関係法規

◎文部省組織令（抄）（昭59.6.28 政令第227号）
（最終改正 平9.8.22）

第2章 文化庁

第3章 施設等機関

（施設等機関）

第108条 文化庁長官の所轄の下に、文化庁に国語研究所を置く。

2 前項に定めるもののほか、文化庁に次の施設等機関を置く。

国立博物館

国立近代美術館

国立西洋美術館

国立国際美術館

国立文化財研究所

（国立文化財研究所）

第114条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

3 国立文化財研究所及びその支所の名称、位置及び内部組織は、文部省令で定める。

（研究施設の指定）

第115条 国立国語研究所及び国立文化財研究所は、法第5条第37条に規定する政令で定める研究施設とする。

◎文部省設置法施行規則（抄）（昭28.1.13 文部省令第2号）
（最終改正 平9.10.1）

第5章 文化庁の施設等機関

第4節 国立文化財研究所

第1款 名称及び位置

（名称及び位置）

第116条の9 国立文化財研究所の名称及び位置は、次の表に掲げるとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東京都台東区
奈良国立文化財研究所	奈良県奈良市

第1款の2 東京国立文化財研究所

（所 長）

第117条 東京国立文化財研究所に、所長を置く。

2 所長は、所務を掌理する。

（内部組織）

第118条 東京国立文化財研究所に、庶務課次の5部を置く。

一 美術部

二 芸能部

三 保存科学部

四 修復技術部

五 情報資料部

2 前項に定めるもののほか、東京国立文化財研究所に、国際文化財保存修復協力センターを置く。

(庶務課の事務)

第119条 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

- 一 職員の人事に関する事務を処理すること。
- 二 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。
- 三 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。
- 四 経費及び収入の予算、決算その他会計に関する事務を処理すること。
- 五 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。
- 六 庁内の取締りに関すること。
- 七 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属さない事務を処理すること。

(美術部の二室及び事務)

第120条 美術部に、第一研究室及び第二研究室を置く。

2 第一研究室においては、わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。

3 第二研究室においては、わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行うとともに黒田記念室に関する事務をつかさどる。

(芸能部の三室及び事務)

第121条 芸能部に、演劇研究室、音楽舞踊研究室及び民俗芸能研究室を置く。

2 演劇研究室においては、演劇及びその保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

3 音楽舞踊研究室においては、音楽及び舞踊並びにこれらの保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

4 民俗芸能研究室においては、民俗芸能及び保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(保存科学部の三室及び事務)

第122条 保存科学部に、化学研究室、物理研究室及び生物研究室を置く。

2 化学研究室においては、文化財及びその保存に関する化学的調査研究(分析化学的調査研究を含む。)を行い、並びにその結果の公表を行う。

3 物理研究室においては、文化財及びその保存に関する物理学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

4 生物研究室においては、文化財及びその保存に関する生物学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(修復技術部の三室及び事務)

第122条の2 修復技術部に、第一修復技術研究室、第二修復技術研究室及び第三修復技術研究室を置く。

2 第一修復技術研究室においては、木、漆その他次項及び第4項の材料以外のものを材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。

3 第二修復技術研究室においては、紙、布又は草を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。

4 第三修復技術研究室においては、石、土又は金属を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。

(情報資料部の二室及び事務)

第122条の3 情報資料部に、文献資料研究室及び写真資料研究室を置く。

2 文献資料研究室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る文献資料その他の資料(写真資料を除く)の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。

3 写真資料室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る写真資料の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。

(国際文化財保有修復協力センター)

第122条の4 国際文化財保存修復協力センターにおいては、文化財の分野における国際的な貢献に資するため、世界の文化財の保存修復に関する国際協力、資料収集、調査研究及びその結果の公表並びに専門的、技術的な研

修を行う。

(国際文化財保存修復協力センターの長)

第122条の5 国際文化財保存修復協力センターに長を置く。

2 前項の長は、国際文化財保存修復協力センターの事務を掌理する。

(国際文化財保存修復協力センターの三室及び事務)

第122条の6 国際文化財保存修復協力センターに企画室、環境解析研究指導室及び保存計画研究指導室を置く。

2 企画室においては、世界の文化財の保存修復に関する国際協力及び研修について、企画及び実施に係る事務を処理する。

3 環境解析研究指導室においては、世界の文化財の保存環境の解析に関する資料収集、調査研究及びその結果の公表並びに専門的、技術的な研修を行う。

4 保存計画研究指導室においては、世界の文化財の保存計画に関する資料収集、調査研究及びその結果の公表並びに専門的及び技術的な研修を行う。

(客員研究員)

第122条の7 東京国立文化財研究所に客員研究員を置くことができる。

2 客員研究員は、所長の命を受け、東京国立文化財研究所において行う調査研究に参画する。

3 客員研究員は、非常勤とする。

東京国立文化財研究所年報 1997 年度

1999 年（平成 11）2 月 1 日 発行

発行所 東京国立文化財研究所

〒110-8713 東京都台東区上野公園 13-27

TEL 03-3823-2241(代表)

FAX 03-3828-2434

<http://www.tobunken.go.jp>
